
びんぼー錬金術師の借金返済術

マニマニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

びんぼー錬金術師の借金返済術

【Nコード】

N5166J

【作者名】

マニマニ

【あらすじ】

過酷過ぎる過酷な運命に抗い戦い続けた少女。そんな彼女を待っていたのは、錬金術師としての仕事と、借金五億ゴールドだった。ありとあらゆる試練を鼻で笑い、踏みつけ、唾を吐きかけ、たくましく生きているエミリアのほのぼの借金返済の日々をご覧ください。

第一話 とある錬金術師の日常

その日は、その季節ではまれにみる絶好の洗濯日和。

お天道様はとても元気良く天で輝き、地上を照りつかせて、住宅街に住む奥様方はその光の恩恵を可能な限り受けようと、朝早くから洗濯物を次々に干していきます

子供達は数日続いていた暗雲とした天候から解放され、元気に外ではしゃいでいる、そんな日。

「……はあ」

住宅街と隣接する商店街では商人のおっちゃん達の高々とした呼び込みが此処まで届いています。商売用なのでしょう。季節の野菜を積む荷車がカラカラと通過していく様子が窓の外からも見えていました。

「……っはああああああああああ」

そんな、まさに素晴らしき一日が始まりそうなその時、私ことエミリア十五歳（ ）の心は寒々しい木枯しが吹いていました。

「何ですかさつきから。耳障りです」

そんな悲壮にくれる私の心に鞭を打つ様な容赦のない台詞、前を向くと、何時もこの店に顔を出してくれるリーンさんが呆れた顔で此方を見つめていました。

「可愛らしい乙女が悩ましげなため息をついているというのにその反応は何ですか」

「鬱陶しいです」

あまりに情け容赦のないその台詞に涙がこぼれそう。彼女は確か魔術学院の教師をやっている筈だというのに、子供に対しての愛の心がまったく感じられません。鬼です。

「そんなだから、生徒から距離を取られるんですよ」

「この前、告白されましたよ」

「へえ、物好きな男児もいたもんですね」

「いいえ、男児では無く女子でした」

「……出来ればその子には、若いうちから道を誤るなど諭してあげてください。」

「面倒なのでメリアの所に放り込んでおきました」

「……可哀そうなメリア先生」

深く同情いたしますが、今はそれ以上に自らの不幸を嘆く事で、私は手一杯でした。

「それで、今回は何の“新薬”調合に失敗したのですか？」

「初っ端から失敗って決めつけないでください。成功しました」

「おめでとございます。で、何を作ったんですか」

「育毛剤です」

沈黙、

「いくも……なんです？」

再起動を果たしたリン先生の私を見つめる目は、胡散臭い商人を見下す目と酷似していました。

「だから、育毛薬ですよ。毛が生える薬と書いて育毛薬」

「……それ、なんの役に？」

「世の、頭の寂しい男性陣の心を癒す効果が」

「……」

「あ、なんですか。その蔑むような視線。頭の悩みを抱えた人、結構多いんですよ？」

「いえ、それに関しては別に言う事はありません。が、錬金術師としての能力の使い方を完全に間違えているのではないかと」

「いいんですよ。錬金術師なんて胡散臭い物でしょう？」

錬金術師。そう。錬金術師。

私ことエミリア15才（ ）は、その非常に胡散臭く、怪しく、職業と言うべきなのかどうかも曖昧な、錬金術師と言う職業についていたりしちゃっておるのです。

錬金術師、錬金術師、嗚呼、我ながらなんと胡散臭い。

「両親が生きてたら泣いてますね」

「そう思うなら、もう少し社会に分かりやすい貢献を成す薬品でも作ってください」

「金になるなら、喜んで社会貢献いたしましょう」

「貴方の行動原理は其処ですか」

呆れたようなリーン先生のため息。でも、当然でしょう？

金にならない仕事をして何が嬉しいって話ですよ。

「それで？」

「それで、とは、なんです？」

「だから、育毛薬を作って、それで儲けたのでしょうか？どうして落ち込んでるんです？」

「……いえね、作って、売りさばいた、までは良かったんですよ」

そう、私のスポンサーになってくれた近所の禿げに悩むおっちゃん達。彼らに育毛薬を売りさばき、ついでにトリートメントシャンプーまで売りさばき、普段店で細々とした商売と比べると圧倒的な利益が手に入りました。

そう、あの時までは、確かにこの手に大量の金貨があったのです。

「なのに、なのに！」

声が後悔に震えます。そう、あの時私は浮かれ過ぎていた！普段な

口にしてしまつと頭がくらくらししました。五億。庶民なんかは生涯かけても絶対貯められない様な巨万の富です。意味が分かりません。五億ゴールドって何ゴールドでしたっけ？

「何でまたそんな……」

「さあ？賢者の石を作りたかつたみたいですけどお……あああああ
あ！」

ジジイは高名な錬金術師だったので、国家からの援助も受けてはいたのですが、賢者の石は余りにも夢物語すぎて援助を受けられなかった。らしいです。それは後から知つたのですが。

だからって弟子に借金を残さなきゃならんくらいならゾンビになつても生きとれ！と思います。

「貴方はその研究を続けないのですか？師匠の夢を引き継ぐ意思は無いの？」

「やってられませんよそんなの。私は凡人。時間と金を掛けても無理ですね」

あの超凄腕のジジイが生涯をかけなきゃならないような伝説級の代物を研究しようなどと全く思いません。そもそも現状はそんな事を言っていられる状態じゃないです。借金地獄です。

「まあ、そちらの方が私は助かりますけどね」

リン先生はそんなむごいことを言うと、ひょいと私が調べた魔法薬を数本手に取ると、そのまま私の前に銀貨を数枚置いて行きました

「貴方は腕が良いですから、助かっています」

「褒めても何も出ませんよ」

「残念ですね」

そうは言うものの特にそんな様子も見せないまま、彼女は店を去っていきます。

元はジジイの家だったこの建物を無理やり改築して生み出した店舗はシーンと静まり返り、物悲しい雰囲気流れます。ついでに私の心も寂しい。そして懐も。

とはいえ、落ち込んでいる訳にも行きません。

「……研究、しますか」

新たな新薬を開発し、多額すぎる借金を返す。その為に立ち止まる

暇はありません。

貧乏に暇などないのです

「目指せ借金返済！」

拳を突き上げ、己を鼓舞する為の叫びは店内に木霊しました

第二話 ざいりょうをあつめよう！

研究、研究です。錬金術師の基本研は研究。それが第一です。

とは言っても、賢者の石云々や、奇跡の靈薬云々を生み出すような、大層な研究ではありません。

実際、殆どの錬金術師は薬剤師に近い事をして生計を立てています。薬や、魔石やらを加工したり、時には新たな病を研究し、解明したりもする。結構曖昧な仕事です。

薬剤師と違う所は、彼らは現存する薬品を調合するのに対し、私達は未知なる薬品を調合するという点です。故に研究。新薬を生み出し、その効力の有益性を世間に知らしめ、スポンサーを手に入れさらなる研究を続ける。それが錬金術師の生活収入となります。

薬剤師のように自分で調合してその日の生活費をひねり出している錬金術師なんて私くらいのものでしょうか。だから早く、せめてお金を支援してくれる大きな組織が欲しいんですが……

「……………ぬう」

思わず変な声を出してしまいました。

錬金術師である以上、研究こそが生きる道です。そしてそのためには当然、ありとあらゆる研究のための材料が必要なのです。しかし、

「……まったくストックが無い」

普段ならある程度の材料のストックは用意してあるはずなのに、今日に限ってはまったく無い。

これは、やはりあの育毛薬に力を入れすぎたのが問題です。すっかり材料の補充を忘れていました。

「まずは材料集めからですか……」

ジジイの家から少し離れたところに存在する魔術学院、その近くに存在する鬱蒼とした森林。それがまるで私を迎え入れるようにざわめいています。

「……メンドクサイ」

とはいえ、材料が無い以上はいかなければ明日の食い持ちも怪しくなるのです。貧乏暇無し。世は無常です。私はしびしび身支度を整えると家を飛び出し、魔術学院の保有する森林へと足を伸ばしました。

「それでは採集開始」

日の光の刺す範囲が狭くなった時点で、森林のそこそこ深い所まで入り込んだことを示しています。あたるを見渡せば少し濃度の高いマナの影響を受け、いい感じに変異しているキノコやら何やらが目いっぱい存在します。

普通の人ならば不気味な光景ですが、私からすればそれは宝の山です。

「グリーンハーブ発見。グリーンハーブ発見。確保せよー」

時折、外的に対して毒を吹きかける植物まで存在します。故に採集の際には気を払い、また、取り過ぎないように適度に場所を移動しながらを繰り返します。

この場所は魔術学院の学院長の許可をもらって採集させてもらっているのです、ある程度の気遣いは残さなければなりません。いうなれ

ば学院長が私の唯一のスポンサー様と言えるでしょう。

「どうせならマネーも欲しいものですけど……」

と、贅沢な事を口にしてみますが、流石に其処まで彼も甘くはありません。せめて何らかの成果を手土産にしなければならぬでしょう。世の中は実力主義。塩っ辛いのです。

「ま、今そんな事を言っても仕方ありません」

今日は実験に使える材料が点在しています。場所を何時もの所と変えたのが良かったらしいですね。とにかく今は、明日の食い扶持を稼ぐためにも採集を続ける事としましょう！

第三話 ある日森の中魔獣さんに出会った

「迷子になりましたっっ!!」

何という事でしょう。仕事への熱意を意気込んでから数分、私は速攻で迷子になってしまいました。いくらなんでも早すぎです。本当に何という事でしょう。

「此処、何処ですか!?!」

試しに叫んでみましたが、誰も返事がありません。とうぜんですが。材料につられてふらふらしているうちに気がつけば森の奥深く。絶賛遭難中です。私

「……落ち着きましょう。素数を数えて。」

しかし私は心を乱さず、息を整えて落ち着きます。此処で焦ってはなりません。

こういう場面で取りみだしたりすれば、慌てふためいて森を駆け回り、結果として体力を奪われそのまま死亡、なんてパターンが見えます。落ち着かねばなりません。

「ふ、ふふふ！知的に、そしてクールに、この危機を脱してあげようではありませんか！」

体が震えているのは武者震いです。

断じて、今現在いるこの森の木々が風に煽られまるで生きている様に蠢いているのが怖い訳でも、大きな風がまるでバケモノの呻き声のように鳴り響いているのが恐ろしい訳でもありません。断じて。

「そう！方角！指針のチエエエエツク！」

とは言っても方位磁石などはありませんから、魔術で作ります。

地面から砂鉄を取り出し形を固め、大気中の水分をかき集めて其処に浮かべます。

これで簡易方位磁石完成。私つたらなんてできる女なんでしょう！方角さえ分かれば後はひたすらそっちに進めば何処かにはたどり着けます。

これで遭難脱出まっしぐら！

「街は確か森から見て南でしたから……」

ぶかぶかと浮かぶ磁石をじっと見つめます。

「……………」

「……なにやら、エライ勢いでグルングルンと磁石が回転なすっているのですが……」

「ふむ、どうやら森に満ちた魔力の影響で方位磁石が効果を成さなくなっているようですね……」

ほうほう成程、と自分の冷静な判断に相槌を打ちながら、私は頭を抱えました。

「……………どないしょ」

口調が変わるほどパニックに陥りました。

私、このままだと死ぬんじゃないですか？冗談抜きに。

そんな風に、本気で困り果てていたわけなのですが、

「……………おや？」

背後の草むらからガサガサと音がします。

これはもしか誰か助けに来てくれたのでしょうか？

「おやおや、呆気の無い解決ですね」

どうせなら私の錬金術師としての知的な解決法を見せてあげたかったのですが、残念！

しかし差し伸ばされた手をはねるのは無粋、と言う訳で助けを求めます。全力で！

「どなたか！かよわき乙女が絶賛遭難中です！お助けを！！」

「ガールルルルルルルル」

「わーお、随分ワイルドな返事ですね！？それではさようならっ！！」

私はワイルドな返答から背中を向けて全力で走りだしました。

「ガアアア」

私、スレンダーですから！お肉最近食べてませんから！美味しくないのでしょー！？

「ひいひいひいひい!!」

この森、奥深くまで進めば実は結構な魔物がいるのです!

結界で生徒達の入る所までは来れないようにしている、とは聞いていますが、私とその結界を抜け出してしまったという可能性は十分にあります!

幾らなんでも!ドラゴンやら何やらと戦う力は私にはありません!

「こつちこないでえええ!」

『落ち着け小娘!』

「落ち着けますかああ!……て、あれ?」

おや?何処かで聞き覚えのある声です。

後ろにいるのは魔獣の筈、なのに人の声、と言う事は。
走るのをやめ、背後を振り返ると、いたのはやはり魔獣

白雪のように美しい毛並み、雄々しき鬣、勇ましそうな表情の白き獅子が其処にいました。

そして、“彼”は

「アルマさん！」

『久しいな。小娘』

この森に住む、私の知り合いの魔獣さんでした。

『幾ら慣れ親しんだ森とはいえ、人の身で最低限の装備も無しに入る馬鹿があるか』

「返す言葉もありません。助かりました」

私は今、アルマさんのぶっさぶさの背中に乗りながら森の出口へと導いてもらっています。

彼は、私が此処で材料採集を始めたころからの友人だったりします。人のように高い知性と、強靱な肉体、目を引く美しい毛並み、その上高い魔力を保有する魔獣。何という完璧超人。もしも人間の男性だったら恋していたかもしれませぬ。

『何をまた、こんな奥深くまで入り込んでいたのだ？お前は』

「あれ、此処そんなに深い所でしたっけ？そんなに歩いた覚えは無いんですが」

『マナの純度が高く妖精も多いこの森は感覚を狂わすのだ』

「……そんな危なっかしい所を何故魔術学院が保有してんですか」

『元はそうではなかった。が、我の様な魔獣が増えてから変異が生じたのだ』

「あー、成程」

この森は、何でも厄介払いの森とも言われているらしいのです。世界各地の厄介者扱いされた存在がこの森に避難してきているとか。結果、魔の森となってしまったと。

アルマさんもその一人だとか。

『そう言う訳だ。決められた結界の張られた場所より深く入り込むのはやめておけ』

「了解です」

『返事は良いのだがな……お前は』

グルルルとため息のようアルマさんが喉を鳴らします。

「何ですか。その信用ならないというようなその口調」

『お前がこの前、森に住むドラゴンの血を奪おうと突っ込んでいたからだ！』

アルマさんは唸り声を上げながら此方を睨みます。ああ、そう言えばそんな事もありましたね。

「ドラゴンの血は不老の秘薬と言うのは有名な話ですから。」

『だからってナイフ片手に突っ込むな！相手が賢帝として有名な方だったから良かったものを！』

確かに、借金返済に目がくらんでいたとはいえ、少々暴走しすぎたのは否めません。あれが若さと言うものなのでしょう。大体数ヶ月前の話ですが。

「でも既に血は別の人に与えてしまつて効果が無いと聞いた時はショックでした……」

『命があつただけ良かったと思え……全くどうしてそう無茶をするのか』

「貧乏で借金まみれですから」

『借金……カネか。下らん概念だ。ヒトはどれだけ時が経とうと変わらん』

「ま、そうは言つても、そのシステムの外では生きていけないんですよ。ヒトは」

『お前なら生きていけそうな気もするがな』

「私は俗物に塗れて死んでいきたいんですよ。仙人なんて御免です」

と、そんな風に適当に会話を交わしているうちに見覚えのある光景が見えてきました。

『ここならマナの影響も少ない。研究の材料集めなら此処でしていい』

「ありがとうございます。アルマさん」

『別に良い。礼をしたいと言つならもつと自分を労れ。その無鉄砲な性格は心臓に悪い』

「はい」

『本当に、返事だけは良い』

そう言いながらも彼は再び深い森の中へと帰っていきます。

「今度、美味しいお肉でも持ってきてますねー」

その声をかけると後ろを向いたまま尻尾を振って返事をくれました。
そういう所はお茶目で可愛い。

「さてと」

何一つ問題無く、とはいえませんでした。まあ何とか様々な薬草等を採集できました。

家に帰り、実験の時間といたしましょうか。

第四話 ちょうじょうじよう！

錬金術師の実験、という言葉を聞くと、なにやらこう、何かと何かを調査してピカポツカンと何やらが完成する、というイメージを抱く方が多いです。事実私も、この錬金術師の仕事に携わる前はそう思っていました。

しかし、実際はもっと地味です。ええ、それはもう地道な作業の繰り返しです。

「マナ濃度リセット完了」

まず必要なのは部屋の換気。といっても部屋の窓を開ける訳ではなく、室内に満ちているマナを取り除き、実験に影響を与えないようにします。この真黒で悪趣味な実験室には実はそういった機能が備えられており、重宝しています。

「解析開始」

次に必要な材料の魔術解析。知っている材料でも時折、マナの影響を受けて突然変異している可能性もありますので、注意して調べます。それぞれの基本とされる数値が許容範囲以上、あるいは以下の場合はその場で除去、別の実験材料にします。

「調合」

そして調合開始。

まずは店に並べるポーションの作成。これはマンガにでも出てきそうな大きな壺で一括調合。それらを調整する魔術術式をかなり細かく設定してありますので、案外容易く完成します。

問題なのは新薬、あるいは新“毒”の開発。

これには兎に角根気が要ります。ポーション調合の時と比べると規模も縮小し、使用道具は鍋から試験ビンに変わります。が、労力はその規模の大きさと反比例します。

調合。調合。調合。調合。

マニュアルに沿って、あるいは既存の物とは全く異なるように、調合調合調合調合！

調合と同時に解析、分析、何らかの効果が表れればその時点で実験、実験実験実験！

先が見えませんが、ゴールが見えませんが、そんなものはありません。

時々、鬱になりそうになります。錬金術師で狂人が増える訳ですね。私も狂いそう。

「ああ、死ぬ。死んでしまっー」

幸い、ジジイの残してくれた唯一の財産、膨大な実験の結果のレポートが私にとっての唯一の羅針盤となってくれていますが、それでもやはりこの時間は辛いです。死にそうです。

「方向性はー決めているんですがーねー」

私個人の現在の目標は、『簡易な材料で作れる回復薬』の開発。この一点です。

理由は至極単純。一番需要があって売れそうだから。

現在も既に高度なレベルの回復薬は開発されているのですが、かなり高価なので、それこそ貴族レベルの金持ちしか簡単に手出しできない様な代物なのだそうです。

ならば安上がりな物を売ってしまえば間違いなく売れる！

我ながら安・直。

しかし安直だからこそ、真理でもありません。

事はそうたやすくないと分かっています、だからこそ、努力を続けなければ。

界らしいです。

強力な回復効果のある、しかし安価な魔法薬。やはり、言葉にするよりも遥かに難しい。前々から分かつてはいましたが。

強力な回復効果、と、安価である、の二つは並び立たない物だと痛感します。

回復魔法薬を生み出す為には回復効果を生み出す材料が必要な訳ですが、その材料に回復効果があるという事はその材料に価値が生まれるという事です。価値が生まれるという事は、その材料には必ず相応の金額がかかるという事で、即ち、完成品は更に高価になる。

「分かってます。分かってますよー」

初等クラスの子供達でも理解できるような単純な話なわけですが、その現実私の目の前に高くそびえたっておりませぬ。

高い効果には高い材料が必要。だけどそれを使つては意味が無い。

ならば安い材料からと考えつくのも当然ですが、前人達の手によつてそう言った材料の価格識別は調べ尽くされています。私はそう言った偉人達の目を掻い潜つた材料を見つけなければなりません。

それはまさに、砂漠の中から一粒のダイヤを探すに等しい、苦行でした。

「発想を、変える必要が、あるのかも、しれませぬ」

疲労に震える体を起き上がらせながら、部屋を出ます。眠い。恐ろしく疲れました。

もう今日は寝てしましましょうか。そうしましょうか。

そう思いながら扉をあけると、

「おんどりゃあああああああ！！店長でってこいやああアアア！！！」

とてつもなく不愉快な喚き声が、店から聞こえてきました。

ああ、もうマジ面倒くさい。殺してしまってよかですか？

第五話 チンピラと昔の仲間と救援物資（肉）

「でてこいつつってんだよおお！おらあああああ！！」

「ああ、はいはい。なんですかー？」

何かが壊れる音も一部していますので、やむなく顔を出します。

其処にいたのは、ええ、まあ、何と言いましようか。典型的なチンピラさんでした。敵つい顔で、まるで誇示するようにムキムキの筋肉を前面に押し出したチンピラ様が私の店で暴れていました。

「何じゃあ餓鬼いい！」

「私が店長を務めています。で、なんの要件でしょうか？」

チンピラさんは、私を見るとあからさまに見下した下品な笑みを浮かべました。

「お前んとこで買ったポーションに虫がはいってたんじゃああ！
！どつしてくれんねん！ああ！？」

これの持つビンの其処には確かにちっさい羽虫が一匹浮かんでいま

す。

……ちなみに、ポーシヨンは透明度が高いので当店に並ぶ前は不純物が入らないようにチエツクは欠かしていません。そもそも魔術によつて作業を進めていますから虫が入るなんてありえません。

「いやもんをつけられています。私。しかしなんとベタな。」

「チエツクはしていますから虫が入るなんてありえませんが。貴方が使用している最中に混入したものと思われれます。お引き取りを」

本来なら、此方に非が無い場合でも謝罪しなければならぬでしょう。しかし、こんな明らかに此方を脅すのが目的な野郎に下げる頭はありません。

「なめとんかわりやあああああああ！！！」

嗚呼、五月蠅い。こういう人たちって大きな声を出せば相手がビビってくれると思っっているんでしょうかね？必死すぎて逆に滑稽なんですけど、嗤っちゃっていいですか？

どんな風に罵ってやるうか、などと考えを巡らせます。すると、

「あら、コールじゃないですか」

そのチンピラさんの後ろに、何時の間にもやら、私の知り合いが突っ立っていました。

「ああん?! なんじゃわれえ「黙れ」おっばああああ!？」

次の瞬間、チンピラさんの顔面に硬く握りしめられた右ストレートが突き刺さりました。

その後、一先ずチンピラさんを紐で拘束し、床にころがして、私とコールは店裏にある唯一の居住スペースに移動しました。

「お前さ、いい加減錬金術師やめろ」

「まだ始めてから一年程しか経ってませんし、借金あります」

「踏み倒せ」

「踏み倒せる額ですか? 五億って?」

「夜逃げしろ」

「何処に逃げ込めと？」

「俺の家に来い」

「それ、遠回しな告白ですか？貴方彼女いるでしょう」

彼は額にしわを寄せ唸ります。何時もの会話。彼は本当に人が良い方です。所帯持ちの癖に。

コールは、身長二メートルの巨体に屈強な肉体を持ち合わせ、なお且つ顔立ちはきりりと勇ましさと逞しさの同居しているおっとこまえな男で、私の昔の仲間でした。

現在彼は近所のお肉屋のもとで働き、その店長さんの一人娘とラブラブしていたりします。

……憎らしい。幸せな人が憎い！私以外皆滅んでしまえばいいのに！！

ああ、落ち着きましょう。世界を憎んでも何にもなりません。

「それで、何の用ですか。私、これでも疲れているので出来れば早めに」

「肉、余り物を持ってきた」

「何時までもいてもらって結構です!!」

唐突にコールから後光が差ししました。嗚呼、救世主よ!

「ほれ」

「お、お、おおおおおお!!」

彼が無造作に差し出してきた袋の中には大量のお肉が入っておられました!

それも一つ一つが保存しやすいように、ある程度の加工されていて、何たる気遣い!

肉!久しぶりの肉!私の体に油分を!カサカサ肌にうるおいを!!

「はあああ!良いですねお肉!特に何処かの誰かに持ってかれない所が!!」

「……なんか、あつたのか」

「いえ、何も。ええ、何もありませんでしたとも!」

あの憎たらしい借金取りの事は思い出すと精神上良くないので、忘れるよう心がけましょう。

「いやあ、ほんとうに助かりますよ。コール」

「仲間なんだからこれくらい当然だ。恩を返す」

「そんな古い事を何時までも……律儀な方ですね」

まあ、おかげで助かってますが。

「それで、今日は私を救援物資を届けに来てくれたんですか？」

「いや、『リーダー』からの伝言。忠告に」

「忠告？」

コールが『リーダー』と呼ぶ人物は、私もよく知る彼なのは間違いないのですが、しかしその彼がわざわざ伝言？あまりそう言った事はしないタイプの筈なのですが。

「それで、その忠告と言うのは？」

「最近、ここ辺りがきな臭くなっている。」

「コール。貴方、言葉が足りなさすぎです。もうちょい詳しくお願
いします」

むう、とコールは唸ります。口下手な彼には説明しにくい内容なのでしょう。だとすれば何故彼に伝言を任せただ「リーダー」と言いたい。

「最近、他国の人間がこの国に来ている」

「ああ、最近近隣の国との関係が改善されましたもんね」

私達の住む国、アスティニア王国は最近まで隣国との緊張状態が続いていました。

どうしてか、と言うと、一言では言い表せるものではありませんが。価値観の違い。信奉する神の違い。肌の色の違い。瞳の色の違い。住んでいる土地の違い。なんとなく気が合わない。昔戦争を吹っ掛けたのは向こう側だと互いに思い込み、互いに憎み合っているなど。

それがここ最近、改善されてきている、らしいです。どうしてかまでは、興味ありませんが。

その結果、隣国の物資、知識、人材等、様々なものが多く流れ込み始めているとか。

「まあ、“良い事”ばかり流れ込むとは限りませんがね」

そう言つと、コールもこつくりと頷きました。

「最近この街に来た連中も、少しおかしい。注意した方がいい」

「成程……さっきのチンピラさんも、ひよつとしたら流れ者かもしれませんね」

ふと、店に転がっているであろうチンピラさんの顔を思い浮かべる。

思えば、ああ言った連中も私はそれなりに顔なじみである筈なのに、あのチンピラさんの顔は全く見た覚えが無い。そもそもどうしてこんな借金まみれの私の店を脅すような真似をしたのかについても、それを知らなかったという理由なら、まあ理解もできますし。

「ああ。流れて忘れていましたね。早く捨てないと、営業の邪魔になります」

コールも手伝つてください。と、言つと無言で頷いてくれました。

こういう風に無駄口をたたかず女性に尽くす所が、娘さんの心を射止めたのでしょうかね？

そんな、まったくもつてどうでもいいことを考えながら、晩御飯が豪華になる喜びで、比較的浮かれ気分です。ホップステップをかましていた私なのです、が、

「……は？」

店内に入った瞬間、頬がひくつきました。

店は、何者かの手によって徹底的に荒らされ、置いてあった装飾物が破壊され、ポーションは盗まれ、机は叩き割れていました。中央にはチンピラさんを捉えていた痕跡であるロープだけが、寂しく残されていました。

第六話 鬼降臨

破壊。破壊。破壊。兎に角その破壊が、私の店を襲っていました。

それはまるで店のど真ん中に爆弾でも投げ込まれたかのような惨状。

「エミリア……」

コールが静かに私に声を掛けます。彼は優しき人。私を気遣っているのでしょう。

ですが、残念なことに、今は彼の声も遠くに感じてしまいます。

別段、この店は昔ながら、私と共にあった訳ではありません。店として構えたのも最近です。

だけど、やはり愛着がありました。自分の生み出した店。自分だけの店。そう思えるだけで私の心に一つ、大きなものを残してくれる存在でした。

それが、今やこんな無残な有様。

「……つぶう」

嗚呼、この感情を、どう表現したらよいのでしょうか。

抑え様にも抑えきれない情動が、心の奥底から溢れかえります。

もう、ねえ？どうしてこういうことをするんですかね。本当に。

何処の誰でしょうね。いえ、実は分かっていますよ。だってあのチンピラさんがいないんですもん。つまり彼は助けられたってことでしよう？彼の仲間に。だからこんな有様になってしまったのでしょうか？

「ふつく……く、く」

喉から堪えられない声が漏れます。ああもう、耐えられない。

苦難、不幸、悪意、そう言ったものに襲われた事は、別に初めてではありません。むしろ人一倍経験豊富だと言っても良いでしょう。

だけれども、悲しい物は悲しい。苦しい物は苦しい。

「ふうふうつく、つくう」

だから、悲しくて、

日も完全に沈み、夜。満月が淡い光で街を包む深夜。

「何やってんだよ！暴れるな！つたただろ！」

「す、すみません！」

町はずれの洋館にて、罵声が飛び交った。

罵声を浴びせているのは、顔のあちこちに傷のある男達。

そして罵声を浴びせられているのは、エミリアの店を荒らしたチンピラ。

その様子を見て分かる通り、彼らはエミリアの店を荒らした犯人と、

その彼を助け出した一味だった。

彼らは、長年住んでいた住民の死去、近親者も扱いに困り手放した老朽化の進んだ古びた館。そんな、決して居心地が良いとはいえない様な場所に住みついていていた。

「……もういいだろう。落ち着けお前ら」

彼らの中でも一番の年長者の、ノイと言う男が切り上げるように声を上げ、全員が口を閉じる。

「今後、失敗の無いように努める。脅すつもりがのされちまうような事が無いようにな」

そう言うと、コールに殴り飛ばされた男がしょげるように頂垂れる。

本来、彼が店長を脅し、怯えさせるだけのつもりだったのだ。所が彼が捕まってしまう、助け出すと八つ当たりのつもりか店を荒らしたのだ。仲間とそろって。

悪い奴ではないのだが、気が荒いのが問題の男だ、と、ノイは頭を抱えた。

「……あの、やっぱりやめませんか？」

男達の中でも一番若い青年が手を挙げて提案する。この“仕事”を始めるのを一番渋っていたのは彼だ。

「出来るか。アホ。金もう貰っちゃまったんだぞ」

だが、彼の隣の男があっさりと却下を下した。そう。もうやめるわけにはいかないのだ。

「……くそ、なんだってこんな事になっちゃまったんだ」

無精ひげの男が呻き、項垂れる。それにつられて周りの連中も頭を下げる。

停滞する空気の中、ノイは今日一番の大きなためいを吐いた。

彼らは、エミリア達が丁度話していた、他国からの流れ者だった。

元々は傭兵の集団であった彼らは領国の関係が良好化すると同時に、厄介払いにあったのだ。唐突に職を失い、時刻に変える事もままならなくなつた彼らは、結果としてこの国に移り住む羽目になった。

しかし、この国においても、彼らはまともな職にありつけなかった。元より流れ者、おまけに元傭兵と言つとてもカタギとは言い難い職業。働くどころか住む所も見つけられず、この古びた洋館に浮浪者の様にすみつくしか道は無かった。

彼らと同じく流れ者だった者達は他にもいたが、今は行方も分からない。

残されたのはこの少数のみ。それでもその日の食料も買えない有様。

そんな時、彼らの前に、顔を隠したどう見たって胡散臭い男が、声をかけてきたのだ。

『“ある店”に嫌がらせをして欲しいのですが。報酬は弾みます』

彼らは、この話に飛び付かざるを得なかった。

前金をもう貰ってしまったているのだ。しかも既に手をつけてしまっている。

それほど金困っていたのだ。それこそ、その日食べていくのにも難儀していたくらいに。

「……兎に角、仕事は続ける。どちらにせよ、これ以外食い扶持は無いんだ。」

「「「「……」」」」

沈黙が訪れる。全員が全員、気が進まないという方向で一致してしまっている。

だが、やるしかない。そうでもしなければ生きていけないのだから。彼らに発破をかけるべく、ノイは立ちあがって

「……あ？」

それと同時に、部屋の中に投げ込まれる魔法薬入りの瓶を、視界にとらえた。

「な?!」

発見、が、遅すぎた。

ノイが注意を呼びかけようとしたその時には、その瓶は地面に落下、炸裂。

瓶の中に入っていた魔法薬は空気に触れた瞬間気化、膨張し、部屋中に広がった。

「な、なんだこりゃ！」

「目！目が痛え！！」

「息が！苦しい！」

ただの煙では無く、呼吸を苦しくさせる刺激物の入り混じったスモッグ。

ノイは顔を歪める。何者の仕業かは知らないが、このままこの部屋にいては呼吸が出来ない。

「外に」

その時、いや、まで、と、傭兵の頃の名残なのか、頭の何処かが彼の指示を停止させる。

部屋の扉は一つ、この煙を充満させた敵がいるとして、脱出口に何もしかけないなんて事があるか？

「ま、まで！」

だが、仲間達は止まらない。いや、止まらない。何せこの状況。息もできず、何事かとパニックに陥り、思考回路もまともに働いてい

ない。出口へ！それだけが頭の中を一杯になっていた。

そして、

「ぎゃあああー!!」

待ち構えていた『敵』に、彼らはなぎ倒される。

「な、なんだお前！」

その『敵』とは、巨漢としか評する事が出来ない少年。荒事を生業にしていたはずの彼らを遥かに上回る強靱な肉体を服の下で誇示するその男は、存在するだけで元傭兵の彼らを威圧していた。

だが、真に恐ろしき存在は、彼ではなかった。

「はあい。こんにちは、ご機嫌麗しゅう皆さま」

彼女は、彼の陰からひょっこりと現れた。

適当に切りそろえられた茶髪、顔立ちは愛らしく、元気な村娘といった印象の少女。

だが、その服装は少々おかしい、奇妙な装飾が縫いつけられた派手な黒ローブ。まるで物語に出てくる悪意に満ちた魔女の様にその姿は黒づくめ。

何より目を引くのは彼女の表情。傍目で見るだけなら笑顔を浮かべているようにしか見えない。が、その笑顔が、何故だか見るだけで背筋に冷たい物が突き刺さるような、そんな微笑みなのだ。

元傭兵達は、彼女の後ろに佇む巨漢よりも、彼女自身に、何故だか恐ろしいプレッシャーを感じていた。

「あら、奇遇ですね、チンピラさん。」

そう言いながら、彼女は顔面に怪我を負った男に問いかける。店を破壊してしまった実行犯の男に。

「さて、質問です。皆さんは、私の店をめちゃくちゃにしてくれやがったそのチンピラの、犯人一味であると、そう認識しても良いんですよね？」

沈黙、否定はない。つまりは、肯定。

「成程、よく分かりました」

少女は一人、納得すると、その笑みを変えた。

笑顔は笑顔だ。だが、先程のそれとは違う、全然違う。

その様を一言で表すなら、鬼。

「人のものを傷つけたって事は、自分のモノを傷つけられる覚悟があるって事ですね」

彼女の片手で何かがキラリと光る。

それが、家畜の解体ナイフだと気がついた時、元傭兵達の震えが止まらなくなった。

「小便はすましましたか？

神様にお祈りは？

部屋のスミでガタガタふるえて命乞いする心の準備は、OK?」

美しい月夜に、むさい男達の絹を裂く様な悲鳴が、響き渡った。

第七話 キース少年

其処は、エミリアの店から丁度十分ほどの距離にある、小さな孤児院。

僅かながらの国からの援助金で何とか食いつないでる、細々とした場所。

そこでは昔から其処で経営を続ける中年の女性が一人、職員として働き、日毎に其処を卒業した孤児院出身の仲間達が手伝いに来る。そんな、少々綱渡り気味な経営を、この孤児院は続けていた。

そんな場所で、仲間内から『リーダー』と呼ばれ、慕われている少年、キースは働いていた。

「キース。お疲れ様。悪いわね本当に」

「いえ、いいんですよ。俺が好きでやっているんですから」

「もう休んでいいよ。私ももう上がるから」

「はい」

疲れ気味のオバさんが二階に上がり、ようやく一息つく。

目の前には大量の布団、そこに所狭しと並ぶガキども。

こういう光景を眺めると、自分の仕事への満足感が心を満たすもん

だ。

が、やっぱり疲れた。体中で筋肉痛が唸りを上げる。疲れた。本当に疲れた。

贅沢とは言い難い、質素な晩飯を口に入れ、バネの軋んだソファーに寝転がる。

少し眠ろうかと目を覆うと何故か昔の事を思い出した。

「……エミリアか、最近あってねえなあ」

エミリア、彼女と俺が一体どうやって知り合い、仲を深めたのか。思い返してみると、正直、とんでもない思い出しかない。

血、暴力、復讐、報復、脅迫、策謀、殺意、愛憎、いやいや本当にろくでもない。

最終的にエミリアと何故仲良くなれたのか、正直言って意味不明だ。

どれだけ、昔の自分の環境が荒んでいたのか良く分かる。良く生き残ったもんだ。俺。

「あー、不毛だ」

ガキどもの世話を終え、掃除洗濯を済ませ、何とか晩飯にありつけたと思つたら、今度は昔の思い出に浸るときだ。俺は一体何処の年よりだ？

早く休もう。明日は学院に戻らなきゃならないのに。

「……しかし、そうなるとオバさん一人になるな……」

彼女一人に任せるには、仕事量が幾らなんでも多すぎる。今日は俺が手伝いに来たのに、それでも手が回らなくて大変だった。普段はオバさんが一人で回しているのだと考えると、恐ろし過ぎる。

「やっぱ、人手が足りねえなあ……」

とはいえ、こんな重労働、おまけに超低賃金、好き好んでやろうと言ふ奴はいない。

かといって、ガキどもも手伝いができるほど成長した奴らは限られる。出来る限り仕事を手伝わせるようにはしているが。

悩みが尽きない。苦勞が尽きない。

そんな事で思い悩んでいた時だった。コールが突如、この孤児院にやってきたのは。

「どうしたんだよ。コール」

「リーダー。エミリアが暴走している。来てくれ」

「……またかよ」

あの女は普段は冷静な思考能力を働かせるのだが、一度何かに目がくらんだり、脳の沸点を迎えたりすると一気に暴走する。それはもう、ちよつと引いちゃうくらいの勢いで。

一度、魔術学院のドラゴンを討伐しに行くと言った時は本気で頭がおかしくなったのかと思つたものだ。しかも本当にナイフ片手に突っ込んでいくし。馬鹿だ。あの女は。

止めなければ何処までも突っ走る女、エミリア。だからほつとく訳にもいかない。

流石に牢獄に入られると後味も悪い。

「……で、今回は何をやらかしたんだよ。あの女」

「……コール。止めて来い」

「はい」

本当に、俺は何故、あんな女に惚れてしまったのだろう。

一時間後、場所同じく洋館にて。

「……つまり、貴方達は他国からの流れ者で、金も無く野垂れ死にしそうになった所で、胡散臭くて怪しい男から儲け話をけしかけられて、それにまんまとのっちまったと？」

「……その通りでございます」

「ほほう。わかりました。なるほどなるほど」

そう言いながら、エミリアはゆっくりと、地面に転がるパイプを手にとって、

「分かったから、じゃあ、死になさい」

駄目だこりゃ。

「落ち着けエミリア」

「邪魔しないでください。キース。私はこのクソ野郎どもに天誅を喰らわすのです」

目が怖い。目が。なんか光ってる。爛々と。

「殺すのは流石にまずい」

「大丈夫です。殺しません。こいつ等のナニを切り取って鳥の餌にしてやるだけです」

何か言いだした！この女！

「勘弁してやってくれ。それはそれで死ぬから」

「良いじゃないですか。そのまま娼婦として生きたらどない？って感じですよ」

ヤバイ。この女マジでやる気だ

「も、もうしわけありませんでしたあああああ！！」

「謝罪なんてどうでもいいからさっさと」

「せい」

手刀。

「はっ」

気絶したエミリアを抱えて、一先ず一息ついた。

さあ、どうしたもんかね。これから。

第八話 元傭兵達の末路

エミリアの気絶によって混乱は収束し、ようやく傭兵達も落ち着き始めた。

数えてみるとその人数は5、6人。意外に少ない。ただこの国に流れ込んだだけの奴ららしい。

だからこそ、こいつらに『エミリアの店を襲え』と命じた誰かさんは都合がよかったんだろうけど。

「う、うう……助かったあ」

エミリアの拷問から解放されて泣き崩れるおっさん一名。そんなに怖かったのか。いや、怖かったけどもさ。泣くなよ、傭兵ども。

「コール。傭兵を呼んできてくれ」

コールにそう命じて、エミリアの体を背負う。なにはともあれ、エミリアの暴走は止まったんだ。これで俺達の要件は終わった。後は傭兵たちに任せてしまえば終いだ。

「ああ、眠い」

ただでさえ疲れているのに、無駄に睡眠時間が削られた。早く帰りたい。

「待ってくれ」

そう思っていたというのに、何故呼びとめられるんだろうね？

「何だよ」

彼らの中でもリーダー、らしい、オッサンが俺を睨みつけていた。

「……兵を呼ぶのだけは勘弁してもらえないか」

そして次の瞬間そいつが見せたのは、地面に頭を擦りつけんばかりの謝罪だった。

「もしも一度でも捕まってしまえば、俺達はお終いなんだ」

「……ああ、成程。そう言えばあんたら、流れ者だったな。」

そんな奴らが兵に捕まれば、一生奴隷として生きていくか、牢獄の中でその生涯を終えるかのどちらかだ。今回の件に関しては、こいつ等の罪なんて些細なものだけど、それでもそう言った連中にたいして、この国の司法は厳しい。

国として、当然なことではあるんだが、流石に同情が無い訳ではない。

彼らの現在の境遇が、抗いようも無い様なものだったのもわかるし、気持ちも理解できる。

だけど、だ、

「お前らがエミリアの店をまた襲わない保証は無いだろう」

そうである以上、こいつらに慈悲を掛ける気にもなれない。それに今見逃したって、どうせまたあとで犯罪に手を出してしまうだろう。それくらいしか、生きる道は残されていない以上は。

「襲わない。だから頼む」

おっさんは謝罪を続ける。いや、謝罪を続けるほかないと言った方が正しい。免罪の代わりに俺達に提供できる者は何一つとしてない以上、ひたすら謝罪を繰り返して慈悲を乞うしかない。

だが、それは見ているだけで痛ましくなるだけで、正直言ってしまうと、鬱陶しくすら思えた。

こいつらを進んで救おうと思えるほど、俺は余裕がある訳じゃない。それでも助けようとする善人でもない。

「知るかよ。そんなの裁判所に言ってくれ」

今度こそ完全に背を向けて扉をあける。こついつのは構えば構うほど、後の尾を引くものだと知っていたから。だからこそ、さっさと帰るつもりだった、のだが、

「い、嫌だ！」

今度は、震えた、喉の奥から絞り出したような声が背中越しに響いた。
傭兵達の中でも、若い、俺とそう年の離れていない兄ちゃんが、ナイフを持ってこっちを睨んでいる。

「おい！」

「俺は！嫌だ！奴隷に何てなりたくない！！」

リーダーの生死の声も聞こえない。瞳には薄らと涙を浮かべ、その表情は絶望に歪んでいる。

「何でだよ！俺がそこまで悪いことしたかよ！畜生！畜生！」

悲鳴。これは間違いなく悲鳴だ。不運だったと、ただそれだけの理由で此処まで追いやられた男の悲痛な叫びだった。他の男も彼にっられて、泣き、呻く。絶望に。

それは、俺も良く知っている魂の叫びだった。本当に、どうしようもないくらいに。

過去の記憶がよみがえる。周りの連中と一緒に世界の全てを憎み、恨み、そしてどうしようもできない現実に絶望する事で生きてきた日々を。

まさにこの兄ちゃんの姿は昔の自分に重なるのだ。

とはいえ、刺される訳にもいかないが。

「【地の鎖よ】」

最近身につけたばかりの地属性の呪文。重力を操作し、相手の動きを縛り付ける。

「ぐうっ！？」

「悪いな。これでも魔術師の卵なんだよ」

それでなくとも、あんな小さなナイフを持ったボロボロ傭兵に負けるほど俺は弱くは無い。

「畜生……畜生」

「……リーダー」

なんでお前がそんな捨てられた子ネコのような目で俺を見るんだ？
コール。

「あー、もう面倒くせえ……」

大体、こいつらを助けるには、この現状の根本を解決しなきゃ意味が無い。せめて働き口を見つけてやらなければ、衛兵を呼ぼうが呼ぶまいが結果は同じだ。

いっそ、教会にでも放り込んだ方がいいんじゃないか？

「あ、」

そこでふと、妙案が浮かんだ。

事件が起こってから数日、それだけしか経過していないものの、街の様子は何一つとして変わっていない。人々は各々の生活を営むために、商品の売り買いやら、物資の運搬やら、各々の仕事に従事している。

そんな中で、事件の中心であるエミリアの店では、その店主であるエミリアと、彼の昔からのなじみであるキースがのほほんと紅茶を啜っていた。

「で、孤児院で働かせてあげていると？」

エミリアはカップから口を離すと、何処か非難がましい口調でそう言う。流石に昨日ほどではないが、怒っているのには変わらないらしい。

「人手不足だったから助かったって、オバちゃんに喜ばれたよ」

ムキムキでボロボロに汚れた体な胡散臭すぎる野郎どもを連れてきた時はさすがに驚かれたが、働きたいと言う事を本人達の口からわせるとすんなりと受け入れるオバちゃんは大物だ。

あれから元傭兵達は子供達相手にそのゴツイ顔を慣れない笑みに変えて必死に働いている。低賃金で、おまけに重労働な筈なのだが、それでもその日の食事すらない状態よりもましらしく、必死に、しかし何処か安心したような顔で働いている。

「お人好しですねえ。まあ、私はお金と、お店の修繕さえもらえれば文句はありませんが」

現在、エミリアの店は二、三人ほどの元傭兵達の手によって絶賛改修中だ。別にそう命じたわけではないが自主的に破壊された棚やら机やらを器用に修繕している。何処となく恐怖に歪んでいるのは気のせいじゃないだろう。余程エミリアが怖かったらしい。

そして、そのエミリアの片手には傭兵達の、その怪しげな男から貰ったという前金が握られている。

「現金な奴」

昔からこういうちゃっかりした所はあったが、そのたびに呆れたものだった。

「世の中は大体九割くらいお金でまわっているのですよ」

「残り一割は？」

「愛かなんかじゃないですか？」

「いい加減な」

「そんなもんですよ」

エミリアはけらけらと笑う。それはとてもアホっぽい顔で情けなくなる一方で、可愛いなあとも思ってしまう自分が馬鹿らしくて、俺も笑った。

なんだかんだありつつも、今日も今日とて平和だった。

第九話 彼の悩みと厄介ことの来訪

アステイニア王国の首都、ガイディア。

この街は中心に王宮がそびえたち、そこから半円を描くように街が広がるように作られている。首都であるだけに、この街はアステイニア王国の中でも一二位を争うほどの大きな街だ。

だが、大きいという事は、別段いいことばかりでは無い。大きいという事は、影もまた、同じくらい大きいという事に他ならない。特に下町は、貴族達の住む住宅街とは比べ物にならないくらい、治安が悪く、貧困層も多いのだ。

エミリアの親友であり彼女を想うキースもまた、その下町に住む住民の一人である。

「……………」

その彼は考える。真剣な顔つきで、思い悩んだ表情で。

この下町には、変人が多いと。

例えば、狂ったように天才的で破滅的な落書きを続ける狂気のおっさん、

例えば、毎夜毎夜下らない歌を歌い続け、自身に酔い続ける変な女
例えば、研究に没頭し、自分を殺しに来た強盗に無理やり自分の手
伝いをさせる奇妙な老人

本当に、変な奴が多い。一般人が度肝を抜かれるようなそんな奴らは、既にこの下町の日常の一部として溶け込んでいる。だから、まあ、 “変な人間” なんてものは正直言ってしまうえば見慣れている。

の、だが、

「……………」

キースは目の前に広がる珍妙な光景を見て、思い悩む。

果たして、未だかつて、下着姿で巨大な壺の中に頭を突っ込みながら眠っている人間を、俺は見た事があっただろうか。と、

「おい。起きろ。エミリア」

「うが？」

壺からがばつと体を起こしたエミリアは、しばらく眠たそうに「ごし」と顔を擦り、キョロキョロと周りを見渡して自分がどういう状況か把握した。

「……………壺掃除していたら、眠ってたみたいです」

「……………そうか」

何と言うか、不憫だ。主に彼女に惚れている彼が。

.....

「ああ、さっぱりしたー」

「だから下着で出歩くな。ちゃんと服着ろアホ」

「まあまあ、全てを見せ合った仲じゃないですか」

「ああ、確かに見せ合ったな。互いの血肉と臓物を」

キースは私が愛用している黒ローブをひつつかむと此方に投げつけて、そのままそっぽを向いてしまいました。何とまあ、シャイボーイと言う奴なのですかね。今更な気もしますが。

ふと、彼の座る机を見ると、私が依頼していた魔法薬の調合材料が籠にまとめられ、そこに置かれていました。

「あ、材料集めご苦労様です。こればかりはキースくらいにしか頼めなくて」

「ああ」

調合材料の採集。これにはある程度の知識や魔道の才能も必要で、残念ながらあの元傭兵のおっさん達を呼びだして顎で使う訳にもい

かないのです。

「ま、何時かは勉強させて、顎で使うつもりですが」

「……お前、まだ怒ってるのか？」

「私がつつても根に持つタイプだつてご存知でしょう？キース」

「あー、よく知ってるよ」

そう言いつつ、頬にうつすらとついた切り傷を擦るキース。

そう言えばその傷つて私がつけたんでしたっけ？

「それで、研究は順調なのかよ」

「……聞かないでください」

もし研究が順調に進んでいたのなら、私は壺の中に頭を突っ込んで眠ってはいないでしょう。少なくとも立派なベットに横になり、幸せな夢を見えています。

「……やっぱり難しいんですね。安価な薬って」

「諦めてもつとベタな研究にしたらどうだ？それこそ新しい魔術の研究。病の特効薬の研究とか」

キースは魔術学院の学生らしい、シンプルな研究を挙げてくれます。確かにそういった研究の方がポピュラーですし、そうした研究を学会で発表すれば名も売れ、スポンサーが見つくかもしれないし、どこその研究所に招待されるかもしれませぬ。

しかし、

「……なんか、あまりやる気しないんですよ。そういうの。面倒くさそう」

「……お前は本当に学者をなめきってるよな」

「それに、そんな風にじっくりゆったりお金も時間もかけていられないんですよ。借金取りも、私がおばあさんになるまで待ってくれるほど、良心的じゃないでしょうしね」

「やれやれ……」

何時ものようにキースはため息をついて、そのまま立ち上がりました。

「おや、もう帰るんですか？」

「今日は午後から授業があるんだ」

そう言いながら裏手の玄関口の扉に手を掛けて、

「すみません！お願いします！助けてください！」

という、非常にけたたましいノック音と、助けを求める悲鳴に出会いました。

「……おい」

「……今、私が聞きたくない言葉ベストスリーは『すみません！』と『お願いします！』と『助けてください！』だって言ってくれませんか？」

どう考えても厄介事としか思えない来訪。誰か、助けてくださいと私が言いたい。

第十話 噂すれば厄介ごと

「ああ、これ、呪いの類ですね」

目の前で苦しそうな顔をした少女を見て、直ぐに理解できました。少女の体のあちこちに点在する奇妙な発疹、顔色も悪く、唇は震え、目はうつろで、どうみたってそれは悪意ある魔術の症状でした。

「の、呪い?!」

その不審な言葉に驚いたのは、先程からその少女の手を握りしめ続けるおじさま。人の家に勝手に上がり込んで、彼女を連れ込み、助けてくれとのたまった男でした。

「まあ、呪いと言っても正確には呪術ですけどね。誰かから恨みを買った覚えは？」

「い、いえ。少なくとも娘が狙われる理由なんて、」

「ま、ただ生きているだけでも誰かから貰ってるもんですよ。恨みなんて」

悩ましげに首を振るおっさん、しかし面倒なので反応せず、そのまま少女の額を撫でて一言二言と呪文を唱えましたこの魔術の症状は子供には苦しい物ではあるものの、さほど解呪が難しい魔術ではなく、

「【悪意を滅せ】」

浄化の詠唱を続けると奇妙な発疹は消え、最後に幾つか護身用の術式を体書き込むと、少女の表情にも僅かに安らぎが戻りました。

「解説はしましたよ。あとはさっさと連れ帰って寝かしてくださいな。二日三日で収まるでしょう」

「あ、ありがとうございます！先生」

礼を言われるほど大したことはしていませんのですけどね。むしろ礼するくらいならお金を下さい。って感じです。どうせお金なんて持ってないんでしょうけど！あつたらせびってやるのに！！

「今回の件は他言無用でお願いしますよ。私も生活がありますから、無償で病人を助けるなんて噂が流れ出したらたまりませんからね。」

もし本当にそんな噂が流れれば、私の店は浮浪者達や、医療代金の払えないような者達が溢れかえることになるでしょう。そんなことになる事だけは断固として阻止せねばなりません。

「貴方にしたって、今回だけが特別で、以降は受け付けません。大人しく金貯めて病院いってくださいな。この程度の呪いならそれほど値段もかかりませんし」

「は、はい！ありがとうございます」

慌てて扉を閉めるおと共に、招かれざる客は消え、ため息が出ました。

「お疲れ」

キースが馴れ馴れしく頭を叩いてくるので、面倒くさくて放置していると今度は頬を引っ張ってきました。何しやがんだこの野郎。

「ああ……疲れた」

「ま、そう言うな。情けは人の為ならずだ」

「情けはいらないからカネをください」

「お前は本当に即物的だな。」

と、其処まで言うと、キースは何かを思い出したように、

「そっいや、さっきの女の子って、やっぱり人為的な呪術だったのか？」

「ええ。というか、貴方が分からなきゃだめでしょ。キース。学生なんだから」

「俺、呪術系統の学問とってないんだわ」

あんな程度の呪い、ちよつと調べりやすぐわかるようなものなんですよけどね。駄目な学生。

「手順さえ踏めば魔術師でなくとも扱えるモノですよ。解呪も其処まで苦労はしませんでしたし」

「……ふうん」

「どしました？」

「いや、最近、そういった呪術が流行っているんだよ」

キースが語るには、最近妙に呪術系統の被害者が増加している、らしいとの事。この街のあちこちで、貧富を問わず被害が続出して、魔術学院内でもそうした被害者が多発しており、保健室では担任の女医が金切り声をあげて治療しまくっているとかなんとか。

確かにある程度魔術の知識を重ねれば使える程度の呪術ではありませんが、しかしそれでも被害がこつも重なるのはおかしいような気もしないでもない。

「呪術が流行るなんて事、あるとすれば……」

「なんでも呪術系統の道具が出回っているらしい」

「何故に？」

そう言うとキースも苦そうな顔をして、

「最近、この街の中心地に新しく……」

と、其処まで言おうとして、扉から響くノック音。

「……コール達だと思います？」

「……アイツ等が丁寧にノックするか？」

二人でため息が出ました。二人目の客人。別に、望まぬ客だと決まった訳ではありませんが、嫌な予感をひしひしと感じます。ああ、帰ってくれないっかなあ？

.....
.....
.....

「いやあ、素晴らしい！此処がエミリア先生の研究室ですか！」

「いえいえ、それほどでも！」

エミリアが扉を閉める前に勝手に上がり込んできたのは、嫌に胡散

臭い男だった。

礼服を着込み、髪形まできっちり整え、指には大きな宝石のついた指輪を幾つもはめた、いや、もうとにかく胡散臭い男。

店に入ってきて開口一番が『エミリア先生の腕を聞いてきました！』とか何とか、台詞まで胡散臭い

エミリアは、そんな男を笑顔で向かい入れた。ただし目は笑っていない。

「それで、お話と言うのは？」

「おお！そうでした！実は私こういう者です！」

そう言っ取り出した紙には、その男の身分が書かれていて、

「……フォーマル商店、デルクさん、ですか」

エミリアの読み上げたそれは、俺も最近聞いた事があった名称だった。

「そ最近この街でも商売をさせていただいるデルクと申します」

そう言いつつ指輪をチラリと此方に見えるように手を置く。

儲けていると言いたいのだろうか。余計胡散臭さが増したただけな気もするが。

「……それで？その商店さんが私に何の用でしょうか？」

その問いに、デルクは大袈裟に

「実は私達……貴方の研究に契約を申し込みたいと思っております

て」

次の瞬間、エミリアの瞳が輝いた。

ただし、酷薄に。

第十話 噂すれば厄介こと（後書き）

一月ぶり。ただ一言。御免なさい。

第十一話 大きすぎる釣り針

エミリアは笑顔を見せながらも、沈黙した。

一見それは軽やかな、静けさと共にあるような沈黙に見えなくもない。が、見ているこっちは、何故だか胃の奥に重しの一つでもぶち込まれたような気分になる。

「契約、それはつまりあなたがスポンサーになってくれると言う事ですか？」

「ええ、勿論！」

そんなエミリアの冷めきつた反応を知ってか知らずか、デルクは笑顔でそう答える。

契約、スポンサー、つまりエミリアの研究に期待して、その研究を援助したいと、そう言っている。らしい。それはエミリアにとっては待ち望んでいた事だ。あのジジイが残した莫大な借金を払う為にはそういったスポンサーを味方につけるしかない。

だから、客観的に見れば、彼女にとって千載一遇のチャンスともいえるだろう。

だが、

もし本当にそうだったら、エミリアはもっと瞳を輝かせる。少なくともあんな、生ごみに集るウジ虫を見るような眼はしない。

立场上、部外者である俺は、黙って見ているべきなのだろうけど、この胡散臭い男に言っただけでやりたい。黙って帰っておけ、と。

「……ですが、私は未だ、成果を発表する事すらままなっていない。それなのになぜ私と契約を持ちかけよう？」

エミリアは、冷静に、最も疑問な部分をぶつけた。

エミリアは確かに錬金術師としての腕はなかなかのものだ。基礎的な薬品は大抵調合できるし、新薬の開発に力を込めるだけの意欲もある……動機は不純だが。

「ただ、今はまだ名が売れていない。名が売れていない以上、其処には信頼性がない。なのになぜ、契約しようと言うのか、理解できない。」

「それは、先も言いましたが、貴方の実力を風のうわさで聞いた、というのもあります、が、」
「が？」

その問いに、デルクは若干顔を屈め、今まで隠していたのであろう、何処か歪んだ、腹黒い笑みを見せた

「ゾーンベルト様のお弟子様でいらっしゃるのでしょうか？エミリア様は」

その瞬間、エミリアは思いっきり皮肉な笑みを浮かべた。同時に、俺もこの男の目的を理解し、納得する。その馬鹿馬鹿しさに。

「……つまり、私の師であるゾーンベルトの研究の恩恵を受けたいと？」

「そう言う事ですな」

そう言つて、おっぴろげに自分の目的を明かすと、何処か尊大な態度でデルクは椅子に腰かけた。

「もし、貴方と、ゾーンベルト様の研究知識を私達に提供して下さるのなら、私達は貴方に多くの資金提供をする用意があります」

「……」

「貴方が今、支払いを迫られているという大量の借金も肩代わりして差し上げましょう」

成程、其処までの調べは付いているらしい。

だからこそ、この胡散臭い男は自信満々なのだろう。

だが、あのジジイの名前を出した時点で、エミリアの答えは決まっている。

「分かりました。」

エミリアはデルクのふんぞり返った顔に、静かな笑みを返し、口を開いた。

「おお、では！」

デルクの確信したような反応に、エミリアは頷き、答えた

「ええ、今すぐ、お帰りください」

.....

.....

その後、デルクは様々な事を、甘言やら暴言やらを放ち続け最後には「この事を後悔しますよ!？」などという脅しまで言い始めたが、エミリアは聞く耳を持たず、ひたすら首を振り、追いだした。

静かになった部屋で古く軋んだ椅子の上でエミリアは虚空を見上げ、口を開いた。

「阿呆ですね。あれは」

「ストリートだな。おい」

「でも、貴方もそう思ったでしょう?」

「まあ、なあ。」

金さえ示せば、金銭的な弱者はとうともなると、そう思っているタイプだ、あれは。そりゃ確かに貧乏人は金に弱い。酷い時には子供さえ売りに出す親がいるのもまた事実だ。

あの男は、恐らくそう言った人間相手に交渉を続けていたのだろう。またはその交渉を受けざるを得なくなるまで追いこんでいったのか。どちらにせよろくでもないけど。

そして、エミリアも今まで相手してきた人間と同じように見えただろう。

偉大な錬金術師の研究資料という遺産を持ちながら、大量の借金に縛られ、稼いだお金も借金の返済に充てる日々、それは事実だし、ああいった、弱者をつけ狙うハイエナ達には最高の餌にも見える。

しかし、

「あんな見え見えな釣り針、良く恥ずかしげも無くぶら下げられま

すね」

エミリアは、そう言ったハイエナ達に食われる程、余裕がない訳でも、力がない訳でもない。

そもそも借金というのは本来は彼女のものではなく、ジジイがこさえたものだ。そして、借金した相手もまた、それを良く理解しており、慈悲がある。

エミリアは容赦ない借金取りに良く泣きをみているが、あの借金の取り立て人もまた、エミリアには最低限気を使ってくれているのだ。エミリアが生活できるよう、生活費程度のお金は必ず残し、払えない時は期日を延ばしてくれている。

……まあ、それはそれで、生殺しと言えなくもないが、

「ジジイの研究書類、狙ってくる馬鹿も減ってきたと思ったけどな」
地面に無造作に捨て置かれた書類の束を手にとると、奇妙な記号の羅列が並んでいる。

エミリアの師匠であるジジイ、この国で頂点を極めた錬金術師であり数々の偉大な研究を進め、歴史書にすら名を残したゾーンベルト・アイツシュの残した研究資料の一覧だ。

そう、異端の錬金術師。誰の弟子となる訳でもなく、莫大な資金を得ながらも下町の隅っこの家で住み着き、細々と研究を続けた変人、下町の住民からは偏屈ジジイと恐れられ、気まぐれにエミリアを拾い、弟子にしたあの男。

ろくな記憶がないのに、思い出すところか懐かしいのは、ジジイが

既に死んでしまった感傷か？と意味のない疑問が頭をよぎり、首を振った。

ともかくとしてこの研究資料、だ。引き継いだエミリアはこつも無造作に放置しているが、他の錬金術師からすれば喉から手が出るくらい欲しがっている代物だ。なにしろ希少だ。

あのジジイが発表しなかった研究成果だけでも一財産が築けるのだから、欲しがるものもいるだろう。

「ま、あの阿呆に渡した所で、これは使えないでしょうけどね。」

エミリアは愚痴る。研究書類には暗号がかけられている。今のところ、それを解けるのは最も近くでジジイの研究を見ていたエミリアだけだ。

「しかし……フォーマル商店か」

「知っているんですか？」

エミリアの問いかけに頷くと、最近知った情報を頭から引き出す。

「さっき言っただろう？最近、妙に半端な呪術系統の道具が出回ってるって」

「ああ、それが……って、まさか」

察しがついたのか、エミリアは顔を歪めた。

「そ、秘密裏にそれらを販売しているって噂なのが、さっきのフォーマル商店」

「……くびりとつとけばよかったですね」

「何処をだ。何処を……それに、くびりするのは騎士団の仕事だ」

昔の、騎士団といった守護者がいなかった時代、この国が荒んでいた頃ならいざ知らず、今は別に、自分達で身を守る必要は無いのだから。

今回のこの件は、エミリアが胡散臭い悪徳商会の誘いを断った、という、ただそれだけの事だ。だから、もうこの話はお終いだ。

エミリアもそれは理解しているらしく、大きく体を伸びると、再び気の抜けた顔になった。

「あー、無駄にお腹がすいた。ネインの店に行って食事しません？」

「またお前はたかる気か？ネインが泣いてたぞ？」

「大丈夫ですよ。昔私の事襲おうとした事実を今あの男がつけ狙ってる可愛いウエイトレスさんにはらしてやると言ったら喜んで料理をふるまってくれますから」

「……責められるべきはネインの筈なんだがなあ……何だろう、この気持ち」

.....

そして、その日の夜、
久しぶりにお腹いっぱいにご飯をとり、満足な笑みのまま眠りにつこうとしたエミリアは、

「動くな」

「は？」

首筋にナイフを突き付けられた。

第十一話 大きすぎる釣り針（後書き）

修正完了、お騒がせしました

第十二話 暗殺者襲来

「……面倒な小娘が！」

飛ぶ。高価そうな皿が飛び、花瓶が砕け、破片が自分の顔にぶつかった。

血が額が流れてきたが、拭い、男の興味を引く真似をすれば、狙いが此方に向くだろうから、黙って流れていくのを待っていた。

荒れていた。今日は、自分の主である男が荒れていた。

別に珍しい事では無い。商談が上手くいけばこの男は上機嫌になり、酒を煽り女をはべらせる。上手く行かなければ色々なモノにぶつけ、怒りを発散する。

感情の抑制の聞かない男だ。どうしようもないくらいに、心が未熟な男なのだ。

こんな性格の癖、商人を良くやっつけていられるものだとも思う。

この男が執り行っている商売の事はそこまでよく知らない。しかし、こんな性格の男が容易くできる程安い物とも思えないし、そもそも商売とは己を御しきらなければ話にならないのではないのか、と思う。

事実、この男の父親、元々の自分のオーナーだった男は自分の感情を掌握して、行動していた。

この男の父親は優秀だった様に見えた。商人として、非常に。良くも悪くも、だ。

表向きの商人としての在り方も、裏向きの商人としての在り方も優秀だった。

知識は無くとも近くで見ればそれは分かった。性格はこの息子に似て真つ当とはとても言い難いものだったが、それでもあの男の優秀さと狡猾さは、感心に値した。

しかし、その息子であるこの男は、駄目だ。

父親の死んだあと、商売を継いだこの男は、ハッキリ言って商人としての才能がない。父から継いだコネと、そしてある程度のスキルで何とかしのいでいるが、全てにおいて父には劣っている。

表としての顔は、傲慢すぎる。裏としての顔は、滑稽すぎる。

しかし自分は父より優秀だと思いこんでいるのだから、たちが悪い。

だからこそ、失敗すれば何かに当たる。自分は優秀であり、他者は劣っている。ならば、間違いは他者である。そう言う思考回路が働くから、モノに当たる。

本当、どうしようもない男だ。勿論、口にはしないが。

暫くそうやってモノに怒りをぶつけ続けて、疲れたのか荒れた息を吐き続ける。

ああ、そのまま疲れ果てて、酒でも飲んで寝てしまえ、と、私は念じ続けた。

だが、

「……は、はは！そうだ！」

主人は、ろくでもない表情でろくでもないことを口走りながら、笑った。

……
……

そして、今はこうして、その「生意気な小娘」の首にナイフを押し付けている

馬鹿馬鹿しい。何て馬鹿馬鹿しいことをしているのだらうと、自分でも思う。

いや、それ以上にこんなくだらないことに巻き込まれてるこの少女が哀れでならない。

「……あ、あの。何の用でしょうか？」

おびえた表情を見せる少女は、こちらを潤んだ瞳で見つめてくる。

あの男の申し出を蹴り飛ばしたと聞いていたから、肝の据わった女だと思っていたが、しかしこうしてみれば、どう見たって年相応の少女でしかない。

これなら仕事も簡単に済みそうだ。

「こちらの言う事を聞けば、命までは取らない」

顔を隠す布越しのくぐもった声を聞く、少女は安堵したように少し力を抜いた。

罪悪感がわく。あの馬鹿主は、「ゾーンベルトの書類を奪った後は、強盗に見せかけて殺せ」と言ってきている。主の命令である以上、こちらは言うことを聞かざるを得ない。

平然と嘘をついて何もかもをごまかそうとする自分に吐き気がする思考が沈んでしまいそうになって、首を振った、さっさと仕事を済ませてしまおう。

「あの、何が目的で？」

「書類をよこせ」

震えている声をふさぐように、声をかぶせる

「書類……ですか？」

「ゾーンベルトの研究成果を記した書類だ」

そう告げた瞬間、一瞬少女は反応し、

「……でも、」

「黙れ、早くしろ」

ナイフをさらにチラつかせると小さく悲鳴を上げて、「あっちです」

と寝室からつながる扉の一つを指をさして進み始めた。

錬金術師の部屋、というだけあって、どこか雑多で、薄気味の悪い部屋だった。足元には書き損じの魔法人らしきものが転がっていて、いかにもといった部屋だ。

「こ、これです。だから、ナイフをどけてください」

少女は、部屋の小さな机の中からあっけなく書類を取り出し、こちらに渡してきた。

あっけなく、しかも何でもないところに隠してあったそれは、本物なのか疑わしかった。

「これは本物か？」

「サインがあります。裏に」

声は震えたまま、少女が書類をひっくり返す。

確かにそこにはサインがあった。事前に主からサインは見せてもらっていた。

確かに同じ筆跡だ。

恐ろしくあっけのない終わりだった。

別に、苦労するとも思っていないが、肩透かしを食らった気分になる

これなら別に、あの馬鹿主人が何度か強く脅せばすんなり書類を奪えたのではないのか？

そんな疑問が頭をよぎる。

こんな汚れ仕事を此方に押し付けて、あの男は今頃女を待らせ、寶石を見せびらかし、酒をあおっていい気になっている事だろう。そう思うとどんだん腹正しくなってきた。

「ああ、そうだ。言い忘れていたことが一つ、」

と、そんな、此方の心情を無視するような少女の声、

実際、もう彼女に用はない。だから殆ど彼女からは意識を放していった。

それが、いけなかった。

「その書類、私以外は読めないようになってるんですね」

最初、何を言っているのか、理解できなかった。

だが、次の瞬間、手に持っていた書類が一気に発光し、一気に燃えるような熱さに転じた。

「!?!」

何だ!?!と、叫びそうになって、口を無理やり閉じて、書類を叩きつける。

書類はただの紙だったはずなのに、今は爛々と輝き、光を放ってい

る。

不気味なその様に、一步下がった。だが、その時になってあの女がいないことに気がついた。

「何処だ！」

「此処ですよ」

背後からの声に、振り向き、同時にナイフを振りぬいた。

だが、

「おっと」

「っ！！」

避けられた。刃先のギリギリを、紙一重で。

トラップ、少女の豹変、異常な身体技術、さまざまな情報が頭をかき乱す。

混乱のまま、そのノイズを断ち切るように、更に一撃を放った。だが、

「ほい」

振りぬく、その手前で手首に衝撃が走る。一瞬腕が麻痺して、ナイフが手のひらから滑り落ちる。

「おやすみなさいな」

次の瞬間には頭に衝撃が走り、視界と共に私の意識が暗転した。

.....

「やーれやれ。物騒なものを振り回してくれますね」

エミリアは、自分を襲いかかってきた不審者から奪ったナイフを玩具のように手の上で弄びながら、足元に転がるその不審者を見つめる。

「まさかその日のうちに仕掛けてくるとは、あの男アホですね」

どう考えても犯人、というか黒幕はあの馬鹿だろう。

といっても、証拠はなく、この暗殺者を突き出しても切り捨てて知らんぷりを決め込むだろう。

ああ、社会的弱者の立場が憎い！と、エミリアはその場でしばらくくるくると苦悶の表情で回ってみて、すぐ飽きたらしく、興味は暗殺者のほうへと移った。

「さって、お顔を拝見！」

ひらりと、と、劇場の黒子が付けるような布をエミリアは取り払い

「……………これは」

しばしの考察。

そしてニヤリと少女は笑う

第十三話 可愛いあの子はあんさつじゃ

「……くあ、」

眠い。兎に角眠かった。

昨日、何があったのか、かるく二日酔いの混じる頭で思い出す。

エミリアと共にネインの店を訪れ、例のごとく食事をたかり、憐れなレインを尻目に上手いつまみと酒を飲んで、飲んだくれて、途中昔の仲間が何でか集まってきた。

それからは最早宴会だ。皆で飲み、食べ、騒いだ。

なぜか途中からネインや、ほかの従業員まで宴に参加、最早何のために騒いでいるのかすらわからない大混乱と化し、その混乱に乗じてエミリアはそそくさと逃げ去りやがった。

そして俺は逃げ遅れた。ああ、頭が痛い。

「畜生……いつもつまいこと逃げやがって」

今は日も昇り、魔術学院ももうすぐ授業が始まってしまふ。

俺自身も授業がある、だから急いで学院に向かう必要がある、のだが、その授業はちょうど魔法薬の授業であり、教材が高くて手に入らない為、エミリアに借りなければならぬ。

ああ、でも、あの女のことだ。絶対なんか代わりに要求してくるだろう。憂鬱だ。

しかし、昨日も結局、午後からの授業をさぼってしまった。
成績は良いほうとはいえ、これ以上授業は休みたくはない

そんな事を呟いているうちに何時ものあのさびれた、気味の悪い小さな家が見えた。

「おい。エミリア？」

声をかけ、扉をあける。また昨日のようにまた壺の中で眠ってやしないかと思いつながら。

が、予想に反して、彼女は既に目を覚まして、せわしなく部屋の中をパタパタと移動していた。

「……」

確かに、確かに忙しそうにしていた。

14、5、ばかりの、椅子にロープで雁字搦めにされている少女の周りで、

「……」

俺は黙って扉を閉じて、頭を抱えた。

いや、確かに、

確かにエミリアは頭がおかしい。

自分の欲望に限りなく忠実で、他人がどうなるうがきほんしたこ

「つちゃねえと言わんばかりの態度、争い事が嫌いで抗争が起こればすぐさましつぽを巻いて逃げるくせに必要だと考えればたとえ相手がドラゴンであろうとナイフを片手に突っ込んでいく矛盾だらけの女。」

「そう、人格破綻者といっても過言ではないくらい、あの女は支離滅裂だ。」

「だが、だがしかし、たとえそうであったとしても、彼女は、最後の一線は守れる女だ。」

「女子供は殺さない。犯罪行為はギリギリ、ばれないようにしかしない。」

「だから、攫った一般人を人体実験の材料にも、しない、筈だ。」

「……うん。よし」

「息を整え、再び扉を開き、エミリアの家へと足を踏み入れる。」

「そこには、」

「ああ、キース。何をしていますかそんな所で」

「そこには、14、5、ばかりの、小柄な、美しい黒髪の、気の失った美少女の服を、ロープ越しから器用に剥ぎとろうとしている俺の昔からの幼馴染がいた。」

「……どっから攫ってきた」

「失礼な」

何が失礼なのかといたい。というか男の前で美少女の服を剥くな。

「別に私は悪くありませんよ。せーとーぼーえーです」

「何を言ってる…」

と、口を挟もうとした瞬間、エミリアは気を失った少女の右手の甲をこちらに突き付けた。

何だ、と思う前に、その甲に書かれていた奇妙な魔方陣が目についた。

それは見覚えのある、胸糞の悪い魔方陣

「…………… 奴隷印。この女。 奴隷か」

奴隷印。 呪術系の魔術の一種だ。

元々は戦争の上で使われていた、非常に危険性の高い拷問効果のある呪文だ。

術式の効果で、その対象を好きなだけ、「痛み」を与えることができる、悪質の魔術

過ぎれば発狂させることもできる。だから、次第にその利用法が時代とともに変わっていった。

それが奴隷に対する「首輪」だ。

この国では奴隷という制度は許されていない。許されていない、という事になっている。

しかし、やはり、奴隷という、社会的強者の立場にいる人間にとつて非常に便利なその存在は、この国の暗部でひっそりと利用され続けている。

奴隷は見た目ではそれは判断できない。昔のように目立つ鉄の輪などを装着されてはいないからだ。

しかし、必ず体の何処かに一か所、この魔方陣が仕込まれている。

「……胸糞悪い」

「今更なにをいつてんだか」

そう言いつつ、エミリアは術式を少女の腕や、首に書き込んでいく。

「で、なんでその奴隷はお前の家にいるんだ？」

「私んちに強盗に、殺意びんびんでしたよ」

「……まんま、強盗なわけねえよな」

「たぶん、昨日の馬鹿の奴隷ですよ。」

思い返す昨日の馬鹿。本当に救いようがない大馬鹿野郎らしい。

そもそも、エミリアに暴力的に脅しかけようとした時点で、馬鹿は決定だったが。

なにしろこの女は、そこらの騎士団程度なら瞬殺できるくらい、強いからだ。

「……で、どうする気なんだよ。この奴隷のお嬢さん」

「え、そりゃ勿論」

そう言って、エミリアは、彼女には珍しくとても綺麗な、美しい笑みを見せる。

思わず見とれてしまって、俺は彼女の言葉に耳を傾けた。

「奴隷印書き直して、私のものにします」

聞かなきゃよかった。

.....

「おはようございます」

目覚めた直後、目の前にあったのは、少女の恐ろしく邪悪な笑みだった。

反射的に身をよじろうとして、直後、体が縛られまくっていることに気がついた。

「無理に縄ほどこうしたらぶち殺しますので、あしからず」

脅迫、静かな、研ぎ澄まされ触れただけで指すら落ちそうな、刃の殺意が瞳に映る。

逃げようという気は起きなかった。逃げたら、ろくでもない結果が待っているとわかるから。

「現状は理解できますか？」

「……貴方に捕まった」

「少し足りませんね」

人差し指を私の前に立て、少女は歌う様に、

「【ペイン】」

「っ!!」

右手の甲に鋭い痛みが走った。知った痛みではあった。だが、あり得ないことだった。

自分を縛りつけていた呪術。それはわかる。だが、あの男しか利用できない筈だ。

なぜ眼前の少女が使える。

「私が“それ”のコントロールを奪いました。」

平然と少女は言う。そんな技術は聞いたことがない。

「ではもう一度、意味がわかりますか？」

一瞬考えて、息を一つ吐いて、答えた。

「私は、貴方のものになった」

「よくできました」

少女は私の頭を撫でる。縄で縛られていて抵抗は出来なかった。

彼女のものになった。理解はできるが、全く納得できない。事態が唐突過ぎる。

「あんまり、ろくでもないことすんなよ。エミリア」

「正しく自分の立場を理解してもらうためですよ。キース。というか貴方、授業は？」

「今から行くよ……でもよ」

と、キースと呼ばれた少年が此方に近づいて、ひょいと顔をのぞき見てくる。何だ？と思っていると、不思議そうな顔をして少年は私から離れていく。

「……あんたなんで暗殺者なんてやってんだよ？」

「何で、とは？」

「娼婦でもやってりやいいじゃん。その面さえあれば」

想像以上にストレートな物言いに、怒りよりも先に呆れた。何だこの男。

余程世間知らずのガキなのか、とも思った、が、

「暗殺なんてやるよりは、娼婦やってた方が楽だろうよ」

「経験者は語りますね」

「俺は掘られてねえよ。ギリギリな。ヘンタイ親父に襲われた事はあつたけどさ」

どうやら、同じ穴のムジナだったらしい。

「まあ、どっちにしたってこの子は娼婦なんてできませんよ」

「何故？」
「ほら、」

と、いきなり私の服をナイフで裂く。本当に躊躇も遠慮もないこの女。

服が裂け、露わになった私の体を見て、キース少年は顔を歪ませた。私の、全身隈なく醜く爛れた体を見て、顔を歪めた。

「……火傷の跡か？」
「そうですね、多分虐待痕ですよ」

子供のころから奴隷だった。

主はその都度変わったが、虐待を受けなかった時期はなかった。

死なないように、好き放題され、この体だ。

この体のおかげで、娼婦のような扱いがされなかったただけ良かったと言えなくもないが。

「……やれやれ、悪かったな」

私よりも年上らしい少年は目をそらし、謝罪する。基本、悪い人ではないらしい。

しかし、私の服を刻んだ少女は悪びれた様子がない。

何故こっちが私の主に変わったのか、神を恨む。信じていないが。

「質問よろしいですか……、「ご主人様」」
「ええ、いいですよ」

尊大にふんぞり返って少女は言う。……尋ねたくないが、聞きたくないが、聞かざるを得ない。

「これから私はどうなるのですか？」

「よろしい、教えてあげましょう」

少女は笑う。邪悪に。

「貴方にはやってもらいたいことがあるのですよ、うふふ」

息をのむ。何故か少年まで息を飲む。何を言い出す気なのか、ああ、すぐく聞きたくない。

盗みか、報復か、暗殺か、今までの経験を思い返し、暗雲とした気分になる。

少女はこちらの息を飲むさまを、次のセリフをしっかりと貯め込み、そして口を開いた。

「そう……看板娘をね！」

第十四話 とある奴隷の日常と苦悩

顔が、引きつる。

ヒクヒクと頬が痙攣しているのが自覚できる。体全体が無駄に緊張し、張り詰めているのがよくわかる。何故こんな苦勞をしているのか、こんな思いをしなければならないのか、分からない。

ぎこちなく体を折り曲げ、錆びた関節の様な動きで頭を下げて、ぎぎぎと、笑みを浮かべる。人が見れば出来の悪いからくり人形だと誰もが笑う様な、そんな有様で、

そんなとてつもなく無理のある笑みを浮かべながら、私は“看板娘”をしていた

「あ、あ、り、がとうござい、まし、た」

「おう！またくるよ！フィリスちゃん！」

目の前の男は、何故か徹底的に弛緩しきった顔で妙に気持ち悪いニヤニヤ顔をしながら、店から手を振って出て行った。何が楽しかったのだろう。こんな薬品だらけの店で。

とりあえず、入ってきた客が掃けた。と、一息つく。

何故、私がこんな事をしなければならないのだろうか。と、

いや、分かっている。本当は分かっているのだ。何故、私がこんな

目にあっているのか、

その原因、それは、

「ひゃっはあ！研究材料調達からただいまですなフィリス！イイコにしてみましたか！？」

店の裏門からえらいハイテンション状態で飛び込んできた我が主

エミリア、彼女の所為に決まっている。

.....

エミリア、彼女に飼われ……もとい、雇われてから数日が経過した。

彼女が言っていた「看板娘にします！」という発言、最初は冗談か何かだとばかり思っていたが本気だったらしく、今私は彼女の店で働いている。接客、商品の補充、掃除、洗濯、等、何故わざわざ奴隷にやらせているんだと言ってくるらしいの雑用を次々に。

確かに、暗殺やらなにやらよりもずっと精神的に楽な仕事ではあるが。

しかし、疲れるものは疲れる

「……………ふう、」

特に接客、今まで日陰に生き、真つ当に人扱いすらしてもらえなかったのもあつてか、人と対面し、何の事はない雑談に花を咲かせるなんてごく当たり前の事が、できない。価値観が違いすぎる。何を考えているのか、何が楽しいのかが、分からないのだ。

だから、接客は無理だ。と、エミリアに入ったのだが、

「それでいいですよ。てか、それがいいんでしょう、多分」

と、返された。彼女の言葉の意味がまったく理解できない。

まあ、ともかくとして、今現在、看板娘として私は悪戦苦闘をしながら、日々を過ごしていた。

「フィリス。ご飯ですよー」

思い耽っていたその最中、裏の小部屋から主の声が聞こえてきた。

食事に関しては作ったことすら無いため、流石に其処はエミリアに任せている。既に裏からはとても良い匂いが漂っている。今日は野菜のシチューだと彼女は言っていた。

「はい、今行きます。」

店の扉を開け、昼休みと書かれた看板を下げ、閉める。

錬金術師がどう関係しているのかは知らないが、彼女の作る食事はとてもおいしいから、この時間はとても楽しみだったりもする。本人に言えば、それをエサに何かほかの雑用までやらされそうだから、

言わないが。

ちなみに、フィリスという名は、私に名前が無い事を聞いた彼女が5秒でつけた名前だ。

曰く、昔の実験動物のラットにつけていた名前らしい……どうなんだろうか、その感性。

.....

「……今日は上機嫌ですね。ご主人」

「もう、ご主人だなんて、エミリア様でいいですよ？」

「ご主人と呼ばせてもらいます」

「そうですかー」

そういつて、彼女は美味しい野菜とお肉のたっぷり入ったシチューを掻き込むと、ニッコリと満面の笑顔を浮かべた。何と云うか、キヤラに合わないその笑みに何かうすら寒い物を感じる。

「最近売り上げも上がっていますから、喜ばなされるのも分かりますが、」

「いえいえ、そんなちっちゃい事じゃありませんよ？」

「では何が？」

聞く、というよりも、聞いて欲しそうだったから聞く。

すると彼女は満面の笑みを更に強くして、

「とうとう！私にスポンサーが付きそうなのですよ！」

「……はあ」

スポンサー、その意味は知っている。

何しろ、私の前のご主人がこの女に持ちかけた“釣り針”がまさにそのスポンサーの話だったのだから。しかし、あの騒動から数日しかたっていないと言うのに、彼女はこういう感性をしていたらこうも喜べるのだろうか？

「……その、私が言うのも何なのですが、大丈夫なのですか。そのスポンサーは」

そう尋ねると、主は笑みのまま、首を傾けた。

「さあ？」

「さあつて、」

「一応、信頼している方からの紹介ですから、貴方の元雇い主のあの阿呆よりかマシだと言うのには違いありませんけど、私、あった事無いですから」

それはまあ、信頼するも何もないだろう。

「……大丈夫なのですか？」

「ソレを確かめる為にも行くのですよ、さあ、いざゆかん、商売の街バリスへ」

そう言っつて私の肩をがっしり掴んで、彼女は明後日の方向を指さした……って

「待ってください」

「なにかしら？」

主はわざとらしく目をパチパチさせる。殴りたい。

「私も行くんですか」

「貴方が荷物持ちをしなければ、誰が荷物を持ってくれるのですか？」

平然と言いやがる。この女。

「あの元傭兵とかいう男達を連れればいいのでは？」

「あんなむさい男達連れてつたら私の品性が疑われてしまいます」

貴方の品性を垣間見た事は私にはありませんが、と言いたいが、言つたら殴られそうなので言わない。

「気が乗りませんか？」

「そう言う訳ではないのですが、まだこの店の仕事お覚えられていますので、不安で」

それに、と、言葉を続けると主は首をかしげる。いや、わかっているだろ、お前、

「私、服、これしかないんですが」

今着用している服。エミリアから営業用の制服だと言って渡されたそれは、貴族に仕える使用人達が着込む服、俗にメイド服と呼ばれる服だった。ただし、何故かえらくスカートが短くて、此方の虐待のあとが見えないギリギリまで露出が多い。これでは娼婦と変わらない。

私に、これで外に出ると？

「私、これで外に出たら変態です」

「可愛いじゃないですか」

「そう思うのは貴方だけです」

その後、長きにわたる討論で、「スポンサーに品性疑われますよ」という私の至極まっとうな意見をしぶしぶ受け入れた彼女は、自分のおさがりだと言う黒いローブと衣装を渡してくれた。彼女の背丈が私よりも少し低い分、これはこれで妙に背徳的な気がするが、前よりずっとましなので、文句は言わなかった。

第十四話 とある奴隷の日常と苦悩（後書き）

というわけで、レギュラー固定、フィリス
よろしくお願いします

第十五話 『エリクス』との商談

パリス、首都から歩いて数日、馬車なら半日ほどで着く、商売の発展した都市。

海原のすぐそばに存在し、隣国との交易の拠点としても重要な、典型的且つ、重要な交易都市でもあります。外からの資源、つまりは自給自足ができない為、人々は様々な工夫をこらし、自らの商売の発展を目指し、それが結果として街を非常に発展させるという、活気ある世界。

「やー、素晴らしいですね。人多し！」

眼前に広がるのは人、人、人、そして店、店、店、そしてなにやらとっても胡散臭い奇妙天然な品物の数々。見ていると全く飽きません。むしろいつまでも見ていたい。

勿論、実際はそんな訳にはいきませんが、目的は別にあるのですから。

「さて、魔法薬店、『エリクス』はどこかしらっと…」

『エリクス』、我が国アステイニアの中でも一、二位を争う巨大魔法薬店。首都ガイディアにも幾つもの店舗を持つその超大企業が、今回の私のスポンサーとしての交渉相手。

我ながら不相应な相手だと思いましたが、こんな相手と話をつけてくれたリーン先生さまさまです。

というか、あの人、一体何者なんでしょうね？この前彼女の研究室を覗いて資料を拝見していたら、特に何の拍子も無く平然とこのメモ渡して「話をつけたから、後は勝手に頑張りなさい」とかい放つて、そのまま次の授業に向かっていくあたり、かなりの大物の様な気がします。

「主、こっちです」

と、気がつけばフェリスが先に進み、道を示す様に指さしていました。

「あら、フィリスは知っているんですか？『エリクス』」

「前の前の主の付き添いで、良くこの街には来てました」

「素晴らしい、頼りにしていますよ、フィリス」

「そうですか」

しかし帰ってくる返答は、適当。

「……ひよつとして、怒ってます？フィリス」

「いいえ、そんな事はありません」

フィリスは全く笑みの無い顔でそう言います。

ま、そりゃ楽しくはないでしょうね、此処に連れてきたのって荷物持ちだし、そもそも彼女を奴隷として使役している私だし。別に友好的になるうだなんて全く思っていないんですけどね。

しかし、隣に並ぶ顔が不機嫌なままだと、何処となく此方のテンションも下がる、ので、

「フィリス」

「なんです、主」

むすつとした彼女の顔に笑みを向けて

「飴を買って差し上げましょう」

「飴？」

聞き慣れない言葉なのか、彼女は首を傾けます。

「お菓子ですよ」

「お菓子」

表情を変えないように努めているらしいのですが、ピクリと眉が動きます。

「甘いですよ」

「甘い」

若干目が見開き、その瞳の奥で期待の光が瞬きます。

「素晴らしいものです」

「素晴らしいっ」

少しピョンと跳ねて、しかし努めて無表情。バレバレだと言つのに、毅然と振る舞う態度が可愛い。

フィリス、元暗殺者の癖に。何て分かりやすくて、扱いやすい子なんでしょう。

「初めまして、錬金術師のエミリアです。此方、使用人のフィリスと言います」

とりあえずは二人で並んで挨拶。礼儀作法は知らないのが適当。ここら辺を気取っても仕方ないですしねえ。

さて反応は、と見ると、リックさんは此方を意外そうな顔で見て、

「いやいや、しかしリーンから話は聞いていましたが、こんなにも若いとは、驚きました」

おや、いきなり気になっていた事を、

「いえ、私もリーン先生が、あの『エリクス』の社長さんと面識があると言つのに驚きましたよ……ご友人ですか？」

「いや、娘です」

……はい？と、口に出そうになったのを何とか抑えて、息を一度吸って吐きます。

今なんか平然と妙な情報手に入れちゃいましたけど、抑えて抑えて

「お二人は……親子だということですか？」

「いやあ、あっはっは、お恥ずかしい」

あっはっは、じゃないんですけど。初耳なんですけど。というか、リーン先生、それくらい言っておいてほしいんですけど

「いや、まあ、親子と言っても義理の、ですがね。妻と子供ができ

なくて捨て子だった彼女を引き取ったのですよ、あっはっは」

「まあ、そうだったのですか、うふふ、」

いやいや、そんな話平然とされても反応に超困るんですけど、まさか既に此方の反応を試しているのですか?! 何たる常人の理解を超える試練! 流石ロイヤリティ!

いや、まあ、そんなわけないんですけどね。この人変だよ。うん。

「はっは、いやまあこんな身内ばかりの話をされてもおこまりでしょう?」

「いえ、そんな事は」

YES YES YES、笑顔が引きつりそうです。

しかし、顔は笑顔を保つ。フェリスはひたすら黙って俯いていると言っているから問題なし。大丈夫。私、あと十年は戦える。

でもさすがにこのままはつらい、ので、

「リックさん。そろそろ……」

一言と切り出すと、彼は何処か気の抜けた笑いを止めて、

「はあ、そうですね。では、商談の話に移りましょうか」

と、冴えないオヤジ風から、雰囲気が変わります。

口をぽっかりあげた間抜けな笑みから、少し添えるだけの静かな微笑に、瞳は僅かに鋭く、全体の表情は何処となく鋭利な感じに、その姿勢も表情につられて、綺麗に整えられます。商談モード、とい

う奴なのでしょうか。

此方も姿勢を改め、意識を少し尖らせませす。とはいえ、気負い過ぎても駄目、がつついてもNOです。あくまでもこの商談の事にのみ、意識をやるのです。

「さて、面倒な話はさておき、一先ず貴方の錬金術師としての実力、研究成果の方を拝見してみたいのですが、早速ですがよろしいですか？」

「はい、ではひとまずこれを」

そう言っつて私は、ごく最近発明した毛生え薬【育毛剤マキシマム】を取り出しました。

.....

「.....ふむ、なるほど。体毛の成長を急激に促進させる薬、ですか」

一通りの説明を終えてからというものの、リックさんはしきりに感心したそぶりを見せてくれています。うむ、好感触だと思いたいですね。

「既に毛根が死んでしまっつていても蘇生できます。病などで失われ

てしまった場合でも癒す事が出来るので病院などでも利用できると
思います」

「原価は？」

「安価です。子供の小遣いでも総てを揃えられます」

高価な材料を手に入れる事が出来なかったから、やむをえない事情
ではありましたが、ここではアピールポイントに早変わり。

「ふむ、では副作用は？」

「代表的なものは、ありません。あえて言うのなら効果が強烈な分、
使用する場合節度を守らなければならぬと言う事でしょうか。使
いすぎると毛根が再び死滅します」

下町の禿げオヤジ達で実験済み。だからあれだけ使用頻度を押さえ
ると言っていたのに。お陰で二度手間になってしまいました。儲け
も二度入ったから嬉しかったですけど。

「効果が強力なのはわかりましたが、誤って他の体の部分に付着さ
せてしまった場合は？」

「一応、そうならない様に器具も考案してはありますが、もしも失
敗した場合に備えて除毛薬も用意してあります。」

これまた下町の禿げオヤジ達の失敗から来た対策でした。いや、あ
の顔面毛むくじやらになったオヤジ達の醜い事。バケモノかと思っ
て魔術ぶちかまそうとしてしまったのは良い思い出。

しかし、本当に言い実験材料になってくれますね。あのオヤジ達。
今度クッキーでも焼いて持ってってあげましょう。

「しかし、こう言うては何ですが、少々変わった研究成果ですね。
何故この研究を？」

「今まで、病への特効薬や強力な術式の開発などは進んできましたが、こういった、日常での人々の悩みをケアするという試みは今までされていませんでしたから」

「だから自分がしてみようかと？」

「ええ」

正確に言うのなら、誰も手をつけていないから成功すればカネになると思っただけなんですけどね。言わなくてもいい事なので、言いませんが。

「いや、面白い話でしたし、素晴らしい話だ。この薬だけでも上手く売り出せば多くの利益につながるでしょう。これだけ明確な効果が表れるのなら」

勿論、そうなるように作ったものなのだから、そうならなければやっつけられない。

「貴方のような人材はなるべく早めに手元に置いておきたいと思うのが私達の正直な感想です」
「では」

私の胸の中でファンファーレが鳴り響き、賛美の渦が木霊しそうだった、その時でした。

「しかし」

容赦のない、逆説の一言が告げられたのは。

……まあ、そんなにすんなり話が進むとは思っていませんでしたけどね

第十五話 『エリクス』との商談（後書き）

商談編……かな？

正直こういっ話し合いは書いたことなかったので少し不安
違和感を感じられたのならおしえてください

第十六話 あるーひーもりのなーかー・再び

パリスから歩く事半々日程の短い時間で着く、鬱蒼と野草が生い茂る野原の上にて

眼前に在るのは奇妙な、しかし美しい、まるで淡く光る玉の様な花をつけた珍しい野草が一本、

「もうひとつ、研究成果をもってこい、ですか」

まずスコップで周囲の土を掘り進め、根っこが傷つかないように準備、

「ま、これくらいの条件はつけられるでしょうね」

そして丁寧に引き抜きます。土を払い、専用の保管器具に収納。取り過ぎるのは良くないので数を見極めて、それを繰り返します。研究材料の取得取得、やっぱり普通の採集場所と違うと今まで見たことのないものが沢山あって、大漁ですな。

「そういうものなんですか？私はこのいう錬金術師との契約は見たことないのですけど」

フィリスが背後でレッドハーブを採集しながら尋ねてきます。いや、まあ、私も初めてではあったんですけどね。スポンサーとの契約。

「一応、ほかの錬金術師の方にもその時の様子は聞いていますから

ね。私とエリクスはあくまでも互いに利益を得るための契約ですからね」

むしろ彼は温情を与えてくれた方だと言っていていいだろう。予想もある程度はしていた。

「では、研究のめどは立っているんですか」

「いいえ、全く……なんです、その顔」

フィリスは非常に道徳的でない顔をしていました。自分の主人になんという顔をしているんですか。この子ったら。

「仕方ないでしょう。あなたが来るまでの間、私一人で店の薬作りやら店番やら何もかもやってたんですよ？その上研究まで幾つものなせるわけないでしょう。死にますよ私」

「……大丈夫なんですか？」

「だからリックさんも期間を設けてくれたんですよ。少しですけど、資金も」

期間は約半年。それまでに新たな研究成果の“めど”でも見せれば契約成立だとのこと。勿論、その結果次第で優遇のされ方も変わるようですが。

ひとまず帰ったら、ジジイの研究書類でも漁りましようかね。まだ読めるところも少ないですし、8割くらいはただの書き損じですけど。

「フィリス貴方にも手伝ってもらいますからねー」

「……」

人体実験の被験者としてーと言おうとして、しかし返答がなく

「フィリス？」

振り返ると、フィリスはぴったりとその動きを止めて、まるで何かにくぎ付けにされているかのように身じろぎ一つせず、前方の小林を見つめていました。

「何見てるんです？」

つられて見てみると、そこにはなにやとても黒くて、大きくて、なにやら筋骨隆々で唸り声をあげる二本足の物体がありました。なんですかね、これ。

「ああ、キラーウルフ」

思い出して、ぱんと手のひらを打ちました。

キラーウルフ

元は単なる狼だったものが、マナの影響によって凶暴化、そして進化した危険な魔物。全長二メートル超、体の大きさは他の魔物と比べて大きくないが、集団で行動し、群れた時の危険性は魔物の中でも上位とされている。

武器はその牙と爪、大人でも紙きれのように引き裂くことができる。獲物を追うときは四足で、しかし食らうときは二足で襲いかかる。

「……うん、確かそんな魔物だったと思います」

「解説している場合ですかああ！！」

直後、頭の上らへんからとても疾走感のある、空気を切り裂く音がしやがりました。

「ストオオオオオオオオオオッ！！」

瞬間、私の声にフィリス、そして何故かうしろのキラールーフまでびっくりしたのか動きを止めました。発生する奇妙な静寂。そんな中フィリスは顔をひきつらせて

「……………なんですか？」

「思い出したのです！」

そう、キラールーフの特性。それは

「キラールーフの血には自己保全効力があるのです！」

キラールーフの最大の特徴。それは自らの怪我を自らの血が癒すと
言う不死性、自己保全効果。かの有名な魔族、吸血鬼にも近い能力
を保有しているのです。為、その使い魔とも変身した姿なのだとも
伝えられているとジジイの資料で見ることがありました。

キラールーフの危険性から、その研究はあまり進んでいないですが、
それは逆を言えば研究すれば未発見のブツが見つかる余地があると
言う事！

「……………つまり？」

何やらひきつった顔のフィリス、安心するように笑みを向けて、答
えます。

「行きなさいフィリス！奴の血を絞り取ってやるのです！吸血ヒルの如く！」

「本当に馬鹿ですか！貴方は！」

失礼な。私は馬鹿ではありません。ちょっと好奇心旺盛でヤンガいなだけですよ。

「そんなわけでレッツゴー！」

「一人でいけ！嫌だ！はなしてええええええ！！！」

第十七話 イノチのフシギ

「……………それは……………散々だったな」

40を超えた無精ひげの男、元傭兵でキース曰くエミリアの加害者にして犠牲者その十三番らしいその男は、でかい図体に全然丈の届かない筈を掃きながら、あの地獄から生還した私の話に顔を引きつらせた。

キラールーフとの戦闘、そこから私とエミリアが生還し、一週間が経過した。

現在、私は何とか前と同じ、看板娘の仕事に落ち着いて、この仕事のありがたさを実感している。うん、身の安全が保障されているというのは素晴らしいことだ。

「もう二度と暗殺なんてしない。ナイフ一本で魔物に突っ込んだりしない」

「それが許されりゃな……………犠牲者十四番」

「……………それを言うな、犠牲者十三番」

この男とその仲間は定期的にこの小さくて不気味な店に来ては彼方此方の掃除をして店番をしてから帰っていく。何故彼らが彼女に従っているのかは、まあ、知らない。聞いていないし、彼の仲間によつとも聞くと顔を青くしてフルフルと顔を左右に振るって聞きだすこともできなかった。

ちなみに、そのリーダーの男、ノイとは妙に気が合っている。年相

応に落ち着いているこの男とは年はかなり離れているが、意外なほど話が合う。妙に薄暗いところで働いている者同士ということなのだろうか。

「で、結局どうやって倒したんだ。何体もでたんだろうに」

恐ろしそうにノイは言う。彼も傭兵時代、キラーウルフとの戦闘の経験はあったのだろう。

「一匹は、しとめたが、それで精一杯だった……」

仕留めたのはエミリアだ。私を囮にして見事にキラーウルフの脳天を貫いて、首を引っこ抜いた。あの女は本当に化け物だ。

「なら他のウルフはどうしたんだ？」

「【悪臭玉】、あれを使って追い払った」

【悪臭玉】、魔物が存在する危険地域では必需品といっても過言ではない、強力な悪臭を撒き散らす特殊なアイテムだ。エミリアが移用したのは彼女が作った特殊性、一発放つだけで見事にキラーウルフ達は退散していった。

「そんなのがあれば、それ、最初から使っていれば良いじゃないか」

「あの女『忘れてた』、だそうだ。殴ってやった」

奴隷の呪印を忘れていて、殴った分だけで自分も痛んだが、気にしないことにした。

「……無茶苦茶な人だ」

「そんなこと、わかりきっているだろう。貴方も」

「……まあ、そうだな」

奴隷二人で揃って溜息をついて、店の奥にある、彼女の研究室へと続く扉を眺めた。

「引きこもってから……これで1週間だったか？」

「ああ」

そう、今彼女、エミリアはずっと研究室に引きこもり、研究を続けている。時々店のほうにひよいと顔を見せて商品を補充するもの、すぐに研究室に戻っていく。風呂も入らず、食事すらとっていない。本当に研究につきっきりになっていた。

おかげで最近、不慣れな料理をする機会が増えた。レシピも無い状態で、エミリアの作り方を見真似でしてみるが、どうにも彼女のように美味しい物ができない。

この前作ってみたものには味が無かった。どうしてそうになってしまったのか。さっぱりわからない。

「……今度、料理を教えてやる」

「知ってるのか、料理の仕方」

「一応はな、サバイバルの経験があつて、簡単な料理なら知っている」

と、そんな微妙な世間話をしていたときだった。

「「あ、」」

ぎぎぎぎぎぎと、何か得体の知れないものはいずって出てくるよ

うに扉が開いて、中から、

「……おは、よう、ござい、ま、す」

「……今はお昼時ですよ、主」

「そうですか、死にます」

そういつて彼女は死んだ。死んだように眠った。

「……これは、介抱しなければならんだらうか」

「……これで餓死したらお前も死ぬんだらう」

「こんな馬鹿らしい理由で死にたくないなあ……」

……
……
……

研究は一度始めるとのめり込む。泥になるまで。

なぜかというと止めるタイミングが見つからないから。”一区切り”に到達するのにも全力を注がなければならず、努力と苦労、そしてセンス、全てをフルに発揮して見出す結果はほんの僅か。

だからこそ研究はのめり込む。のめりこまなければ何も見出せないから。

とはいえ、一週間ものも食べずに眠りもしなければ、死にますよね！。

「……あー、死ぬかと思いました」

ノイが作った男料理を食べてなんとか一息つきました。意外と美味しい。予想外の才能ですね。今度ネインの所に働かせにいかせましようか。

「それで、研究は完成したんですか？」

一緒に美味しそうにがつついていたフィリスが首を傾げてたずねて来ます。それが絵になる。卑怯なくらい美少女ですねこの子。

「たかだか一週間で何かできる訳無いでしょう」

余程偶然が重なり合わない例えジジイでも一週間は無理。

「この一週間はキラールウフの再生メカニズムに没頭してましたよ」

あのテラテラした紫色の血と断末魔の咆哮を上げた恐怖の表情で固まった生首、それらと一週間睨めっこ。思い出だけで気が滅入りそう。首引っこ抜いたの私ですけどねー。

「……あれだけ苦労したのに」

「再生のメカニズムはある程度分かりましたけど」

「メカニズムね、……どんなものだったんだ？」

「キラールウフの血、体は、自分がどうであったかを記憶し、記憶にしたがって元に戻るうとするんですよ」

「……よく分からないな」

ノイの言葉にフィリスもこくこくとう頷いて見せます。

うーむ……流石に真つ当な学を受けることができなかつた人達に教鞭をとつたことは無いですねえ……説明しにくい。

「ノイ、貴方は元傭兵なら骨折の一つや二つしたことがあるでしょう」
「う」

「一つや二つって……そりゃあるが」

「どうやって治したんですか？怪我」

「どうやって……そりゃ、歪みを真つ直ぐにして、添え木して、じつとしてたら、勝手に治つたぞ」

うん。

「人の体も怪我をしたら治るものです。多少歪もつと、それが余程ものでもなければ」

「キラーウルフの回復力も”それ”ということですか」

「ま、そうですね。簡単に言えば」

正確には、その血、医学的に言う所の”細胞”という奴、その一つ一つが元の体に戻ろうとするのですけど、そんなこと説明しても分からんでしょうね。そもそも”細胞”という世界の話も、未だ説明されていないのだから。

「で、それは薬になりそうなのか。錬金術師殿」

話に飽きたのか、手っ取り早いノイの質問、ため息が漏れました

「猛毒にはすぐにでもできそうですけど、これを薬にするのは骨が折れます…」

確かに再生ではある。が、治癒ではない。癒すのではなく戻るのが自分の形に。

だからこれを人の体に打ち込んでも怪我が治りはしない、どころか、その”細胞”に体を奪われるでしょう。キラーウルフの”血”は、他の生物の”血”を取り込み自分のものとする、人狼を生み出す薬なんて製薬組織に売れるわけが無いですし。

ならば、そのキラーウルフの記憶を人の記憶に”書き換える”……そんなことができたなら私は歴史に名を残すほどの学者になるでしょうね。

うん、できる訳が無い。

「……諦めるか、それとも方向性を変えるか……むー」

折角解き明かしたのだから、なんらかに利用したい気もしますが……しかしこういうところで立ち止まってもどうにもならないし、どうしたのか、

「研究も良いが、飯もちちゃんと食ってくれ。折角つくったんだ」「りょーかいですよ、さー」

目の前の豪快なる男料理をさっさと食らって、もっぺん研究室に引き籠もりますか。

「……おや」

と、そんな決意をした矢先のことでした。私の家の脆い扉がガンガンと猛烈に軋む音を立てたのは、

「誰ですか。私の扉を破壊しようとしているのは」

「いえ、あれはノックなのでは？」

「いいえ、不審者です。」

「は？」

ええ、きつと、そうに違いない、私は自分の知り合いには扉をノックするときはガラス細工を扱うようにと言いつけています。つまり今ノックしている男は断固として知り合いではない。つまり！不審人物！

「食らえ、不審者撃退、爆風魔術」

簡単な術式構築を一つ、二つ、組み合わせ、そして発動

『ぎゃああああああああああああああああああ！！』

「主、誰かの悲鳴が」

「気のせいでしょう」

「おい、なんか数回地面にバウンドする音が聞こえてくるぞ」

「売り物の豚でも転がってるんじゃないですか」

そんな平和な話を和やかに続けていると、

「誰が豚だあああああああああああ！」

ドッターン、バキイという、扉の断末魔が、部屋に響き渡りました。

ああ、悲しい。後で金払わせてやる。

「やっぱり貴方でしたか。トン」

「誰がトンだ！私の名はトンファルだ！二度と勝手に略すな！」

我が家の扉に止めを刺し下さった張本人、クリクリパーマの金髪少年、トンファルという名の彼が何故かあちこち焦げ臭いにおいを漂わせながら、そこに仁王立ちをしていました。

第十八話 騒がしい男

「貴様は何時も何時も！私に何の恨みがある！」

「貴方が丁寧に、生まれたての小鹿を扱うようにノックしないから悪いのですよ」

「だから何故お前は何時までもあんなスタボロの扉を使用しているのだ！触れるどころか風が吹いただけで軋んだぞ！新しいのに変える！」

「いいですけど、お金は貴方が払ってくださいよ」

「何故！？」

「貴方が壊したじゃないですか！ええ、まんまと」

「今まんまと、と言わなかったか！？」

「いやいやそんな、うん、ええ、あはは」

「せめてちゃんと否定しろ！！」

「お金ください」

「全部無視か貴様あ！！」

先ほどから目の前で繰り広げられている漫才、もとい怒声の応酬、もとい一方的な罵り合い。

でかい声を張り上げているのは先ほどちょっと焦げ臭い匂いを漂わせていた偉そうな金髪の男、その罵りを適当に聞き流しているのはわが主だ。

……しかし一体何なんだろう、この馬鹿っぽいやりとりは。ノイは既に面倒くさそうな空気を察知していたのかそそくさと店番をするといって逃げ出した。ずるい。

兎も角、このまま置いてけぼりなのはしんどい。

「主、この男は何ですか」

「ああフィリス。この男はトンです。私にお金をくれるんです、うふふ」

「主、ひょっとしてまだ死にかけてませんか」

目が空ろだ。ただ単にお金に目がくらんでるだけかもしれないが。

しょうがないのもう一方に聞こうとする、と、何か知らないが此方の顔を凝視していた。何だ、私の顔に何か付いているのか。

「で、貴方は何の御用で此方にこられたんですか。トンさん」

「トンファルだよ。美しきお嬢さん」

話しかける、その途端になにやらすごい爽やか笑顔を向けてきた。何だこいつ。気持ち悪いな。うん。

「どうせ”集会”に出ろ、とでも言うのでしょうか。いつもの事です」「わかつているのなら何故こない！」

主に反応しすぐに顔を怒りに変えた。表情のコロコロ変わる男だ、しかし、

「……集会？」

その言葉の意味は勿論分かるが、彼女が何かの組織に所属しているとはとても思えなかった。ひょっとして、このご近所の地域集会とかそんなのだろうか。

「違う、ご近所集会などと、そんな低俗なものではないんだお嬢さん」

「はあ……ではなんだと？」

その質問を待つてましたというように、そう！と拳を握り締めると、トンファルが吼えた。

「この国に存在する錬金術師達の、錬金術師による、錬金術師の為の知の結集！魔の深淵を覗き得たその知識を交わし！更なる高みへと至る為の」

「まあ、錬金術師同士の親睦会みたいなもんですよ。お菓子食ってくっちゃべってダラダラして、お偉いさんを煽ててお酒酌するベタなやつ」

「ああなるほど」

気分よく語りだしたトンファルを軽く無視してエミリアがあっさりと解説した。思い返すのは前の主が良く開いていた商人同士の会合。あの男は周りにちやほやされていい気分になっていたが、あれに近いものなのだろう。

つまりいきなり演説を始めたあの男も錬金術師ということなのだろう……錬金術師というのは噂にたがわず変人ばかりなんだな

「そもそもこの会の歴史はこのガイディア王国の創立と同時に」

「それで、主は其処には行かないのですか？」

「行かないですよあんなの、見栄っ張りの阿呆ばかりなんですもん」

「見栄っ張り……」

ちらりと凄い気分よさそうに語る少年の顔を見ている。確かになんとなくアホっぽくて見栄っ張りっぽい気がしないでもない。

「無論、ただ親睦を深めるだけ何て事はあつてはならない！我々は友であるが」

「あんな所いっても時間の無駄無駄」

「でも情報交換くらいはできるんじゃないですか？行き詰っているのでしょうか？研究」

「うーん……それは確かにそうなんですけど」

主は暫く悩むように頭を掻いて、くるくるとスプーン手回しする。まあ、確かにこの女はそういう誰かに擦り寄るような馴れ合いは嫌いそうだ。

だが、暫く目を瞑り仰いだ主は息を吐いて、彼女は立ち上がった。

「ま、良いでしょう。一度あの阿呆どもにも会わなきゃとは思ってましたし」

そう言ってそのままスプーンを、ついに演説もクライマックスにむかいつつあるトンファルに向けて、

「【流れの淀みよ、爆ぜろ】」

「ぎゃあああああああああ……」

彼を爆発させた。何故か

「さ、準備しましょうフィリス」

「なんで爆発させたんですか。主」

まあ、五月蠅かったが

.....
.....
.....

ガイディア王国の、中央街

此処、王都の中央に存在する王城の間近に存在する此処は、そうと決まったわけではないものの土地の値段の高さから特権階級の者達の住まいが続く高級住宅街。

私とて前・馬鹿主の護衛に付いてきたことがあっただけで、あまり足を踏み入れたことは無い。こんな場所踏み入れる機会も用事も、奴隷の身分の者には無い。

そしてそれは主、エミリアも同様だと思っただが、その歩く姿が妙に堂々としているのは彼女の性格がそう見せているのだろうか。格好はいつもと同じ不気味な黒ローブの癖に。

さて、それはおいといて、

「着いたぞ」

若干焦げ臭さを増したトンファルの声に前を向くと、

「……………でか」

恐ろしくでかい宮殿が姿を現した。前馬鹿主の家も此処まででかくは無かった。それくらい、一体何の用途に使うんだと叫びたいくなるくらいの巨大さ。

「相変わらず無駄にでかいですね、無駄に」

「無駄なものか！いいか！良く聞け！この宮殿は「はいはい、行きますよフィリス」

「……………行きたくないなあ」

自分でエミリアを引っ張っておいてなんだが、いやな予感しかしないのは何故だろうか

第十九話 腐敗と忠告

トンファルの案内に従って主と私が宮殿の中へと進んでいく。

その中の宮殿もまた、無秩序に豪華絢爛な造りになっていて、言葉を変えるのなら成金趣味丸出しな内装で、なんと言うべきか、言葉にするのをためらったしまうようなアレな感じがぶんぶんしていた。

「……主、酷くアレな気配がしますけど、何ででしょう」

「なんとなしに察しがついているんじゃないですか。フィリス」

返されたその言葉に顔が引きつる。これ以上この話題を続けるのを避けるため、視線をさまよわせると、目の前でこの無駄にでかい宮殿を長々と語りつくしている男が眼に入った

「そういえば、結局聞きそびれているんですけど、トンファルさんって、なにをしている人なんですか？」

その疑問をトンファル、では無く、エミリアに尋ねた。どうせ彼自身に尋ねれば延々と長話をぶちかましてくれそうだったから嫌だった。

やっぱり五月蠅いよな。あれ。

「宮殿の内装は中世の」

今も此方が全く聞いていないのにこの宮殿の事語ってるし、

「トンファルは国家認可証持ちの錬金術師ですよ。王宮勤めの男で

す

「つまり、有能な男だと？性格はアレですが」

「ええ、性格はアレですが。特に鉱物学に関して中々のものです。」

「鉱物学？」

「石ころを金に変えるとか、昔ながらあったアレですよ。現在ではマナによって性質の変化した鉱石の研究、解析をする学問ですね。ミスリルとかそういうのです」

石ころを金に、というのは兎も角として、ミスリルで作った武器と
いうのなら扱った事はある。やたら頑丈で便利だとは思っていたが、
それらも彼のような錬金術師がいてこそ生まれたのかもしれない。

「そう！此処にこそこの宮殿の最も技巧の凝らされた」

認めたくはないが、変な男だ。

「……はあ、なるほど。で、何でその男と主が？」

「私の師匠繋がりでですよ。元々トンファルは爺に憧れていて、と、
前を向くと、今まで見た中でもよりいっそう巨大な扉が現れた。

「トンファル。トンファル。付きましたよ」

「だからこそここで！……む、なんだ。もつついたのか」

そんな様子のトンファルを無視して、エミリアはささっと扉に手をかけた。軽くノックしてあっという間に部屋に入るうとして、

「待て」

それをトンファルが止めた。似合わない真剣みのある声で。

「何なんですか、付いて来いといったり待てといったり」

「忠告だ」

エミリアに近づき、彼女の両肩を掴んで、

「いいか、今回はおとなしくしているんだ。」

彼は言葉を続け

「誰に何を言われても黙っている。出席している事実さえ残せれば後に繋がる。だから」

「分かっていますよトンファル。気遣いどうも」

トンプアルが、彼女に一体何を言っていたのか私にはつかめなかったが、エミリアはまるで聞いたような風ではなく、そのままさつさと部屋の中へと入っていく。

「……はあ」

ああ、嫌な予感がする。本当に。

……
……

と、まあ、そんなこんなで、

「いや、流石ゴルダーク様！素晴らしい着眼点でした！」

この国でも国家に認められ、支援される一流の錬金術師達の集う集会、に、出席することになったわけで、

「いや全く！！先生の言葉を聴いたときは感動のあまり一瞬心臓が震えましたよ！」

今現在、お決まりというか定例の優秀者による発表会が終わり、豪華な食事を用意しての立食パーティが行われている、のだが、

「ははは、大げさだな諸君」

その立食パーティの会場、

なんというか、ある意味で予想していた通りというか、エミリアの言葉の通りというべきか、本当に酷い光景を私は目撃している。

露骨過ぎるな媚売り、それを享受し優越感に浸る権力者。裏で渡される金銀宝石。

うん、酷い。これは酷い。相応の覚悟はしていたものの、対面すると顔を引きつらざるを得ない。なんだこの露骨っぷり

腐敗。見事なくらいに典型的な組織の腐敗が起こっている。

「……………」

エミリアの指示通り、無表情を勤めてはいるものの、俯き、目をそらしてしまいそうになる。正直、直視し続けていたい光景ではない。

組織腐敗、こういう場合、理由というのは結構単純だ。

行き過ぎた権力の集中、学問の分野にありがちなコネクションの暴走。大概はそれで説明が付いてしまふ。恐らくこの様子を見る限り、此処もその例に漏れないことだろう。

成るほど、彼女が此処に来たくないといった意味が分かる。此処は、行かなくてもいいところだ。真つ当な神経のものがいるべきところではない場所だ。

彼女が真つ当であるかおいておくとして、だが。

いや、それはともかくとして、今は、それよりも気になることがある。

「……」

視線、そう、視線だ。この部屋に入った直後は当たり前だが、それ以降も途切れなしに此方に、というか主へと会場の彼方此方から視線が注がれているのだ。

肌で感じるその視線の色は、悪意と敵意、そして恐怖だ。それがいくついくつも主に向けて注がれている。

一体、この女は何をしたのだろうか、と、エミリアを見てみるが、彼女はテーブルに並ぶ料理を美味そうに啄ばんでいる……良くこの視線の中でそれができるな。

「おや、そこにいるのは、エミリア君ではないかね」

と、今の今までちやほやされていた白髪の老人、此方に被虐的な笑みを浮かべて近づいてきた。見るだけで分かるような敵意と悪意に染まったその笑みに変わらぬように勤めていた表情が引きつる。

一体我が主は何をしたんだ？

と、エミリアを見てみると、

「あら、お久しぶりですねゴルダークさま」

彼女は平然と笑みを浮かべ、迎えていた。豪胆すぎる。とても十代とは思えない。

「よくまあぬけぬけと顔を出せたものだね。師弟揃って恥知らずな」

「あら、それでも一度として私の師に勝てもしなかったというのに、厚かましくも人前でふんぞり返ることのできる御方には負けますわ」

「エリクスに商談を持ちかけられたらしいが、いや、愚かしいことだね、成り上がり者とは。こんな小娘の器量すら見抜けないとは」

「あら、それは嫉妬ですか？男のソレって醜いと聞きますけれど、噂以上ですね」

受け答えを続ければ続けるほど、ゴルダークと言う男の顔が真っ赤に染まっていく。傍から見ればどこか面白い光景なのかもしれないが、近くで見ると嫌な汗しか流れてこない。

というか、この男はなんだ。確かにエミリアは異常な女だが、それでもたかが十代の小娘に対してとる態度なのだろうか、それが。大気ない、というべきか。いや、こんな自分のイエスマンでパーテ

イを囲うような人間に大人であることを期待しても無駄か？

なら、エミリアはどうだろうか

「主、どんどん空気悪くなってますが」

「貴方が気にする必要はありません」

一蹴。だめだこれは。

既にこの騒動は会場の視線を集めている。いくらか同情の表情を浮かべている者もいるが、大半はエミリアを疎ましく思い、嫌っているように見る。

そんな観客達の中に、あのトンファルの姿もあった。なにやら頭を抱え、うなだれているが。あの会場に入る前の忠告はこのことをさしていたのだろうか。

「貴様！ゴルダーク様になんと言う口の利き方を！」

「そうだ！今の錬金術師の地位があるのもゴルダーク様のおかげなのだぞ」

「浅ましいんですよ。貴方達は」

とうとう主はストレートに罵倒を始めた。会場は更に温度を下げ、事態は修羅場へと変わっていく。

.....

ああ、浅ましい、鬱陶しい、本当にそう思う。

私の目の前に並ぶゴルダークの取り巻き達。その顔を怒りにゆがめるその様の醜悪なこと醜悪なこと。本当にどうしようもない。

「なんだとキサ」黙りなさい。探求を忘れた愚者どもめ」

一言告げ、切り捨てる。雑魚どもに用はない。用があるのは、この目の前で汚らしい老いた顔を晒すクソジジイ、ゴルダーク。

「忠告しておきましょう。ゴルダーク。もし今後、私に、私達に危害を及ぼすような真似をしたときは、痛い目を見てもらいます」

「は！お前に何ができるといふのだ！」

「ええそうですね。貴方が真つ当である限り、私は何もできませんし、しよつとも思いません」

「哀れだな。負け惜しみか？」

見下し、嘲笑う。この男の言っていることは確かに事実。

だが、私は知っている。この男が私の背後にいる爺の影を恐れていることを知っている。そして私を恐れていることも、知っている。恐れるのは構わない。だが、勝手に警戒し、ちよっかいをかけられるのが鬱陶しい。

故に忠告する。

「未だ勘違いしているようだから、言っておこう。私は貴方の事なんてしたこっちゃない。どれだけ栄光を掴もうと権力を掌握しようとしてもいい。興味がない」

「なっ」

「だから」

首根っこを引つ掴み、耳元で囁く。

「だから、”貴様”も私にかかわるな、二度と。もしこの忠告を無視して”また”私に、私達にちよっかいかけてくるようなら、惨い有様を晒してもらおう」

「だ、だから貴様に」

「言ってるだろう。”貴様”が真っ当である限り、貴様には手を出さない、と」

言うだけ言って、突き飛ばす。無様によるけるその様を嘲笑い、

「いきますよ、フィリス」

フィリスを連れ、扉を開ける。幾つ者感情の入り混じる視線を無視し、去り行くこの瞬間だけは爽快だったと言えた。

第十九話 腐敗と忠告（後書き）

ヒロインなんておらんかったんや！

第二十話 彼女の思惑と過去

扉を開くと、外で話し込んでいた錬金術師達が此方をちらちらと見てきましたが、気にせず歩き続け、外へと出ます。

嗚呼、部屋の内部の異様な圧迫感と比べて、なんと清清しくさわやかな空なんでしょう！もう二度とあんな所に行くものですか！！

と、さわやかな気分になっている私の背後からフィリスがひょこつと現れました。その表情はどこか顔を歪めて、

「主、結局何しきたんです？此処に」

「何って、脅迫ですよ」

フィリスが何故か頂垂れました。どうしたんでしょうかこの子。

「脅迫て」

「あの男、ゴルダークには一言、言うておかなければならなかったんですよ」

「何故？」

「最近の厄介ごと、その黒幕の疑いがあります」

”何者かに”金を渡され利用された落ちぶれた傭兵達。本来、”錬金術師達の間噂”くらいでしか知られていないはずの爺の秘密資料を嗅ぎつけた悪徳商人。

勿論、明確に奴が犯人であると決め付ける証拠など何処にもないが、あの男ならば裏から嫌がらせのように手を回してくる可能性は十二分にありえます。

あの邪悪な耄碌爺達ならば。

「恨まれるような事したんですか？」

じいっと、まるで殺人犯でも睨むような目つきでフィリスが私を睨んでいます。何故この子は真っ先に私を疑うのでしょうか。失礼な。

「私ではなく私の師匠ですよ。あの爺と私んとこの爺が昔から因縁が続いてましてね」

あの爺が私のとこの爺の研究を搔っ攫ったとか。そしたらこっちの爺がそれを上回る研究発表してあっちの爺らの顔を丸潰しにしたりとか。

そしてそのどーでもいゝ因縁に哀れにも巻き込まれる可哀想な私！何たる悲劇！酷い！酷すぎます！私が何をしたと言つのでしょ！か！？

「まあ、私も色々しましたけどね」

「おいコラ」

「せーとーぼーえーですよー」

「貴方の口にする正当防衛という言葉ほど胡散臭いモノはないです」

「知ったような事を！！」

「知ってるからいってるんですよ！！」

エミリアの悲鳴が何を意味するのか私には全くぜんぜん分かりません。何をムキになっているのやら。

「ま、いいじゃないですか、貴方には関係の無いことです」

そういつてヘラヘラと笑ってみせる、と、フィリスは何故かこちらには視線を向けず、あらぬ方向へ向いていました。フィリスの視線を追うと、其処にいたのはあの喧しい男が一人、

「トンファル」

トンファル、彼は声をかけた途端、つかつかと此方の元に詰め寄る

と私の肩を掴み、

「何故お前は来て早々ゴールドークさんにケンカ売ってるんだ！」

ガクガクと揺らされました。ああ気持ち悪い。

「売ってきたのはアイツです。私はそれを買っただけ」

「それを買うなと私は言ったのだ！」

トンファルは頭を掻き篦り叫ぶ。やかましいですね。

「あの人は学会の権力の半分を握っている！例えどれだけ偉大な研究を成し遂げようとあの人がNOと言うだけで全てが台無しになるんだぞ！」

「だから貴方も彼に従うのですよね？トンファル」

一言告げると、トンファルは唐突に落ち込み始めました。本当に感情が揺れ動く人ですね。この男は。しかし、今回に関しては少々可哀想な気もしますが。

「……そうでなければ錬金術師として、私も他の者も生きてはいけ

ない」

「貴方を非難しているわけではないのだから、そういう顔はするものではないですよ」

そう、彼のいうことは分かるのです。既に錬金術師という世界は腐敗しきっています。あの性根の腐ったゴルダークが権力を握っている以上、私が二度とあいつの世界で日の芽がでないのは確定していると言っただけでいいでしょう。

彼が私をこの会合に誘ったのも、彼が私の立場を心配した上での気遣いだったのでしょう。

何とかゴルダークとの関係を復活させ、私が正規な錬金術師として生きられるように。

酷く不器用なやり方ですが。まあ、可愛いとも思えますけどねえ。

しかし、

「私にとっては今更なのですよ、トンファル。私とあの男は永遠に和解することはありませんよ。わかっているでしょう？それくらい」

「しかしだ！」

「貴方の気遣いには感謝していきまし、嬉しいです。が、これ以上の気遣いは無用です。貴方の立場も危うくなってしまっ」

「……………」

トンファルを悪く言うつもりは無いですが。残念ながら彼の思いも
気遣いも遅すぎますし、意味も無いものです。これで彼がほされた
らそれこそ目も当てられない。

「……………わかった」

一言、返す言葉はどこか無念そうで、やはりすこし罪悪感が沸きま
すが、これ以上彼の世話になるわけにも行きません。背を向け、帰
路につこうとすると、背後から、

「この街から南に数日下った先に放棄された鉱山がある。其処で最
近、マナの奔流が観測された。ゴルダークさんも知らないから未だ
手付かずだ」

「ありがとうございます。トンファル」

……………
……………

「……あの人は主に惚れてるんですか？」

帰路の途中、唐突な質問がフィリスから飛んできました。

「いきなり何を言い出すんですか？」

「いえ、それ以外に貴方にあそこまで良くしてくれる理由が思いつかないので」

なんかすげー失礼なこと言ってますよこの子。

「ちがいますよ。彼のあれは彼なりの罪滅ぼしです」

「……というと？」

「彼、元々は爺の弟子だったんですよ。トンファルが一方的に慕ってただけでしたけど」

爺は錬金術に関してはあらゆる分野で名を残すほど超天才でしたが、なによりも鉱物学に関しては飛びぬけて高い研究成果を上げています。それは大体が、『賢者の石』を生み出すための副産物に過ぎない代物でしたが、それでも偉大な功績と言ってよいものでした。

そしてトンファルはそんな爺の頭脳に憧れ、爺の家にたびたび訪れ一方的に弟子としての仕事をこなしていました。ぶっちゃけ私より

も錬金術師として爺に仕えていた期間は長かったほどです。

「で、爺が死んで、誰の加護も無く生きていけなくなつて、他の錬金術師と同じようにゴルダークに遣えるようになったんです」

最初は一人で爺の後を継ごうと努力していましたが、学者の世界はそういった努力ではどうにかならない、政治色の強い世界。彼には力不足だった、と。

「トンファルさんは自分が貴方の師を裏切っていると思つてると？だから貴方に？」

「不器用な生き方ですよねえ、この腐つた世の中を生きるための処世術でしょうに」

とはいつても、借金こさえていつ娼婦館に売り飛ばされるかも分からないような綱渡りな生き方をしている自分に言われたくも無いでしょうけど。

「ふ……うん」

フィリスは納得したような、そうでないような顔をしながらも頷きました。ま、別に昔話はもう良いでしょう。それよりも、です。

「さて、折角トンファルに情報をもらったことですし、向かって見ましようか!!」

南の鉱山、手付かずと言うのは結構重要です。人の手が入ればどれだけ時間をかけようとマナが混じり、混在してしまうのですから!

と、ノリノリなこちらのファイリスはなにやら不満顔で、

「……また、私も付いていかなければならないのですか」

「当然」

「キラールーフ討伐は嫌です」

「鉱山にキラールーフはでませんよ。精々コウモリくらいですかね、5メートルくらいの」

「どっちにしる嫌です」

第二十一話 憎悪の過去と能天気な早朝

死の、匂いがした。

死、死、死、触れるもの全てから伝わる死。

淀みに淀み、最早形となつて体に纏わり付くような死の匂い、死の気配。体の内から、外から、溢れ出すそれが体中を引き千切り、叩きのめし、心臓を握り締める。

苦しみは常にその身と共にあり、故に最早諦めを疑問にすら思えない。自分達を放棄し、捨て果てた人間への憎悪も、溢れすぎて、それと意識することもできない。

記憶すら虚ろになる。死んだほうが楽だと既に確信している。だがそれでも死ぬわけにも行かなかつた。死ねば、こんな自分に寄り添つて命を留めている皆が死ぬ。

地獄という言葉が相応しい世界を、今日も生きる糧を求めて彷徨う。地面を這いつくばって、形振り構わずへりくだって、そうして得た僅かな糧を皆に分け与えた。皆で、無様に食い漁った。

そうやって、死に物狂いで生きて、だけどまた明日、今日にも似た地獄が待っている事に絶望して、そんな気の狂いそうな毎日が続けた。

「なにしているの？」

そう声をかけられたのは何時の事だったか。その時は空腹のあまりに意識が朦朧として、路上の前でただただ座り込んでいた。

目の前で首をかしげているのは、少女だった。

その世間知らずな笑顔がやけに眩しい、自分とは、自分達とは全く違う、生に満ち溢れた少女。人目でこんな時代でも裕福な、裕福な身分の子供だと分かった。彼女の周りには友達なのか、同じくらいの年の少女達が此方を遠巻きに眺めている。

少女が声をかけてきたのは好奇心か、怖いもの見たさか、恐らくはそんなところだろう。だから答えはしなかった。答える気力も無かった。ただ顔を伏せて、空腹に身をよじっていた。

それから暫くは少女はこちらを見ていたが、やがて飽きたのか立ち上がり、一言、

「つまんないの」

そう言いつつ、友達と共に彼から離れていった。興味を失った、というような、つまらなそうな顔をして。子供らしく無邪気で、残酷な言葉を言い捨てて、

つまらない？

混濁する意識の中で、少女のその捨て台詞が反響した。

つまらない？つまらないだって？

くりかえし、ようやくその言葉を理解した時、腹の奥底から奇妙な笑いが溢れ出た。それも最初は理解しがたかった。

何故笑いが出てくるのか、次々に、堪え様も無いほどに。

しかし次第に理解する。

憎悪だ。

今の今まで蓄積し続け、しかし晴らす術も無かった憎悪が、少女の何気ない、悪意も無いたったの一言で決壊した。既に心は壊れ果て、全ての憎悪は行き場を失い、笑いと言う形で次々に溢れ出ていく。

混濁した意識が更にカオスを増した。既に自分が誰なのかすら分からない。何を考えているのかも、分からない。だがやりたい事だけは明確だ。

こお　ろお　すう

地面に転がっていた、なにかしらを握る。

此方のけたたましい笑い声に足を止めた少女を見つける。

顔が狂喜に引きつる。

手に持ったソレを振りかぶると、口から憎悪を垂れ流しながら、少女へと襲い掛かった

「……………最悪の夢だな、おい」

キース少年はベットから起き上がると、一言呻いた。

……………
……………

目を覚ますと、其処は馴染みの自分の部屋だった。

学院に当てられた部屋、エミリアの家や孤児院に行ったり来たりでいつも此処に帰るわけではないのだが、それでも此処に帰るとほっとする。その程度には此処を自分の部屋に思えている。

とりあえず、気持ち悪い汗のかいた身体を洗いたい。喉も見事に渴いて気持ち悪い。

「……水、井戸、」

裏庭に出て、ぐらぐらと自身の様に揺れる頭に冷えた井戸の水を叩きつけた。身震いしそうになるが、気持ちが良かった。

ついでに口をゆすいで、浄化魔術をかけて一杯飲み干した。

持ってきたタオルで身体を拭いて一息つくつと、改めて今朝見た夢を思った。

「……まだ、引きずってんのか、俺は」

昔の夢だ。昔の、しかし決して忘れてはならない過去。忘れることなど出来ない事実。

「……鬱々しても仕方ないがなあ」

肺を絞るように息を吐き出した。

過去を忘れるほど能天気ではられない。だが、過去に引きずられ続けられるほど責任感のある人間でも、無い。

思考を切り替える。今日は休日だ。なら、久しぶりにのんびりしようじゃないか。

本来なら孤児院の手伝いに行こうかとも考えるが、今はあそこも人手が足りている。あの傭兵達が頑張ってくれていることだろう。

あのお茶好きの男に一杯おごってもらい、のんびりとした日中を過ごすも悪く無い。うんそうしようか「キース！何処にいますかああ……！」

……今、俺の休日が終わった予感しかしないのは気のせいだろうか。

ある種の確信を抱きつつ、出るときと比べてやけに軋んだ扉を開くと、

「おや、キース、水浴びでもしていたんですか？」

エミリアが、俺の部屋を土足で踏み荒らしていた。ついでに、フィリスも。

ああ、終わった。何もかも。

「……何をしてるんだ。お前は」

「お邪魔します」

「いや、挨拶じゃねえよ」

とりあえず、と咳を払い、一息ついて、

「まず他人の部屋を不法侵入するな。土足で俺のベッドの上に立つな。そして図書室から俺が借りた本を勝手に拝借しようとするな。何故俺はこんな当たり前の常識を何度も何度も言わなきゃならないんだ」

言い切った。息が荒くなった。何故こんなバカらしいことを言っているのか、それは目の前の女が言ったことをままに実行しているからだ。それも毎回。

とりあえず言葉は通じるようで、エミリアは言われたとおり土足を脱いで、本を本棚に戻し、ベッドの上に座った。その横にフィリスも。

しばらくの沈黙、そして、

「……キース」

「……なんだ」

「ピクニックに行きましょうー!!」

なにかもすつ飛ばしていた。これまた何時ものことだった。

ああ、本当に、本当に、本当に、何故こんな女に惚れているんだろ
う。俺は

第二十一話 憎悪の過去と能天気な早朝（後書き）

おひさー

注意：魔術学院とは時系列が違います。

いや、本当ある程度はそろえたかったんですが、ええ、鈍筆でもうしわけねえです

第二十二話 ピクニックに行こう

「……で、なんだって？ピクニック？」

「いえーす」

散らかった部屋を片し、お茶を淹れて一息ついたところで、エミリアに尋ねて見る。

ピクニック。どう聞こうと平和的なイメージしかわからないその単語しかし、発言者は誰であろうエミリアだ。全く持っていやな予感しかない。

一体何をたくらんでるんだ

「……ピクニックって、お前らと？」

「美少女二人とでえとですよ？両手に花じゃないですか」

そういつてフィリスをずいと此方に押しやる。露出度の高いメイド服が目についた。というかこの格好で外に連れ出したのか、おいで、そのフィリスなのだが、なんとというか、顔色が物凄く悪い。死人かというくらいに。そして此方の顔を見て、無言で、全力で、首を左右に振り続ける。

うん、言わんとしてることは分かるから、落ち着け。

「……なあ、ちなみに何処に行くつもりなんだ？」

「ロステム山です」

ロステム……聞かない名前だった。少なくとも近場の可能性は消えた。

「この街から北へ数十キロ。転移魔方陣が近場の街にあるそうですから、そこから一日かけて向かいます」

「……目的は」

「やあん、観光にきまってるじゃないですかー」

限りなくうそ臭かった。と言うか嘘だ。そんな何の目的も無くこの女が遠出などするわけが無い。そんなことをするくらいなら金の工面に駆け回るはずだ。

どうせまた、ろくでもないことになるのだろう、と、そうも思いつつも、

「……まあ、何時ものことだよな」

そうも思う。エミリア、この女と付き合っていてトラブルに巻き込まれなかった日など無い。平穩を望むなど、それこそバカらしくなるくらいに。

それこそこの”お願い”にしたって、言っ飛ばせばいつものこと。そう考えると、ここで否定するのもバカらしい。惚れた女の”お願い”とやらを汲み取ってやれない男というのも間抜けなものだ。

フィリスは不憫だが、まあ、守ってやればいいだろう。

そんな風に、妥協し始めた、その時だった。

「あらキース。何してんの」

聞き覚えのある声が出た。振り向くと、窓の外に、鼻の上にそばかすをのせた、なかなか元気ハツラツな少女がこちらをのぞいている。

「なんだ、リドか」

リド、昔馴染みの仲間がそこにいた。

この学院では「執筆部」という、言っ飛ばせば学生らが、出版する雑誌等の総合の同好会。彼女はそこで部長をしている。

正直、この女にもろくな思い出が無いのだが、まあ、今は害は無いだろう。多分。

で、そのリドなのだが、ひょいと窓から身体を乗り出して部屋をのぞき、そしてそこにエミリアを確認すると、そのままずると下がっていった。

「……エミリア、あんた何、殴りこみにでも来たの？」

「あらリド、なんです出会い頭に物騒なことを」

「物騒なのはあんたよ」

リドは更に2、3歩後ろに下がり警戒姿勢に入った。何時までたってもコイツはエミリアには慣れないな。いや、まあ、これが正常な反応のような気もするが。

まあいいさ。別になれることを強制する気にもならないし。

「落ち着けよ……で、お前は何してんだ？」

リドの手には何かの資料の束が、そして首には魔道射影機がかけられている。どう考えても、これから授業にいこうという姿ではなかった。

「んー、まあ、面白いネタを見つけたから、ちっとね」

リドは中々現金な笑みを浮かべた。こういう顔をしている場合、大抵は中々のネタが懐に飛び込んでいたりする。しかし、果たして何を掴んだのか、前のように碌なものを書かなければいいが。

「で、何のネタを掴んだんだよ」

「ちょっと、そうあっさり聞かないでよ。一応極秘なのよ」

「はいはい、で、何があった？」

ロマンの無い男と、リドは肩をすくめ、そして諦めたように、

「ドラゴンが出たのよ。ドラゴン」

その言葉にエミリアがピクンと反応したが、見ないようにした。ドラゴンまで探しに行くなどと言い出したら、俺の命が幾つあっても足りん。フィリスも同じく。

しかしドラゴン、ドラゴンか。

「そりゃ珍しいな」

「でしょ？」

ドラゴン、竜。古代、人よりも歴史の長く、精霊と同じく人よりも優れるもの。人によっては神と同じく信仰の対象となる存在だ。それほどの高貴な存在だからこそ、人の前に現れる事はおろか人の耳に届く事すらない。だからこそ、こうして出現が噂で交わされる事も、珍しい事だった。

流石に興味は沸く。子供のよような好奇心だ。

「ちなみに、何処に出たんだよ？ドラゴン」

この質問は、まあ、その好奇心につられてぼろっと溢したものだ。た。

当然、深い意図や想像など無く、聞くだけ聞いておこうと、まあそんな風な質問だった。

だったのだが、

「ロステム山よ。遭難者志望者続出、通称死の山って呼ばれてるわね。うん」

無論、リドも特に考えも無く、問われたからというように、何気なく答えた。

が、しかし、少なくともこの部屋の空気は5、6度ほど、低くなっ
た。

「……………」

「……………」

「……………」え、何、何で黙ってるの？ってか、なんでエミリアは目を光
らせてるの？」

リドの言葉も右から左へと通り過ぎる。

ロステム山

……………なんか、聞き覚えのある名称だった。
……………というか、つい今さっき聞いたばかりの名称だったっ！！

「……………」リド

「……………」何よ

「……………」ロステム山について、もう少し詳しく

リドは首を傾げつつ、持っていた資料を開き、

「……ロステム山、元は特に挙げられる農資源も鉱物資源も無い普通の山だったんだけど、マナの流体変化で暴走、オークやらキラールフやらブラッドバットやら魔物のオンパレードと化して、死亡者続出中」

「……」

「……」

「……何なのよ」

リドの問いかけを無視して、恐る恐る部屋にいる二人の顔をのぞいて見る。

フィリスは、既に意識を遠い彼方に捨てやっていた。何か、蝶でも幻視しているのか視線を虚空に向けて乾いた笑い声を喉から鳴らしている。

そしてエミリアはというと、

「行く理由が増えましたね、キース」

此方の肩をがちり掴み、至極爽やかな笑みを浮かべ、可愛く女の

子らしいガッツポーズを「ゲッ」としていた。

……うん、

「……エミリア」

「なんです？」

俺は、そのエミに応えるように、可能な限りの爽やかな笑みを顔に貼り付け、エミリアの肩をしっかりと掴むと、言った。

「今すぐ帰れ」

……
……

「いいじゃないですかああああ！ピクニック行きましょおおおお
おおおお！」「」

「ピクニックとは言わん！！集団自殺つつつんだよ馬鹿！！」

「……ノートを返すの、また今度にしましょう。ミフィール」

「……そうですね。エレナ様」

外の来客にも気づかず、バカ騒ぎは何時までも続いたと言う

第二十三話 ロステム山へ

昔の夢をみた。

昔の、”一応”本物の両親が生きていたころの夢だ。

さて、俺の両親が一体全体どんな奴らだったのか。正直な所、殆ど顔も思い出せないのだが、どちらも等しくくくでもないやつらだったということはいっかりと覚えている。

何しろあの両親から与えられたものといったら、罵声と暴力しかなかったのだから。兎に角怒鳴られて、殴られた。まともに食事を用意することはおろか、家に寄り付くことも珍しいくらいに、心底どうしようもない連中だった。

今なら確信を持って言える。あれは親ではない。ただ自分を生んだだけの他人だった。子供の頃も、そこまで割り切っていなかったものの、おぼろげに自分の親がどうしようもない事は理解していた。

暫くすると、父親はどこぞでのたれ死に、母親は父親が死んだと知るや否や、別の男を作ったとか何とかでさっさと自分を置いて消えた。

よくある話だ。ありきたりな話だった。

今までだって親に世話になった事なんて無い。ソレが完全になくなったところで、どうということはない。実際、帰る家がなくなっただけで、後は普段どおりの毎日が待っていた。

そう、だから馬鹿でどうしようもない両親が死のうが生きようが、

俺にとっては何も変わりなかった。

悲惨で、貧しくて、どうしようもない飢えた毎日、何も変わらなかった。

と、そこまで思い返して、ふと疑問に思った。

……いや、ちょっとまで、よく考えたら、何で俺は夢を見ているんだ？

つい最近夢を見たばかりな気がするんだが……二度寝？
疑問は意識を浮上させ、急速に夢から覚めていく。

そして、目を開くと、

「……此処は何処だ」

空を見上げようにも鬱蒼とした枝葉が日の光をさえぎり、まだ日も昇っているはずなのにあたりは薄暗い。四方八方から奇妙な怪鳥の鳴き声がかたたましく響く。

何より周囲から僅かにもれる獣の唸り声。荒い息づかい。

此処は何処だ……否、なんとなくわかる。わかるが、考えたくない。

「……俺は何時から此処にいるんだ？」

「えー？」「女だけでそんな危険なところ行かせられねえ。俺が守ってやんよ！」ってかっこよく言っただけで私達を連れてロステム山へと」

「記憶にねえよ。なんのキャラだよそれ」

誰にともなく言った問いかけは、何故かというかやはりというか、すぐ傍にいたエミリアが不思議そうに首をかしげて答えてくれた。ありがとう、全然嬉しくない。

エミリアのアホな台詞を聞き流して体を持ち上げる。近くにフィリスもいた、やっぱり。しかし、妙に首筋が痛い。多分殴られて気絶している間に此処まで、つまりロステム山の中へと連れ込まれたのだろう……

完全に誘拐じゃねえか！

「それより警戒を怠らないでくださいよ。今も彼方此方に魔物の気配がちらほらと」

「お前後で覚えてるよ」

愚痴を垂れつつも、装備を確認する。確認しなければ死ぬ。確実に。なんか彼方此方から視線が突き刺さってる。凶暴なうめき声が聞こえてきてる！

魔具一式、愛用のナイフが数本、いつの間にか格好まで術式加工の

施された私物の戦闘着に着替えている。恥じらいがないのかあの女とも思うが、装備は一応完備されている。流石にそこら辺はエミリアもわきまえている。

周囲を確認しつつ。エミリア、そしてフィリスをもう一度確認した。フィリスの格好は馬鹿メイドではなく、きちんとした着衣をしていた。どこことなく古着っぽいのが、エミリアが魔術加工しているのが見えているので問題はない。片手には細身の短剣が握り締められている。

問題はない。装備は。ただ、彼女自身は、

「……お前は大丈夫か、フィリス」

「……大丈夫なものか」

フィリスは真つ青な顔をして頂垂れていた。

まあ、当然だろう。この中で最も弱いのは恐らく彼女だ。いや、戦力としては十分に強いはずだ。何せ女の身で暗殺者として生きられたくらいなのだから。しかし、それもエミリアに劣る。更に彼女には魔術の才能も無い。不安にもなるだろう。

まあ、気を抜かなければ死なないですむくらいの実力は確かにあるんだが……

しかし、流石に不憫だ。

「おい、手を出せ。手」

「……………何だ」

差し出された手に特殊なペンで術式を描く、「くすぐりたい」と文句を言われたが無視。一本の術式をフィリスの腕をぐるりと一周するよつに描ききった。

「……………これは？」

「同化の魔術式だよ。周囲のマナと自分のマナが溶け込む」

マナを魔力に練り上げる魔術師に効果は薄いが、一般人の彼女には効果的だろう。実際、目の前の彼女が何処となく存在感を沈ませている。

しばらく説明を理解できなかつたらしいフィリスは、「気配がなくなるんだよ。魔物に見つかりにくくなる」とストレートに説明してやると、ぱっと顔を上げて、目を見開いた

「……………ありがとうっ」

そして両手を握られ、神を信仰するような目で感謝された。なんか泣いている。

「……………いえ、どういたしまして」

普段こき使われ過ぎて安い女になってしまってる……！
もう少し耐性つけてやらんと危険だ。何時か怪しいおっさんに誘拐
されてしまいかねない。

「あー、ずるいですよー、私も術式書いてくださいなー」

「お前に書いても意味ないっての。つーか錬金術師なら自分でやれ」

そついうエミリアも装備のほうこそ完璧だった。一見軽装に見える
が、幾つもの自家製魔道具を仕込み、完膚なきまでに戦闘スタイル。
そもそもこの女に戦闘面で心配なんてする必要はない。

今も既にいくつかの結界呪文を唱えている。彼方此方に魔物が溢れ
ているにもかかわらず、こちらに向かって襲い掛かってこないのは
そのおかげだろう。

……どつちみち危険な事には変わらないが。

「……………どうなることやら」

小さな呻き声を、獣の静かな呻き声にかき消される。ひたすら不安
だ。

.....

キースの呻き声を聞きながら、私はひたすら結界を敷き続けます。最初、此処に来るまでは魔物の気配も無かったのに、この山に踏み込むと途端に溢れる獣の視線。何処か学院の裏手の森を思いださせる濃厚なマナの気配。

なるほど、これは確かに死の山というに相応しい。油断して死にたくなければ結界を生み出さなければなりません。私を始点とした視界封じの結界。マナ封じの結界。気配確保の結界。

移動タイプである必要があるため、効果は長続きしませんが、とりあえずキャンプポイントを見つけるまでの時間稼ぎなので問題ありません。

そうして、暫くの後に結界は完成し、キースも自らの装備を確認し終えたのか此方に歩み寄って着ました。中々怖い顔で。まあそりゃそうですけど。

「で、だ、もう一度確認するぞ。ここはどこだ」

「ロステム山の入り口、ふもとですね」

「.....まだ中腹ですらないのか。この有様で」

確かに目的の場所にすら到達していないというのに、この魔物の数は異常ですね。結界張ってるからこちらに近づかないだけで、解いたら速攻で襲い掛かれそう。

この人里からまだ近い場所でもこの有様。やはり噂どおり、死の山というのに相応しい有様なようで、恐ろしい。

しかし、だからこそ人の手は入らず、つまりはすばらしいお宝が、つまりは研究資源が眠っている可能性があるのです！！それもかなりの確立で！

マナという非常に不安定で不確定な存在がこの世界を支配している以上、研究材料探しは早い者勝ちの宝探しと同義です。マナの流れが乱れれば、すぐさまその地域で新種珍種大発見の可能性が高くなります。

しかし、そうした地域は大抵、その宝探しは資金と組織力を持った集団、今はゴルダーク一派なのですが、そういう輩があつという間に独占してしまうものですし。

そしてだからこういう危険地帯はねらい目です。なにせ大組織が狙うにしても危険すぎる危険地帯。たとえどれだけ資金を投入しようと支配するのには時間がかかりますから。

とはいえ、こんな少数で突入したらたいい死ぬんですけどね。ハハ。

まあ、そんなことはさておき。

「とりあえず拠点となる場所を探しましょう。此処にずっといるの

は流石にまずいです」

「帰るといふ選択肢を選んで欲しいんだがな、俺は」

そう言いつつも彼は早速魔術を発動し、周囲を探索し始めるキース。いやあ、便利な、もとい気の利く殿方というのは素敵ですね。うふふ。ふはは。

まあ、キースはなんだかんだで協力してくれるでしょう。彼の通う学院も、こういった課外活動については結構な融通を利かせてくれますし、私も何かお礼しなければならぬですね。生きて帰ることができればですが。

さて、後は、

「そんなに睨まないでくださいよ。フィリス」

「……」

返答なし。流石にキレ気味ですね、フィリス。まあ、生き死にの問題ですから仕方ありませんが。

しかし、こんな所でやる気を損なわれても困りますね。

「ふむ、ではこの探検が上手くいけば、貴方に報酬を支払いますよ。フィリス」

「……報酬？」

奴隷としては聞くことはなかったであろう言葉にフィリスは反応を示しました。

うん。良い反応。

「通常、こういった仕事の依頼はギルドで1日数万ゴールド分ですかね。その分、貴方の取り分として、報酬を差し上げましょう」

「お金をくれるという事ですか？」

「いえ、お金はあげません。貯金としておきます。」

貯金？と首を傾げるフィリスに言葉を続けて、

「そしてその貯金がある程度溜まれば貴方を奴隷から開放してあげましょう。」

開放、という、更に信じられない言葉なのか、フィリスは目を見開きます。いやいや素晴らしい反応。思えば彼女は未だ奴隷から解放されたことが無いのですから、当然でしょう。

「開放されれば今後、私の我俣に付き合う必要はありません。普通に働けば給与を差し上げましょう。正規社員として、です」

別に私の所からも出て行っても良いとは思いませんけど、フィリスは元々の仕事が残るめたい分、行き場所が殆どありませんものね。下手な所で働けばそのまま牢獄行き。

「ですからやる気を出してくださいな」

「……今までの労働分はどうなるのです」

「それは食事代、寝床提供、そして犯罪者である貴方を匿うリスクでчыらです。報酬は今回のような特別労働に限ります。奴隷でなくなれば普通の労働にもお金は出しますが」

そう言うと、フィリスは顔を上げました。やはり陰鬱な表情ながらも、僅かに多少は生氣のある目を取り戻したようで、上々ですね。

「……なにをしると」

「今はやれる事はありませんが、ではキャンプ場所を決めたら食料になりそうな山菜やらを集めてきてください。以前、食べられるモノ等教えたでしょう?」

「了解しました」

素直に頷いてくれますね。良い子。

「おい、小さい水の流れを見つけたぞ。多分小川だ」

「では、その川沿いの上って良い場所を探しましょう。しゅっぱー」

声を出し、気合を入れます。できれば、可能であれば、借金返済の足がかりがつかめる事を願って、そしてここから生きて帰れると信じて。

第二十四話 知は財産なり

人の手が加えられず、僅かな獣の痕跡を残して伸び放題になった茂みの中から、ほっそりと伸びている山菜を見つける。気をつけて引き抜き、手製の採集用ポシエットに入れる。

エミリアにこの”死の山”とやらにつれてこれらで既に半日、私は彼女の言うように食料を探して、キャンプ地を中心に山菜を収穫していた。

一応、保存の効く食料を持ってきたものの、エミリア曰く、「非常食というのは非常時に食べるものですよ」、「と、ということで、現地調達を進めている。

エミリア、そしてキースはキャンプ地で嚴重に結界を敷いている。いくらキラールーフに特攻し、危険地域に無理やり連れて行くような女でも、身の安全にはかなり気を使う。常に状況を見定め、退路を見極め、敵を観察し、ぎりぎりまで退却する。

別に彼女も死にたがっているわけでもないだろうから、当然だろう。ただ、借金というペナルティを脱却するために命をギリギリまで削らざるをえないのだ。

何しろ5億だ。奴隷の身分では全く想像がつかないが、軽く国家予算規模のレベルだとキースは話していた。そんな額の謝金を返さなければならぬ以上、命の一つや二つ、賭けなければならぬのも通りといえは通りなのだ。

「……だが何も、人の命まで賭けなくても」

言っても仕方ないが。奴隷だし。

しかし、彼女の言う事を信じるのなら、信じるのなら、今回上手くいけば奴隷から解放される足がかりになるかもしれない。正直、物心付いた時から奴隷の人生を歩んでいた自分にとって、奴隷の解放は夢にすら思わなかった奇跡だ。叶うのなら、解放されたい。

……しかし、あの女、本当に私を解放する気があるのだろうか。

いやあの女、中々すっ飛んだ性格はしているが、約束は破る事は無かったはずだ。前もアメというのを買ってくれたし……甘かったなあ。

そう、エミリアは此方の事をしっかり扱き使うし、容赦は無いが、しかし約束は守るのだ。そういった一線は自らの中で引いている。

悪女だが、外道ではない……どっちもどっちだとは考えないようにしよう。

まあ、いい。どっちにしろ、今の私にできる事といえば。与えられた仕事を淡々とこなしていく。ただただそれだけだ。こんな所で悩んでいたって仕方が無い。

「あ、【ぐりーんは一ぶ】」

エミリアに一番最初に教えられ薬草だ。食材として利用できるかどうかまで走らないが、一応持っていくとしよう。毒にはならないだろうし。

そんな風に手を伸ばそうとした、その時だった、

「……………うん？」

背を走る震え。そう、まるでなにか、此方をひとのみできそうな巨大な生物に、背中を舐められるような、そんな怖気が全身を包んだ。息が止まる。張り詰めていた緊張を更に高める。腕に仕込まれているナイフを確認し、そっと、直ぐに取り出せるように準備した。しかし殺気は殺し、あくまで自然に、ゆっくりと、首を捻り、

「……………！」

振り返った。すると、

「……………」

そこには、私のことをひとのみできそうな巨大生物が、私の背中を舐めていた。

「……………って、そのまんまああ？！」

変な声を出しながら、跳んだ。近くの木の上に登る。

最早音を立てないようにとか、気配を出さないようにとか、そっ

う問題じゃない！なんだ！何だあの生物！？やたらでかい！でかくて怖い！！牙生えてる！！舌がキモイ！！目が四つもある！！怖い！！怖い！！

上から見下ろすと、その恐ろしい容貌が確認できる。確認しなければ良かった。怖い。

足元には木の幹を引っ掻くように、かの巨大生物がへばりついてる。なんか呻きながら舌出している。絶対に降りたくない。しかしこのままでは帰れない。どうしよう「ギャギャギャギャ」どうしよ……

「ん？」

上を見た。其処には、巨大で不気味で奇妙な声を上げる食虫植物が大きく口を開いて頭をかぶりつかんとしていた。

「きゃあああ！」

しゃがんだ。頭の上を牙が掠めた。怖いとかそういうレベルじゃない！なんだこのモンスターハウス！！エミリアの結界から少し出ただけでこの有様か！！

跳ぶ、跳ぶ、跳ぶ！木から木へと肥大化した木の幹を蹴りつけて足元の魔物を跳び越える……！？

「え、」

跳ぶ先にヘビがいた。ただのヘビなら食料だった。が、跳ぶ先にいたのはデカかった。おおよそ十数メートルくらい。嗚呼、死んだわ、私。

「キシャアアアアアアア！」

「いやあああああああ！」

「何をしているんだ。お前は」

何処か呆れたような声が聞こえた。聞こえて、急に体が引つ張られた。宙で、そして、

「【風刃】」

金属が鋭く閃く音。同時に風が痛い位に高く鳴いて、同時にバラバラと血と肉飛び散る音。恐る恐る顔を上げるとナイフを振るい、化け物ヘビを一撃で粉碎したキースの姿。

「好きだー!!」

「アホか」

突発的に抱きついて告白したらどつつかれた。

.....

「その魔物、貴方が最初に出会ったキメルという魔物は、非常に温厚な生物です」

キャンプ地に戻ると、エミリアが出て行ったときと同じく、一心不乱に巨大な大木に魔法陣を書き込んでいた。額にはびっしりと汗をかき、片時も目を逸らないまま、エミリアは言葉を続ける。

「そもそも草食獣ですから、他の生物を襲ったりもしません。貴方に絡んできたのは単純に好奇心にそそられただけでしょうね。ぶっちゃけ、じゃれてただけでしょう」

そっさい切ると共に、術式を刻んでいた装飾の施されたナイフを下げ、額を拭い一息つく。そして私をじっとした目で睨みつけた。

「ストレートに言ってしまうえば、エミリア、今回ののは貴方の失態です」

「知識を」

「今回の件だって、気配云々以前に、そもそも知識があればパニツクになる事は無かったのです」

エミリアは頬から指を離すと淡々と言葉を積む。私の頭に言葉を染込ませるように、

「文字は既に教えました。もう貴方も簡単な本なら読めるでしょう。知識を貪欲に叩き込みなさい。手当たり次第に、無節操に、あらゆる知識を。知識は生きる力に変わるのですから」

そう言って私の頭をぐりぐりと撫でて、再び結界を張り巡らせる準備を始めた。

エミリアの言う事は分かる。彼女の言うとおり、知識は力、ソレは事実だ。まず知らなければ何もできない。たとえ奴隷から解放されてもだ。

家に帰ったら、まずは本を読もう。そう誓った。

第二十五話 悪女エミリア

結界の術式には徹底的に気を払う。

何しろこれからどれほどになるかは分からないが、少なくとも暫くの間キャンプポイントにするべき場所の、その安全の要だ。ただでさえ大自然の中、其処が普通の山岳でも注意を怠ってはならない。そしてその上此処は混沌としたマナスポット。警戒は必須だ。

しかし3人しかいないこのパーティでは誰かが交代で監視するといふような原始的で、しかし最も確実な方法が取れない、持続しないならば結界を嚴重にするしかない。

「……………だあ、終わった」

露出した岩石のてっぺんに刻んだ術式を改めて確認して、地べたに寝転がった。結界作りは非常に疲れる。かなりの精神集中が必要だ。だがこれで、エミリアに任された一角はすべて刻んだ。これで暫くの間はここいらに魔物は寄り付かないだろうし、気温やマナの流れもある程度緩和される。いたりつくせりだ。効果は三日ほどで切れるが。

勿論、万能ではないので相応の注意は払う必要があるが。

先のフィリスのように、不用意に声を上げたり激しく動いたりすると、直ぐに野生の生物や魔物に見つかってしまう。そういった面にはしっかりと気を払わなければならない。

だからこそエミリアもフィリスに強く注意を促したわけなのだが、さて、エミリアの方はどうなっているのか、と、そんな事を思っている、

「キース、キース」

やたらと切羽詰った声、悲鳴に近いエミリアのその声に体を跳ね起こした。あの女が失態を負うとは思えないが、しかし、

「なんだっとうし……」

声の方を見ると、

「……お前は何をしてんだ」

エミリアの頭に、なんだかやたら妙な形をした食虫植物がかぶりついていた。

……いやあ、本当に何してんだコイツ。

「フィリスを襲ったっていう食虫植物、捕まえようとして、噛まれましたっ取ってくださいっ」

「……お前、」

色々、色々と言いたいが、しかし、ああ、いや、もういや。うん。

……
……

頭にしっかりと食い込んでいる植物の引きぬいて、ついでに食い込んだ部位に治癒魔術をかけてやる。元々牙で相手に喰らい付くような生物ではないらしく、そこまで酷い傷でもないらしい。撫でてみると後も残ってはいない。

しかしこの女、どうしてくれてやるうか。

「いやーありがとうございます。キース」

「そりゃどういたしまして。このクソ女」

頬を全力で引っ張る。ついでに引っ張って捻った。いひゃいひゃいと呻くエミリア。

ああ、阿呆っぽい面。

「よくまあフィリスにあんな啖呵切ったな、おい」

「彼女は無知ゆえの失敗です。私は知った上での失敗です」

「同じだよ馬鹿」

自慢げにふんぞり返っているエミリアにチョップした。がいんと妙にいい音がした。ああ、詰まっていない音がした。いろんなものが

「女の子に暴力を振るうなんてサイテーですっ」

「うるせー、なにが知識は力になるだ、全く」

「あら、だって事実じゃないですか」

問うと、むしろ確信を持っているような表情で両腕を広げた。

「知識は力になる、そんな事、誰よりも私達だって理解しきったことじゃないですか」

「その結果がこれか、おい」

先ほどまでエミリアの頭にかじりついていた食虫植物を突きつけるが、目を逸らしやがる。むかつくのもう一度頭にかぶせてやる。気を失ってるので牙は刺さらないが。

しかしまあ、彼女の言わんとしていることも、分かる。

オルフェス魔術学院、この国中の知識が集結するあの学院で、俺は学んだ。過去、知る事は愚か触れる事もままならなかった知識を。過去に起こった歴史を。今の世界の現実を。学んだ。

それは間違いなく、俺の力になった。知は力、それは確信している。

しかし、だ、同時に、一つ思い知った事がある。

勉強を積み積むほど、理解を進めれば進めるほど、深々と思い知らされる事。

「知識があるからといって何でも出来るというわけじゃない。どうにもならない事はある」

万物を知ったからといって、万能になれるわけじゃない。答えを知ったからといって、それを行動に移せるとは限らない。知識は知識だ。それ以上でも以下でもない。

この事を理解せず、破滅へ向かった愚かな賢者は山ほどいる。

「俺はそうはなりたくない。だから知識に依存もしない」

「ま、頭でっかちな馬鹿になるよかそう考えるほうがマシですか」

「そう言うことだ」

そう返すと、エミリアは感心したような、納得したような顔になった。まあ、この女も、知識のみに偏る事が間違いである事くらい、分かっているだろう。

元々アウトドア派だしな、こいつ。

「フィリスが、そんな風に言えるようになるまでまだまだ時間がかかりそうですね」

「そもそも頼る知識が無いだろ、あいつ」

「だからもう少し賢くなつて欲しいんですよ。自身のためにも」

エミリアは語る。まるで我が子を見守る母親のように。だが、彼女を知る俺には、その言葉は胡散臭い事この上ないかった。

「おや、まだ何か言いたげですね？」

「知識があるのが無かるうが、フィリスの現状は変わらないだろ。」

「あら、彼女がそうやって頑張ってくれば、奴隷から開放してあげますよ？」

「嘘つけ」

「本当です」

「だから、嘘つけって」

言葉を区切って、そして改めて言葉を紡ぐ。

「本気でフィリスを開放する気なんて、無いくせに」

その瞬間、エミリアはぴたりと体の動きを止めて、そしてにんまりと嫌な笑みを浮かべた。

ああ、やっぱりな、と確信して、溜息が漏れた。

そう、フィリスは、彼女という存在は、彼女のものだ。エミリアのものだ。

フィリスはこの国にとって奴隷であり、犯罪者だ。そしてその全てをエミリアは知っており、命綱を掴んでいる。フィリスが今生きていられるのはエミリアのお陰だ。逆を言えばエミリアが望めばフィリスは一瞬で破滅する。

だから【奴隷の呪印】があろうと無かろうと、彼女はエミリアのものだ。決定的なまでに。

そして何より、エミリアはフィリスを手放す気は全く無い。

だからフィリスは彼女のものだ。どう足掻こうとも間違いない。そうだからこそ、彼女はフィリスを気遣い、彼女の成長を促すのだ。彼女は自分のものだから。

「籠の鳥は可憐であればあるほど愛しく思えるものです」

エミリアは笑う。何処か妖艶にすら見える笑みだった。

「ま、悪いようにはしませんし、奴隷として酷使しようとも思いませんよ。フィリスは可愛いし、私も好きですから」

そしてその邪悪さの裏で、平然とこんな事を言う。それが本心なんだから尚の事、質が悪い。この女はやっぱり支離滅裂で、性格のそこかしこが破綻している。

なんて悪女。なんて邪悪。やれ全く、何故こんな女に惚れているの

か。俺は。

「さて、それでは帰りましようか。フィリスも早く帰らないと心配するでしょうし」

「はい、はい」

両手を挙げ、同意した。考えても意味の無い事だ、と、頭をぐるぐる巡っている無駄な考えを振り払う。フィリスは面白い奴だとは思っし、一人の人間として好いてはいる。だが、それ以上ではない。ならば、深く想う必要も無い。半端な気持ちで相手を想ってやったところで、破綻するだけだ。

こういうときは、一歩下がって遠めに見るにかぎる。そして自分の心の指針を定め、それから動くのだ。それが、一番失敗の少ない自分のあり方だ。

フィリスの事で悩むのも後々だ。今はこの場をどう切り抜けるか、それだけに意識をやるう。

そう、決断した。

「あ、ちなみに寢床、ちっちゃいテント一つしかありませんから、3人で重なって寝ますよ」

「……え？」

そしてその決断はどこかに飛んで行った。

第二十六話 ロステム山散策開始

朝、僅かに水気の保った冷えた空気 薄ら寒いそれが肌を撫で、安穩に沈んでいた意識をぐいっと引つ張りあげていく。

瞼を開ける、簡易テントの低い天井と、其処からぶら下がるランタンの視界に入った。

自分が学園の寮にいないのだと、改めて自覚させられる。

エミリアに誘拐されて、二日目の朝、ロステム山散策、その初日が始まった。

といっても、まだ日が昇ってもいないのだが、

「……………くあ」

何時も、朝目を覚ますのは早いほうだが、此処まで早いと流石に欠伸が漏れる。日の光の恩恵を最大まで得るためとはいえ、こんな時間起きるのはやっぱりしんどい。

おまけに昨日はエミリアが調子に乗ってまあ嫌がらせを……………いや、思い出すまい。

とにかく起きなければ。今日はハードな一日になる。体を温めておきたい。

「よつと……………」

薄い毛布から腕を這い出して、身を起こした。起こそうとした。

「……………うん」

起こそうとしたその体に、エミリアがしがみつくように纏わり付いていた。この狭いテントの中3人という密集した場所で暑かったのだろうか、半ば半裸状態で。

「……………」

ひとまず体を戻し、丁寧にエミリアを引き剥がすと、衣服を整えてその上に毛布をかけた。そしてようやく立ち上がり、手について体を起こす……………」と、

「……………あ」

そのついた手先にフィリスの胸があった。エミリアと同じく半裸で、僅かに見える醜い虐待痕、しかしそれが妙な背徳感をかもし出していた。

「……………」

ゆっくりと手を上げて、エミリアにしたように衣服を整えて、毛布をかける。音を立てないように立ち上がり、テントの外に這い出した。外はまだ薄暗く、朝の寒さと湿気、それに森独特の匂いが鼻をくすぐる。

「……………さてと」

ひとまず魔術を利用して大気から水分を生み出し、それで顔を洗う。顔拭い、意識をはつきりとさせると、体を動かす。まずはゆっくり、子供がするようなゆるやかな柔軟を、そこから徐々に徐々に動きを大きく、体内のマナを循環させ、魔力を生み出し、魔術と成す、そのリズムを整えていく。

運動量自体を短いが、しかし肉体の運動とマナの循環を同時に進めれば、それだけで肉体は一気に覚醒へと進んでいく。これが魔力の容量や循環速度など、あらゆる面での底上げになる。勿論、毎日やら無ければ意味は無いが。

さて、と、体の柔軟をしつかりとして、一息ついた。そして朝日を眺めつつ、呟く。

「……………いや、襲えよ、俺」

惚れた女と絶世の美少女の半裸を前にして一切手を出さなかった自分に、悲しくなった。

……………

「フィリス。背中拭ってください」

言われるまま、素肌を晒した背中を僅かに水で塗らしたタオルで拭いていく。何時も研究所にこもっているからなのか、色は白く、しかし良く見れば過去の痕跡なのか、薄っすらと、しかし大きな傷跡が幾つもあった

何処で傷を負ったんだろう、とも思うが、何も言わず素直に汚れを拭いてく。

朝、ロステム山にキャンプを始めて、今日が一日目だ。今はエミリアといっしょにぬれタオルで互いの体の汚れを拭いている。いうなれば、簡易シャワーだ。

正直、こんな事、こんな状況でする必要があるのか、という気がしないでもないが、エミリア曰く、こういう状況だからこそ清潔さは保たなければならぬのだと言う。汚れは毒だ。ましてや、マナの溢れるこの地では、どんな毒性を持つ植物が新種で生えているのかも分からない。最低、それを払えるだけ払わなければならない。

言われてみればなるほど、と納得しなくてもなかったが、今の時期、素肌を晒すのは少し寒い。それにこの女、隙あらば人の体や虐待痕をぺたぺた触ってくるから少し嫌だ。

ちなみにこの間、キースはキャンプ用の木の枝や水を汲みに行っている。此方が体を拭うと言うと、何を言うでもなく、さっさと補給に向かっていた。

そういえば、そのキースだが、

「……………何で襲わなかったんですかね。あの人」

あの狭苦しいテントに男が一人、女が二人、その状況で何もしなかったという今の結果が全く持って信じられない。折角用意していた護身用ナイフが無駄になった。

「あら、意外にしっかり護身していたのですね。フィリス」

「私の前までの主、ろくな人たちがいませんでした。」

「ああ、なるほど」

私の奴隷の主は、暗殺という職業柄何人かに変わっていったが、私を買った男は大抵、私を買って真っ先に私の服をひん剥いて襲い掛かってきた。その後、虐待痕を見てドン引きしていたが、それでも襲ってきた奴らもいた。

そんな経験の結果、男は、基本、そう言う生物なのだと確信している。

だからこそ、キースが何故襲わなかったのか、理解できなかった。

そんな事を思い出していると、前言ってませんでしたっけ？と、エミリアは口を開き、

「あの男、昔娼婦として売られた事があるんですよ」

そういえば、それらしき事を言っていたような気はするが……

「ま、娼婦というか、娼男ですが、それがまあ軽くトラウマになっ
たらしく」

「人の過去をべらべらしゃべってんじゃねえよ」

と、そこにキースの声が届いてきた。見ればわざわざこちらに背を
向けている。両手には木の枝と、汲んできた水があった。とことん
まで律儀だった。

そんなキースに向かってエミリアはあは、と笑って、

「確か初めての味はふとましい50代でしたっけ？酷い話ですよね」

「犯すぞクソアマ」

「ごめんなさい」

キースの、どこか凄みのある声に、エミリアはすぐさま謝った。ど
うやら、彼にとっても中々のアレな過去らしい。いや、当たり前だ
が。

「ま、良いじゃないですか。紳士的な方の方が女性は好感を持てま
すよ？」

「こんな形で紳士的になりたか無かったっつ……ああ糞、嫌な思
い出だ」

そう言つて、水をストックし、木の枝を日のある場所に晒すと、
後ろを向いたまま、

「さっさと体を拭って着替える。もう日が昇っちまうぞ」
「了解です」

そんな訳で、さっさと着替える事になった。

.....

「さて、それでは今回の散策の方針をまとめましょう」

汚れを払い、体を解し、ようやく持つて身支度を整えました。ひとまず開けた広場に集合、石の上に腰を下ろす二人の顔を覗きます。流石に既に覚悟を決めているのか、表情はそこそこに気力が満ち満ちています。

うむ、フィリスも良い顔です。少なくとも先日のようにパニックになることはもう無いでしょう。

「さて、それでは目的地を確認しましょう」

ポケットに入れておいた地図を用意します。この地がマナに汚染される前、かなり古い地図なのですが、流石に土地の形までは歪んではいないでしょう。

「今回私達が目指すポイントは此処、既に放棄された鉱山です」

この山も昔は、ずっとずっと昔ですが、人が立ち入り、山の実りを得て、家の建築のために木を切り、道具に加工するため鉱物を掘る、資源豊かな山だったようです。

しかし、人の介入の行き過ぎからくる森林資源、鉱山資源の枯渇から人の数が減り、徐々に人の手が少なくなってゆきました。山は荒れ、資源は失われ、とうとうそこに済むのは荒れた環境でも対応できる魔物たちだけとなりました。そしてとどめといわんばかりの、マナの暴走で魔物の楽園になったとか。

さて、この古い地図をもう一度確認すると、ロステム山は一箇所盛り上がった山では無く、幾つか低く波打ったように隆起した山岳地帯であるということが分かります。

現地点は三つの隆起の中腹、目的地の鉱山はその上層部、

「つーか、その鉱山にそんなレアな鉱物が出たって何で分かったんだよ、トンファルは？」

「どうやら国のマナスポット調査の時に分かったとか、そこそこ被害も出たらしいですが」

その際、ミスリルなどの特殊な発光を示す鉱物があった、という情

報が届けられ、それが更に国家認定の鉱物専門家であるトンファルに繋がったとか。

「ただそこに至るまでに魔物が大量に溢れています。行動は慎重に行かねばなりません」

「距離は」

と、キース

「このキャンプ地からおよそ2時間ほどですか。ただこれはあくまでも昔の測定だそうなので、今のこの山の環境を考慮すれば下手すれば5時間は掛かる可能性があります。」

「どのようなルートで行くんですか？」

これは、フィリス

「地図を見る限り、幾つもルートがあるように見えますが、現在では大きく状況が変わりました。マナスポット、地形状況を確認しましたが、このルートがベターでした」

通行がギリギリ可能なレベルの高低の少し強いルート。本来はもつと緩やかな道を選ぶべきなのでしょうが、魔物という存在がある以上、多少無理をしても短い道を選んだほうが安全は保障されます。多少不安定な道なら、魔術でどうとでもなりますしね。

「さて、他に何か質問はございますか？」

二人は首を振りました。さてさてそれでは、

「それでは行きましょうか。前衛は私、中がフィリス、後衛はキースです」

ロステム山、散策開始。

第二十六話 ロステム山散策開始（後書き）

久しぶりの更新、ひゃっはー、ごめんなさい。ええほんとに。

リアルが忙しくてやばいです。どうなるかなこれから……

第二十七話 ロステム山のどうぶつたち

ロステム山、探索1日目

茂みの中、息を潜め、気配を殺し、私は獣の様に潜んでいました。目の前には小さな木の葉の上に芋虫がもぞもぞと動いています。ひよこひよこ必死に動いている所は妙に可愛らしい気もしますが、今はそんな事を気にしている場合ではありません。

こんな風に茂みの中に隠れている理由、それがもうじき近づいてきているのですから。

「……と」

そんな事を思っていると、来ました。怖いのが。

「……うわぁ」

簡単に説明するのなら、でかい豚でしょうか。ただ普通の豚はあんなふうに毛がモジャモジャ生えておらず、子供の体ほどの太さのような牙が伸びでもいません。

アラヤダ超怖い。何ですかあの見た目。

真正面から向き合えば圧殺される事間違いないし。本来なら全力でスルーして逃げ出す、そんな相手です。しかし今回に限ってはその手段は選べません。あの魔物はその愚鈍な見目に反して、非常に優れた感覚器官を所持しています。魔術による加護も見破るほどの。

今も、魔術で身を隠しているのにもかかわらず、此方に着実に近

まで移動しなければなりません。本当、ここら辺は魔物が

先頭の私がリードします。動く速度は最も遅いフィリスに合わせて

といつてもかなりの速度ですが 移動します。草むらを退け、木の幹を足場に前進……

「おや」

上った古い御木の上、進む先になにやら毛むくじやらの物体が。良く見ればなにやら光る球体が幾つか付いていて、真ん中に牙が二つ。

視認完了。デカイ蜘蛛ですね。キモッ。

「【魔刃】」

蜘蛛の構える木の身を、ナイフから飛ばされた刃で削ぐ。こちらに気がつき、身構えていた巨大蜘蛛がそのままの姿勢で自由落下。落下する先には、フィリス。

「っ！」

「ギイイイ!?!」

構える武器は短剣、細かく鋭く振るわれた剣は自由落下する魔物を捉えます。魔術加工を組み込んだ剣が、切り裂くと同時に弾き飛ばしました。

その先にキースがいます。

「はい終わり」

伸ばされた掌に刻まれたのは複雑な魔法陣、発動した瞬間、青白い閃光が蜘蛛の体を捉え、次の瞬間には黒く焦げ、蜘蛛はキースの目の前で地に落ちました。

「【二人とも、状況は】」

音声伝達を再開すると、直後に二人の声が届きました。

「【……無事です】」

「【同じく。ただ、魔術が失敗だ】」

フィリスが息をついて返事を、不満を漏らしたのはキースでした。

「【威力は十二分に思いましたが?】」

「【制御が甘い、手を少し火傷した。しかも拡散気味。準備の割に合わない】」

「【実践では使えないですか?】」

「【これじゃあ普通の魔術使ったほうがよっぽどマシだ。改良の余地あり】」

向上心があるのは非常に良い事です。と告げると、キースは不満げに鼻を鳴らした。ともあれのようで、とっさの状況にもここまで素早く反応できるのなら上々ですね。この先もなんとかかなりそうです。では、

「【行動再開します】」

最後にそう言って、移動を再開します。

それでも足は止めない。何故なら先に行くエミリアのペースは全く衰えておらず、後ろに控えるキースの気配も迫っているからだ。

しかし、速い。エミリアとキースのペースが、それもかなり。

追いつけないわけではない。しかし、此方の体調、ペース配分、進む通路のコンディション、あらゆる状況の、その限界ギリギリの速度を要求してくる。此方の限界を超えた速度を走らないのは、此方に気を使っているのだろう、が、限界を常に要求される速度というのは、辛い。

おまけに戦闘だ。先の巨大蜘蛛との戦闘でも、私自身何も指示を受けてはいない。いやそもそも先陣を切ったエミリア自身、何一つ戦闘の指示は出していなかった。にもかかわらずいつの間にか連携が完成している。

確信する。エミリアとキース。あの二人は相当慣れている。こういった状況に。

移動、探索の流れの中で、戦闘を作り上げ、完結させる。それは高い能力で纏まったパーティが自然と完成させている一つの奥義だ。その中では弱い者も強制的に引き上げられる。私も彼らに合わせ、無理やり能力が引き上げられている。

私と全く変わりないあの若さで、どうしてそんな熟練した力を身につけているのか、どういう経験をしてきたのか聴いてみたいものだ。

「【止まってください】」

そんな思考に陥っていると、エミリアから声がかかり、次のこの枝に飛び移ろうとしていた足を止め、地面へと降り立った。人の手の入っていない、酷い山道を進んできたが、降り立った場所は比較的広い、傾斜も安定した土地だった。

「よい場所です」

何かの魔法陣を指先で回して、先に降り立っていたエミリアが呟く。当然ながら私には、魔術のことなどさっぱり分からないが、しかし、その魔術的な見方からしても、この地は良い場所、らしい。

「この場所を中心に探索を開始します。私はこの場に転移魔術を仕込みますので、キースとフィリスは周辺の魔物を払った後に採集を。適当な量を集め終えたら再び終結してください。」

では、散開。と一言、私とキースは周囲の調査へと足を進めた。

第二十七話 ロステム山のどうぶつたち（後書き）

こっちも久しぶりの更新……いや、待ってくださっていた方々、お待ちせしました。申し訳ございません。

せめてもう少し生活が落ち着けば更新も安定するのですが……どうだろうなー

第二十八話 好奇心

「この状況において、貴方が最優先で守るべきはキースです」

ロステム山探索前、いよいよもって覚悟をきめて、いざとびだそうとしていたフィリスは、その直前エミリアにこんな事を言われていた。

「……貴方を守るべきではないのですか？」

「いいえ。私は貴方の代わりにできます。貴方も私の代わりにできるでしょう。ですが、キースの代わりは誰も補えません」

エミリアの瞳はひたすら淡々としていて、一切の妥協も感情も交えていなかった。こういつた目は、暗殺業をしていたころ見た事がある。いわゆる”暗殺ギルド”といった、プロの集団と一緒に行動したときだ。ギルドに所属していた暗殺者たちは皆、自らの仕事に対して何ら感情を混じていない眼をしていた。

どんな状況でも、どんな仕事でも、半端な私情を交えれば其処に隙が生まれる。だからこそ、彼らはそういう瞳を身に着ける。

そんな奴らと、エミリアが同じ眼をしている事に僅かに戦慄を覚えた。

だが、エミリアはそんな此方の思いを気にせず、言葉を続けた。

「キースは戦闘、補助、治癒、結界、転移、あらゆる魔術をこなせます。特化はしていませんが、満遍なく実用レベルに達しています。こういう環境において彼が一番頼りになる」

「貴方も同じ事は出来るのでしょうか？」

「私の魔術はどちらかといえば戦闘に特化しています。彼のような

器用さは無い」

私には彼女とキースの技量の違いは全く分からない。だが、こうもスッパリというのだから、そうなのだろう。少し此処から離れた所でナイフを振り、体を解しているキースを見る。

「ですが私は」

「……ああ、そういえばそうでしたね」

そう言うと、思い出したように、此方の手を取った。そして刻まれている奴隷印に触れると、何らかの詠唱を始めた。

「……何を？」

「生命のリンクを切りました。これで私が死んだとしても、貴方は死なない」

最初、その言葉の意味が理解できず、呆然としていた。だが、

「……え？」

「生命のリンクがある限り、貴方は私を放置することに躊躇してしまってください？」

確かにそうだ。奴隷の呪印によってエミリアが死ねば、私も死ぬ。だから私は彼女を常に守ろうとした。そうせざるを得なかったのだが、それが解除されたというのなら、彼女を守る理由が無くなるという事だ。

と、そんな私の考えを見抜いてか、エミリアは言葉を続け、

「ああ、一応言っておきますが、だからといって私を殺して逃げようとしても意味はありませんよ。キースと私の協力無しに、貴方は

この山からは逃げられませんよ」

「そんな真似はしませんよ」

それくらい言われなくても分かっている。大体、エミリアには多少なりとも恩義は感じている。以前と比べれば随分と健全な生活を遅れているのだから。

……今回は別だが。兎も角、彼女を殺してまで逃げようとか、そんな事は思わない。

「賢い子は好きです」

エミリアはにっこり笑って、私の頬を撫でてきた。私と同じ年くらいなのに、時々彼女はこうして此方を子ども扱いする。それがどうにもこそばゆかった。

.....

そして現在、フィリスは散策の最中、現れた魔物を打ち倒していた

「キィィィ.....」

目の前の蜥蜴のような魔物が、首から血を流して、ゆっくりと草原に沈んだ。

倒した魔物から、幾らかの血、体毛、体の部位を解体して、採集する。どの魔物からどんな箇所を採取すればいいかはエミリアから

既に叩き込まれている。

動きは止めず、そのまま散策を続ける。山菜、薬草、木の实、錬金術の素材となるものを見つけるたび、適度な量を見計らい、バツクやポシエットへと入れていく。

” かんばんむすめ ” をやっていた頃から、何度かこういう事はやらされた事があったから、少しはこうした作業にも慣れてきた。半ば機械的に高い樹木に生っている木の实を採集すると、再び場所を変えるために動いた。

「……あら」

だが、歩き続けるうちに、絶壁にぶつかったり、崖だったり、毒草の草原だったりと紆余曲折をしているうちに、いつの間にか最初に出発した場所に戻ってしまっていた。

当然そこにはエミリアもいた。普段のおちゃらけた彼女と同一人物とは思えない、真剣そのものの表情で、何らかの術式を刻み込んでいる。

エミリア、この山に上ってからというものの、彼女はひたすらに真剣だ。

自分の事を最優先する欲望のままに生きる、まさしくそんな女だというのに、登山時は自らが先頭で道を切り開く役目を負った。つまり、魔物と真っ先に衝突するのは彼女で、当然、最も多く命を危険に晒す事になる。だが、彼女は、その疑問に対し、

「その方がこの少数パーティの生存確率が上がるからでしょう」

と、あっさりと答えた。危険な環境に対して、彼女は驚くほどリ
アリストだ。状況判断においては、例えば自分が自分自身であるうと
も、シビアであり続ける。

探索寸前に施された呪いの処理もわかりだ。

今まで、エミリアに対しての印象というのは、非常に性質の悪い
変人で、あくどい事を考える性悪な女というものでしかなかった。
まあ、別にその認識自体は、全く変わってはいないが。

ただ、それだけの女ではないという事も、分かった。もっと彼女は
複雑だ。いろんなものがぐちゃぐちゃにこんがらがっていて、兎
に角、複雑だ。

人間は誰だってそうだと思う。だけど彼女はその中でも、とびつ
きりだ。

「おーい何してんだ」

ぼん、と頭を叩かれた。振り返ればキースがいた。彼の背中に背
負ったバックには、私よりも効率よく採集しているのか、入りきら
ない野草や獣の尻尾やらが飛び出ている。

「……主の観察を」

「観察ねえ。まあ、見ていて飽きない女だがな……見ているだけな
ら」

キースはげんなりと顔を崩した。

考えてみれば、この男も変な男だ。エミリアに惚れている、とい
うのは全く隠そうともしてはいないが、しかしそもそも何だってあ

んな狂人に惚れているのだろう。昔からの仲と聞いていたが、そもそも昔からの仲って、どんな仲だったのだろう。

既にエミリアに仕えてから長いというのに、考えてみればこんな事を考えた事は全く無かった。昔からずっと、自分のことで精一杯だったから、こういう考え方になれてなかった。

「……あん？なんだよ」

「いいえ、別に」

「……変な奴だな」

貴方に言われたくない。と口に出そうになったが、止めておいた。

「探索を続けるぞ。エミリアが術式を刻みきるまでもう少しかかりそうだ。」

キースの言葉に頷き、二手に分かれて探索を再開した。

歩きつつ、思う。エミリアと、キースの事を。

単純な話、興味が沸いたのだ。あの二人への、単純な興味が。

第二十九話 むかしばなし

ロステム山の日が沈む。元より厳しい山岳地域であり、マナの混沌より魔物が溢れ木々は唸りをあげる。だが、そこへ降り注がれる斜陽の光が、魔境のおぞましさを緩和していった。

だがそれでも魔の山と呼ばれる場所だ。気候も、一部では真冬のような冷気が、別の所では真夏のような暑さが、あるいはその両方が唸りもしている。夜が近づくにつれその温度差が強力な風や渦を生み、ますますもって人が住むには厳しい山脈に変えていく。

だが、そんな魔境の中で唯一、凶悪な魔物も、灼熱も、極寒も、烈風も存在しない空間が存在していた。四方に不可思議な魔法陣の描かれた空間、エミリアたちの拠点だ。

そしてその場の中心に描かれている転移魔法陣、そこから現れる三つの影、エミリア、キース、フィリスの三人が帰ってきたのだ。

「……………帰って、きた」

フィリスはその場で膝を突いて、震える声で呻いた。バッグからは幾らか採集した植物達がぼろぼろと零れていった。だが、彼女にはそれを拾い上げる気力も無かった。

「……………おい、しっかりしろ」

キースは、フィリスの背をゆするが、返事は愚か、身動きすらない。息をしているので、まあ生きてはいるのだろう。治癒呪文でもかけてやろうとも思ったが、そもそも治癒術は疲労まで癒せない。

大体、俺自身、そんな気力は無い。

「……主は？」

「……ここだ」

フィリスの側とは反対側の足元を指差せば、そこでエミリアがいた。此処に転送された瞬間、その場でぶっ倒れて眠りこけたのだ。眠りだすのに一秒とかならなかつた。頭を地面に突っ伏して、身じろぎすらしない。

「……凄い姿勢で眠るな」

「特攻役だったからな。一番命を削ってたのはコイツだ」

自身が適任だと確信したからこそ、自分でその役目を背負ったのだろうが、まあ、無茶をしたもんだ。たったの三人のパーティでは負担もかなりのもだっただろう。俺は俺で、状況を見て前衛後衛を使い分けるなんて、面倒な事をさせられたものだが。

正直、俺も同じように眠りたい。が、流石にこんなドロドロな姿で寝てられない。

「よっこらせっと」

地面に転がるエミリアの体を抱き上げる。あどけない表情でねむりこけるエミリアの顔を見ると、こちらまで脱力しそうになった。やれやれだ。本当に。

疲労で半ば呆然と座り込んだフィリスの背を叩き、採集した素材を集めたバックを渡す。

「この素材、固めて保存用の魔法陣の上に置いてきてくれ。俺はメ

シの準備をする」

「……」

「……なんだよ」

「明日も探索を？」

尋ねるフィリスは不安に満ちていた。そりゃ気持ちは分かるが、そんな顔をするな。

「お前もエミリアも限界だろう？明日はこの周囲の探索で済ませよう。途中設置した転移魔術はまだ暫くは持つように出来ている」

俺だって明日に注ぎ込む体力は無い。そして此処は、万全な状態でなければ挑める所ではない。エミリアが仕掛けておいた結界と転移魔術のお陰で、安定した休息を得られるし、移動する時は最終探索ポイントへ瞬時に移れるのだから、焦る必要は無い。というか、焦ったら死ぬ。

「さつさと片してメシにするぞ。散策の時、食える肉と山菜も集めといた。今日は鍋だ」

「鍋？鍋を食べるのか？」

「鍋料理しらねえのかよ？上手いぞ？」

隠そうとしても分かるフィリスの目の輝きに笑いが漏れた。微笑ましい女だ。

.....

日が暮れ、夜が訪れた。

人の営みの無い山奥、魔術により暗闇を割く力を得た。今の人々は夜の暗闇を恐れることなく、自らが生み出した魔術の明かりを頼りに、人の営みを続けている。

だがソレとは引き換えに失われたものがある。そして今この場にそれはある。夜空に広がる数え切れない星の瞬き、このロステム山でしかありえないその光の瞬きは、見れば誰もが息を呑むほどの絶景だった。

その夜空の下で、それを独占している者達がいる。

エミリア、キース、フィリス、その山脈の中心にいる三人、彼等はその絶景の下、僅かな焚き火を囲い、何をしているのかと思えば、

「……キース、塩とってください」

「……フィリス、残りの肉だせ、全部」

「……む……つく」

「フィリス。骨を食うな。骨を」

ひたすら、飯を食べていた。

「「「……ごちそうさま」「」

用意された焚き火の中心に備えられた小さな竈、そこに備えられた鍋を囲んで、三人は鈍い動きでゆっくりと、食しきった食物たちへの感謝の言葉をささげた。

既に鍋は空っぽだ。何一つとして残ってはいない。

「……おなか、いっぱい」

フィリスは満足げに呟き、体を椅子にしていた倒木に寝かせた。

キースが用意した”なべりょうり”というのは、デカイ鍋に食材をぶち込んで、煮込むという至極シンプルな料理だった。

しかし、そんなシンプルな料理が、やたらと美味しかった。混沌とした食材が完全な調和を果たし絶妙な旨さを生み出していた。エミリアもキースも私も、一口後から殆ど無言で食べ続けて、完食した。

不思議だ。自分もあんな風に適当に煮込むくらいの事はした事はあったと思うが、単に食材を食べられるようになっただけの、何の味も無いものだったのに。

「……素晴らしい満足感」

しみじみというエミリアに、私も頷いた。あの旨さはなんだったんだろう。キースが操っていた細かな調味料とかの結果なのだろうか。

「一応、明日分の食料も採っておいたつもりだったんだがな」
「殆ど食い尽くしましたね。骨しか残りませんでした」

食材の残骸を見ると、本当に骨しか残っていない。狩った魔物の体を丸ごと持ってきたわけではなかったものの、それでも相当の量が皆の胃袋に叩き込まれた気がする。それほど、皆、腹が減っていたのだ

「こづいづいのが食べられるなら……山もいいな」

流石に、今日のような強行軍は嫌だが。
だがそれを聞くとキースはしみじみと、

「昔はこんなメシばつか作ってたけどな……」

「昔はこんな生活をしていたのか？」

「昔ってか、学生前は、そんな時期もあつたな」

キースは思い出すようにそう言うが、果たして何をどうしたらこんな生活を続けるのか。

探索中に浮かんだ好奇心が再び蘇る。自分も人の事を気にしてられるほど真つ当な人生を歩んでこなかったものの、しかしこの二人は一体どんな過去があつて、現在に至つたのか興味がある。

「というか、二人は昔、何があつて今に至っているのですか？」

遠まわしに聞き出す、なんてスキルは持ち合わせてはいない為、ストレートに聞いた。彼女と彼の過去、安易に聞くことではないという気もするが、それでも聞きたいのだ。

この質問に、エミリアは不思議そうに首を傾げ、

「私の過去……正直、面白い事は無かったんですがね」

エミリアは肩をすくめてそう言う。だがそれでも構わない。別に面白おかしい話を期待して聞いたわけではないのだから。私の興味は彼女のルーツ、それだけだ。

するとエミリアも、特に過去を語ることに抵抗も無いのか、語り始めた。

「私の生まれは東の方にある村……でしたっけね。何の変哲も無い村だった気がします」

「村、ですか」

この女にこそ、何の変哲も無い村というのは似つかわしくもない気もするが、しかし意外とこういう変な人間ほど、普通の人間と言う根本があるものなのかもしれない。

そう納得し、エミリアの言葉に耳を傾け続ける、と、

「で、その村が盗賊に焼き討ちにあって、私以外が皆殺しにaimaしてね」

「ちよつとまってください」

はい？、とエミリアは首を傾げる。

いやいやちよつと待って欲しい。てつきり此処から暫くハートフルな農村ライフでも始まると思ってたのだが、今なんといった？盗賊？焼き討ち？皆殺し？

唐突過ぎやしないか？！

「まあその時からこの国も荒れてましたからね。どーしよーもなかつたんですよ」

「それで済むものですか？」

ぶつちやけ、国を救う英傑とか、世界を破壊させる魔王とか登場してもいいような大イベントでもいい気がするが。しかし、エミリアはあまり気にすることなく話を続ける。

「母が私をかばって樽に入れて隠してくださいさつてね、でもその母もやっぱり殺されてしまいましたね。残された私はどうしようもなかったです。当時5〜6歳でしたから」

「……それでどうしたんですか？」

そんな少女が一人孤独に生きていられるわけが無い。エミリアも、ええ、と頷き、

「それで途方にくれていた時に、私を拾い上げてくれた人がいたわけですよ」

「それは？」

「奴隷商人でしてね。そのまま私、商品化」

「展開がハードすぎませんか?!」

短い時間の合い間に何で二つもイベントがあるんだ?!どっちかで良いだろう!?

「あくまでも私、商品でしたから、最低限の食事は保障されていたんですよ。まあその時の時勢は不安定で、纏め売りに近い状態でしたが」

まあその時も色々ありましたねえ。と、しみじみエミリアは頷いた。

いや、そりゃ色々あるだろうが、しかし既に何故この女が今も生きているのか不思議でしょがないんだが、本当に、何で生きてるん

だ？

「それでガイディアの変態禿デブ貴族に売られまして」

「……それでその後は？」

「そのハゲデブ変態親父をブチ殺しまして」

ある意味予想はしていたが、本当に予想通りのことをやっていた。しかし、

「奴隷の呪印は？」

「拷問して解除させました」

「……痛みが送られたのでは？」

「我慢しました」

我慢できるレベルじゃない筈なんだけどなあ……？と、奴隷の呪印の刻まれた腕を見してみる。普通身動き取れなくなるくらい悶絶する。大の大人でも、鍛え上げられた戦士でも。目の前の女は規格外と言っただけだろう。多分。

「確かその後は浮浪者のように路上生活を……、その時ですね。キースと会ったのは」

「そうそう……あの頃は荒っぽかったな。俺も。本気でお前を半殺しにしたし」

「いきなり背後から酒瓶でぶん殴られた時はびっくりしましたねえ」

アッハッハ、と、二人は笑った。いや、笑えない笑えない。

「……よく、今まで生きていられたね」

「……一体今まで何度神を呪い殺そうと思ったことか」

エミリアは遠く、据わった眼をした。本当、この女ならいずれ神をも殺しかねないという気がしたが、いや、そんな経験があったからこんな女になったのか？

しかし、エミリアは暫くすると、ですが、と、言葉を区切って笑い、

「今はまだ幸せですよ。飢える事はないし、フィリスもいますしね」

そんな事を言いながら、ニヨニヨって抱きついてきた。ぺたぺたと体を触ってくるが、まあ、別に嫌ではなかったの、されるがままになった。

「……ちなみに、キースはどんな人生を？」

エミリアに抱きつかれながら聞くと、キースは考え込むように星空を仰ぎ、

「俺もまあ、ろくでもない典型みたいな人生でさ。親がろくでなし、そのうちどつちもいなくなって、で、家無し状態でグダグダ」

「グダグダ？」

「どこぞの食堂で下働きしたり、娼婦の女将に改造されたり、道楽女のヒモになったり」

「……改造？と思ったが、何と云うか口にしたらきりがなさそうなので口は挟まなかった。」

「そんでエミリアと会って、ホームレスのガキ同士で抗争やつたり、わけわかんねー国の策謀に巻き込まれたり……色々あったなあ」

色々、という言葉に感情を押し込めて、キースは息をついた。聞

くだけでも濃厚な人生を送ってきたのが分かった。だからこそ彼は、その若さで色々悟っているのだろうか。

「……二人とも、愉快的な人生を歩んでいますね」

「そう言うお前はどうかだよ。フィリス」

「私か」

問い返されて、自分の過去を思い出す。思い出して、

「別に、本当に私は何も楽しい事なんて無かった。」

その記憶を辿ると、二人とそう変化があつたわけではなかった。

「物心付いた頃から奴隷で、好き放題オモチャにされて、体がボロボロになつたら暗殺者に育てられて、暗殺者で働いていた」

思い出せば出すほど、何一つ楽しい事の無い日々だった。ただただ誰かの命令を聞くだけの日々、時々思い出したように弄ばれて、命じられれば人の命を奪って、

本当に、ろくでもない人生だった。

「だから……」

だから、大変な日々だけれど、それでも、今は楽しい。

それを言ってしまうのは嫌だったが、それは事実だった。

「……ふっん」

キースは、そんな此方の感情を察してか、それ以上は何も言わず、鍋の片づけを始めた。エミリアは、と、抱きかかる彼女を見てみれば、

「……すう」

静かに寝息を立てて、眠っていた。当たり前だが、やはり疲れていたのだ。彼女を見ているとこちらまで眠たくなるが、それは堪える。自分がおきていなければ、誰が彼女のボロボロの格好を世話するのだ。

「本当、好き勝手な人」

そんな事を言いつつ、自信の頬が僅かに笑みが零れているのは、否定できなかつた。

第三十話 探索二日目

二日目の朝

「……………」

キースは自身の空腹を告げる腹の音に目を覚ました。

早朝、というにはどう考えても、テントから刺す光の強さを見るに遅すぎる。どう考えてもお日様はとっくに上空へと昇っており、今日の朝は既に終わりを告げている。

「……………探索にあるまじき、失敗だなあ。おい」

いや、仕方ないと言えば仕方ないか。昨日が昨日だ。一瞬たりとも集中を途切れさせない全力疾走。魔術とも体術の総動員。これで次の日も日が昇ると同時に目を覚まして元氣りんりんで活動していたら、化け物だ。

「……………うっと」

体を起こそうとしても、全く動かない。やはり疲れているのだろうか。筋肉痛、とまでは言わないが、まるで体になにか、重石でも付いているかのように、重い。本当に疲れている「ううん」「らしい……………」

「……………ううん？」

右を、というか、自分の体を見た。

するとエミリアが右側の自分の体に思い切り抱きついていて。ついで逆をみると、そこではフィリスが体にしがみついている。丁度二人に挟まれて、柔らかい感触を感じながら、キースは一言。

「……………結界でも張っちまうか。ガチで」

そんな感じで、二日目が始まった。

……………
……………
……………

ロステム山、探索二日目

「いい天気ですねえ……………森が茂りすぎて光が届きませんが」

ロステム山の楽しい楽しいピクニック、今日は二日目です。今日は絶好の散策日和で、お日柄もよく雲ひとつ無い晴天で、お日様は高く高く上っていました。

ええ、本当に高く高く、時間的に、最早真昼間です。

「朝起きたら日が完全に昇ってしまいましたね……………不覚っ」「だーれも起きられなかったんだからしょうがねーだろ。」

キースがなだめる声を聞いても、悔しさに歯噛みしそう。

見事な熟睡でした。魔術を利用した強行軍は非常に効率よく、安全性も格段に上がるのですが、同時に体力がごっそりと削られる為それはもうよく眠れました。目覚まし用の時限式爆発術も、朝の獣の咆哮も、一切聞こえないくらい。

フィリスも、その魔術を使った強行軍に生身で付いていったのだから、それはそれで死ぬ思いだったのでしょう。ええ、見事に熟睡してました。キースに絡まって。あの子抱き癖があるんですね。寝る時。私もですけど。

ともあれ、と、私は溜息を零しました。

こうした探索の時間は稀少で、やはり寝過ぎしてしまったと言うのは悔しくはあります。

「明日は日が昇る前に起きましようか」

「止めてくれ。死ぬから。」

「いやじゃないですか。今日はキースの提案を受け入れたんですから」

キースの提案で鉱山への行進は、今日は却下され、近場の探索を進めることになりました。正直気が進まないと言えば進みませんが、ぶつちゃけ私も未だ、体力が完全回復しているとは言いがたく、それ故に反論はしません。

「……むー、ありがち」

薬草の採集、グリーンハーブであったり、そういったものの採集を進めます。ぶつちゃけ此処らへんにある資源は、残念ながら、街の学院裏にある森で採集できるのです。

ここらへんは、マナの奔流が少なく安定しています。だから安心して採集できますが、代わりに希少性もないのです。

とはいえ仕方ありません。こうした素材も、利用価値が高い事は違くないですし。

「ひとまず店の商売品分くらいは取り揃えたいですね」

「俺は学院の課題分は取つときたいな」

「あら、また課題出されたんですか？」

「お前が一々呼び出すから出席単位足りてねえんだよ！」

「まあまあ、課題の提出手伝いますから」

「そうしてくれりゃ助かるよ。畜生め」

そんな感じで、キースと二人で話をしていると、ふと茂みの奥からフィリスが顔を出し、

「主」

「あらフィリス。ドラゴンでも発見しましたか？」

「目を輝かせてそんな事聞かないください。笑えない」

そうではなく、と彼女は前置きをして、

「少し不自然な場所が」

私とキースは顔を見合わせて、首を傾げました。

.....

フィリスの案内する先は、キャンプ地から少し上の地点でした。

「……なるほど、これは確かに奇妙ですね」

その場所は、私達のキャンプ地よりも更に広い広場でした。といっても彼方此方に奇妙な木が連立していたり、怪しく輝く獣の瞳がみえたりと、危険な事には変わりませんが。

しかし、それ自体は別にこの山において不自然ではありません。むしろ至極当たり前の光景でした。ですから、フィリスの指摘したのはそれではなく……

「これは……焚き火の跡か？」

問題は、広場の中央にありました。

わざわざ草葉を取り払い、その上で石を円を書くように並べられた後、中央には焦げた炭になった枝が小さな円錐を作っていて、……どう考えても焚き火の跡でした。

「周囲には、わざわざ木を伐採した跡までありました」

つまりは人がいた、という証拠にも思われますが、しかし考えるまでもなく、此処はロステム山。自然に考えれば此処に人が暮らしているわけがないのです。しかし……

「では、誰か、私達の他にも探索していたと？」

「いいえ、そんな話を聞きません。そもそもこの山は第一級危険区域です。許可が無ければ一般人の山への登山は認められません。そ

してここ暫くの間、山に登頂した者はいません」

勝手に山に入られても困ります。殆ど自殺のようなものですし。今此処にいる私達が言うようなことではありませんが。

「……ちなみに俺たちは許可を取って入ったのか？」

「勿論取りましたよ。非合法なやり方で」

「正々堂々としているのか、そうじゃねえのかどつちだ」

そんなどうでもいい事をキースは呟いていました。本当に性根が良いんだから。

「ともあれ不自然ですね。これは……」

「不法侵入の線はないのですか？」

「それは勿論ありえますが……まともに許可も取れない人間が此処までこれですかね」

「火を扱う事を覚えた新種の魔物が出たってのは？」

「……可能性は無くは無いですが、魔物と言えど獣は獣ですからねえ」

うーむ、と、三人が三人で並んで首をかしげました……不毛な事に。。

現状、目の前の光景の謎を解決できるヒントは一つもありません。それなのにこんな所で三人が顔を付き合わせてしまっていたとしても、

「時間の無駄ですね。意味がありません」

「……まあ、どう考えても情報不足だしな」

「頭の隅にこの情報は置いておいておく事としましょう。探索を再開します」

手をポンと叩いて、探索は再開とあいりました。

頭の隅に置く。解決できる時に解決する。大抵、こうした謎、というのは分かっただけでしまえばあっけなく、意外とんでもないことだったりもするのです。どんな結果を生むとも分からないような半端な謎を解き明かす時間をかけるくらいなら、目の前の稀少な資源を漁るほうが素晴らしい。

「さつて、探索探索う……っと、あれは何のキノコでしょう!? 珍しい輝きっ!」

「……えらく禍々しく輝いてるが……あれ大丈夫なのか、キース」
「さあ……って、うおおおお!? キノコが巨大化してエミリアが食われたああ!？」

そんな感じで、三人の探索は続く。

保留となった謎が、予想だにしない形で自身らに降りかかると知らずに。

第三十一話 魔石の赤ちゃん

ロステム山、二日目探索中、

「……でかいほら穴ですねえ」

私達は今、三人揃って並び、目の前の洞穴をぼかんと口をあけて眺めていました。

事は数分前、昨日と比べたら随分とのんびり平和な、だけど時々魔物とかが現れたりしてほのぼの殺伐な探索は続いています。まあそれが、昨日酷使した体を癒すには丁度いいくらいのもので、気分的には最早散歩のような感じでした。

「日向ぼっこでもしたいくらいですねえ」

「魔物さえでなきゃなあ。血生臭い日向ぼっこなんてゴメンだ」

そんな風に魔物を惨殺しながらキースと無駄口を叩いていると、繁みの奥から

「主、変なのが」

と、フィリスが、また、のたまったのです。

「あの子、変なものを見つける才能でもあるのかしら」
「……厄介ごとで無けりゃいいがな」

そんなこんなで、彼女の案内した先に行くと、現れたのは大きな洞窟でした。

斜面に生えた木々と茂みで意外に隠れているように見えたのですが、見つけてみると隠れていたのが意外なほど大きな洞窟。

「……不気味ですね」

「まあ不気味つつつたらこの山そのものがって話だけだな」

マナの奔流で異常に発達した不気味な花々に囲われているためか、洞窟の入り口がまるで怪しい魔獣の住処にすら見えます。実際は単なる洞穴なのでしょうに。

「……ちなみにここは探検しないでいいんですか？」

「必要ないでしょう。これをご覧ください」

見るべきは洞窟、では無く、入り口の近くで、繁みに隠れてしまったもの。古びて、最早腐敗が進んだロープと、同じくボロボロになった木の板です。

「看板ですか？」

「『立ち入り禁止』と書かれてあります」

昔は此処はマナの奔流の無い安定した土地であり、それ故に此処も、さほどの苦勞なく来る事が出来るはずです。そしてその過去に封鎖されたと言う事は、

「既に過去、探索されており、その上で危険だと分かり封鎖されたのでしょう」

何かあったのかもしれませんがそれは過去奪取されているでしょ

うし、今はマナの奔流で危険な魔物が盛りだくさん、という可能性は捨て切れません。

するとキースが首をかしげ、

「マナの奔流があれば、鉱石は無くても魔石は生まれるんじゃないの？」

「この辺りの程度のマナではまるで足りません。最早マナが視覚化するレベルになるまで昇華していなければ魔石とはなりえません」

決して現地点のマナの濃度が低いとは言いがたいですが、しかし魔石を生み出すに至るにはまだまだ、濃度が足りません。

「……子供心が撥られるがな。こんな穴」

「ま、それなら一応見てみましょうか？」

私が洞窟へ足を踏み入れていくと、キースとフィリスも後から付いてきました。中に入ると入り口からの光もすぐに届かなくなり、あっという間の真つ暗となりました。

「【光よあれ】」

魔術で明かりを灯し、洞窟の中が見えてくると、想像以上に中は狭く、あまり広くない空間だと分かりました。元々は鉱山ではなく、自然に発生した洞窟のようでした。

一応、奥へ奥へと道が続いていくのが見えています。あまり、人は愚か、生物の気配すら余り感じない。さびしい所です。

「うーむ、しかしやはり、何も無いですねえ」

正直何かあるでもなく、単純に山中にぼっかりあいた穴のように思えます。勿論期待はしたわけではないですが、やっぱり少し子供のような期待があったものですから、ワクワクが裏切られたのは否めません。

すると、キースと私の間を歩くフィリスが、天井を見上げ、

「……この、光ってるのは？」

見上げると、チカチカと、仄かな光が、まるで雪のように散っているように見えました。

「あれは元々マナの保有量の高い岩石に、大気のマナが集まっているんです。光っているのは私の魔術の影響を僅かに受けて、反射しているのです」

マナは、あらゆる現象を起こす原初の物質であると同時に、あらゆる現象を写す鏡でもあります。周囲の現象に引かれるのです。その現象が魔石をつみだすのです。

「ですが、あの程度ではまだまだ足りません。魔石が生まれる、ずっと前の状態ですね」

「魔石の赤ん坊、って事か」

キースの表現が正しいでしょう。魔石の赤ん坊、いや、それ以前の卵と言うべきでしょうか。そしてあの卵が魔石となるには、もっと長い年月が必要でしょう。1000年か、2000年か、どちらにせよ私は死んでるので意味はありません。

やはりもっと強いマナの奔流が起きている場所を、頂上を目指さなければなりません。

「さて、それじゃあ、戻りましょうか。今日はしっかりと眠って明日に備えましょう」

「メシの用意もしなきゃなあ」

「楽しみだ」

そんな感じで、私達はこの洞窟を後にしました。

「……」

背後からの視線に気づかぬままに、

.....

二日目の夜、ロステム山キャンプ地

「さあって、いよいよ明日、今回の目的地であるロステム鉱山に向かいます」

計3度目になる美しい星空の夜、焚き火を囲んで、私達は楽しい楽しい作戦会議を始めました。ちなみに、今日の夕食は巨大な牛のような獣の肉を、香草で包み焼きした豪快な料理で、美味でした。

そして明日、目的の地である鉱山探索に向かうわけなのですが……、と、キースがまず、学生らしく手を上げました。

「……今更反対する気は無いけどよ、鉱山で何を採集する気なんだ」
「とれるものは全て」

「欲張りかっ」

「研究できるものはしますし、できないものは売ります！」

魔石は単純に売るだけでもそこその値段が付きます。稀少なものは下手な宝石よりも遥かに高価な値段が付く事もあるのです。上手くいけばおいしい臨時収入となるでしょう。

「環境への影響は？」

「普通、このマナスポットという環境そのものが普通の生物にとつては害となりえるのです。魔石等取り払っても問題はないでしょう」

無論、ある程度様子は見ていくつもりではありますが、鉱山なんでもものは元々人類が勝手に掘り進めて作った人工の洞窟であり、そんな事をいっても仕方ありません。

「沢山取れたとして、どうやって持ち帰るんですか？」

「転移術と封印術を併用利用した術式結界で……ええ、魔術です魔術。」

フィリスが困りきった顔をしていたので説明を省きました。今回の為に苦労して考えた魔術運用だったので説明しなかったのですが、まあ、いいでしょう。

「基本は魔鉱石系ですね。多分いい感じに溜まっているはずですよ」

魔鉱石は基本、通常の鉱物マナの保有量が一定量を超え、鉱物自体の性質が変化した時に生まれるものです。マナはあらゆる現象を

引き起こす源のため、どんな性質になるかまではランダムですが、時折稀少な変化が生まれた鉱物が生まれる場合もあります。

「ミスリルとかですか？」

「ええ、純正のManaを保有した魔石も価値が高いです」

なるほど、とフィリスは頷き、しかし

「……その、私はそういうのを区別をする自信がありません」

「一応貴方にも識別方法は教えるつもりですが、多分必要ないかと」

「というと？」

「今日の洞窟で、岩石に集まるManaを確認しましたね？」

フィリスは頷きました。あの、何処か幻想的とも言える光景。光の粒が天井の岩石に集う様子。

「恐らく上の鉱山でも同じ、あるいはそれ以上の現象が起こっていると思われます。それがまさしく魔石を探す時の目印となるでしょう」

「と言う事は、魔石というのは意外に見つけやすいものなのですね」
「かわりに発生条件と、そこに至るまでの道のりも大変ですが」

今のように、強大な魔物たちの目を掻い潜り、命を幾つもかけなければなりません。勿論、その分の価値があるものですが、

「ともあれ明日の方向性はこんな感じですか。良いでしょうか？」

「異議なしっつーか異議あってもそうする気なんだろ？」

「無論です」

「聞く意味ないですね……まあ、私も異議はありませんが」

「満場一致ですねー素晴らしい」

「お前に満場一致って言葉を教えてやりたいもんだ」

そう言っただけキースは笑い、フィリスは疲れたようにがっくりと肩を落とした。全員、疲れてはいますが、しかし緊張しすぎてはいない、良いコンディションですね。

「さて、それじゃあ今日はもう眠りましょうか」

後は明日、この山を制覇する為の体力温存、眠るだけです。三人でテントで横になってぬくぬくするだけです。キースは頭が痛そうでしたが、まあ構いはしません。全ては明日、何もかも上手くいつて、私が借金返済の足がかりを掴むためなのですから。

「キースは調理具の片づけを、フィリスは私と術式結界の確認です」

「了解」

「わかりました」

かくして、三人が就寝の準備のため、立ち上がり、片付けに入るうとした、

そんな時、でした。

【 ー 】

魔の響く音、緊急を告げる音、獣を弾く結界が破られた、それを知らず警告音、

「敵襲」

私の言葉に、キースと、フィリスが剣を構え、

「【魔を裂く刃よ】」

魔術を発動、両手に構えたナイフから伸びる絶刀を構え、それと同時に奥から蠢く気配。

「来ます」

繁みから飛び掛る幾つもの影、同時に飛び出すフィリス、キース、そして私

戦闘が、始まりました

第三十二話 闇夜の敵襲

闇夜に蠢く影が繁みから飛び出す。

僅かな焚き火の明かりのみの闇夜に現れた謎の襲来者に息を詰まらせる。結界は野生の生物なら近づかない、避けて通るようにできていると言う。ならばこの敵は意図を持って此方に近づいてくるという事。

フィリスは、その闇と共に現れた”何者か”に対して叫んだ。

「何者だ!？」

足元で炎の燃え移った枝木を蹴り付ける。一瞬焚き火の炎に照らされた姿は、やたらと傷の付いた金属の鎧、剣、僅かに映る、濁った瞳、

……人間?!

夜盗?!だがこんなバケモノ山脈に!?!ありあえない!

そもそもこの山に入るのにも許可が要るとエミリアが言っていたじゃないか!?

思うと共に剣がくる!短剣でいなし、そのまま側にいるであろう振るう。だが手ごたえが無い。完全に闇にまぎれて動いている。逆に此方は狙いが定まらない。

思ううち、左右から新たな動き、数が多い!背後に下がると、その場に刃の閃きが幾つも貫いていく!一体何人この辺りに潜んでいたんだ?!

「フィリス!!」

混乱を払うエミリアの声が響いた。振り返れば魔術を発動したのか、エミリアとキースの姿が闇から浮かびあがった。若干ほっとしながら、彼女らの元へといっつきに後退する。

「灯りを消すぞ!!」

キースの言葉と共に魔術の明かりは消え、焚き火も落とされる。此方の場所だけ曝すような灯りはあるだけ間抜けすぎる。そして同時に場所を散らすように移動する。だがこちとら暗殺業を営んでいた人間だ。闇で見えなくとも気配は分かる。キースとエミリアの居場所も把握できる。

だが……敵は何処に？

気配が全く読めない。生きている以上はどんな生物も発する呼吸や足音、視線、その全てを総合して溢れる気配を殆ど感じない。達人レベルの戦士なら気配は隠せると言うが……
しかし、確かにあたりで蠢いているのは分かる。草木はざわめく音、そしてちらつく殺意、悪意、間違いなく襲撃を受けている。

そもそも何故向こうは明かりをつけずに行動できる？

全員魔術の心得があるのか？魔術というのは容易く習得できるものではないはずだ。暗殺業を営んでいた頃、仲間には皆魔術を扱おうと努力し、しかし全員が軒並み挫折していた。その程度には魔術は才能とたゆまぬ努力が必要な力だ。

だが、それなら何故向こうは明かりをつけずに動ける？ 少なくとも向こうの動きに淀みは無い。

特殊技能でも身につけているか？それとも地形把握？しかしそれにしてはあまりにも……

思う内、来る。灯りを消し、位置を悟られぬように移動したはずの此方に、真っ直ぐ。

……
……
……

繰り返される闇夜の攻防、月光に刃は閃き、火花は散る。
幾度かの交差の中、キースは焦れるように声を張り上げた。

「鬱・陶・しい！」

苛立ちと共にナイフを振り下ろす。だが、手ごたえは無く空を切る。

数瞬まで間で剣を振り回してきた闇夜の敵は、此方の動きを見えているかのように見事にこちらから距離を取って、再び此方の届かない範囲へ消えていった。

敵は複数、闇の中、悪意を持って攻めてきた正体不明、能力未確認の敵。向こうが灯りを利用して見えないようには見えない。だのに、此方の周囲を周るようにして困う敵の動きに一切の迷いは無い。

なんだ？この敵は

正体不明の相手、なんて経験は何度もある。だが、このロステム山という環境で、闇の中、集団で、統率の取れた動きで襲い掛かるというのは、あまり経験がない。

いや、相手がどんな正体だろうと関係ない。問題はそのままとジリ貧だと言う事だ。

相手の動きは鋭い。だが、捉えきれないものではない。問題はこの闇だ。向こうが闇をものともしていない。しかも此方には気配を殆ど察させない、恐ろしく静かな敵。

なら、やるべき事は一つ、

「闇を晴らす！！」

叫ぶ、すると、

「フィリス！」

「はい！」

エミリア、フィリスが自分の周りを囲う。此方は魔術構築を助ける術式の刻まれたナイフを地面に付きたて、マナを吸収し、魔法陣を生み出す。

「原初の力、古より全てを守りし我等が」

選んだ術は相当な時間が必要な高位魔術。この周囲全域を明るく照らし、それも長く維持するためには相応に強い魔術が必要だ。構成に意識を集中する。強く、深く

「を照らす者、汝全てを暴きし者」

剣の交差が間近に聞こえる。エミリアとフィリスが間際で戦い、そして苦戦している声が聞こえる。焦りが心を燃やそうとする。だが、焦るな。完成する。あと少し。

「闇を切り裂き、我等が敵を照らせ、【光烈！】」

光が全てを包む。魔法陣の中心に突き立てられたナイフから強力な光が放たれる。

闇を好む獣が光に散らされるように、エミリアとフィリスを襲っていた影の敵は、此方が生んだ強力な魔術の光に一瞬怯み、距離を置くように引いて行く。

「速攻！！」

エミリアの号令。地面に突き立てたナイフはそのまま、新たにもう一本ナイフを引き抜き、跳ぶ。退いた敵を追撃する。背後の二人も各々の敵を定めて、動き分かれた。

下がっていく敵の姿。両手足、鎧を身に纏い、剣を持つ……人間！

一人、動きが鈍いものがある。そいつを狙い、構える

「【雷光・牙】」

右掌を構え、撃つ。先日利用した魔術の改良版。束ね、収束し、光の速さで敵を討つ。狙いは足、逃げる動きを断つ一撃だ。青白い

光が走り、逃げる敵の足を焦がす。

『おお！？』

「死ね」

倒れた背を蹴り倒す。男、年は不明、痛んだ髪、傷まみれの古い鎧を備えた者。

狙うは首、振り下ろす。首を断ち、刈る。

一閃、だが弾かれる、籠手で守られた腕に弾かれた。同時に押さえていた足を弾かれ、”敵”が立ち上がった。両足は間違いなく焼いた筈だが、全く意に介さないと云うように。防護の術式でも使われたのか？

『貴様………！』

「………」

憎悪の声、身構え、睨む先、相対する”敵”

灯りに照らされ、正面から敵の姿が曝された。顔は、少なくとも若くは無い。瞳は片方刃傷でつぶれている。身に着けた鎧は古く、傷だらけだが、しかし、作りは安くない。何よりその胸に刻まれた紋章は、

「………っガイディア紋章！？」

それは間違いなく、自分の国の紋章を宿した鎧だ。だが何故、それを身に着ける事を許されるのは、国を守ることを許される騎士のみのはずだ………だというのに、何故？

『死ね、下人が！』

「っ!!」

反転、一瞬の此方の迷いを貫くように、騎士の剣が此方を構え、振られた。

第三十三話 意に沿わぬ退却

「キース！」

眩い光の中で、キースが敵の逆襲にあつたのが見えた。助けなければとは思うが、しかし此方にも敵はいる。完全な武装をした、まるで熟練の騎士のような動きをする敵が。

何者なんだ？この敵は。

疑問。そもそもこのバケモノだらけの山の中で何故こんな戦士が此処にいる？しかも、ガイディア国の紋章が刻まれた鎧を装備した奴が！

だが、考えている暇も無い。剣は迫る。応じねば死ぬ。

『おお！！』

「っ！」

大剣の乱舞、ナイフと小剣で受け、流し、弾く。受けきれないものではないが、獲物の違いが体に響く。きつい、逃げたい、だけど、何処に？

精神の隙が剣に届き、鈍る。大剣を受けたナイフが、その衝撃を受けきれずに弾き飛ばされる。残ったのは小剣一本、目の前の男がニヤリと笑った。

『死ねえ！』

大きく振りかぶる刃が月光に煌く。体が緊張で固まる。動けない。

息を呑んだ。

「フィリス！」

だが、剣が振り下ろされるその前に、横から衝撃が走り、動かなくなっていた体が吹き飛ばされた。ゴロゴロと草と土にまみれて、転がった。詰まっていた息が吐き出されて、顔を上げると、其処にはエミリアが私の代わりに、目の前の騎士と相対していた。

「エ、エミリア」

「目を覚ましなさい、武器を構えて」

叱咤に体を上げ、武器を構える。揺らぎかけていた意識を奮い立たせる。

だが、キースの魔術の光に照らされる影は幾つもある。

一体何故こんな大群が？

疑問がひたすら沸く。こんな場所に盗賊が現れるだなんて誰が思う。それもこんな大群で。ありえない状況が続くこの山だが、これは限度がある。

「何故私達を狙う！？」

問ってみるが、返事は無い。その代わり、というように、

「来ますよ！」

周囲に集っていた敵たちが一斉に襲い掛かってきた。

.....

「っかつは、げ、ほ、」

草むらの青臭い匂いに意識を取り戻す。先の奇襲、隙を突かれ、腹を深々と切り裂かれた。だが今腹を見ると、服が切り裂かれているだけでした。

服の下に防護術式が発動したのだ。仕込んでいなければ確実にあの世逝きだ。

「ぐ、あ、つぶねえ」

それでも衝撃は体を貫き、動きを鈍くする。ひよっとしたら骨の一つでも折れているのかも知れん、が、確認している暇も自分の身を守っている暇も無い。

「エミリア達は何処だ？」

立ち上がり、前を向くと、すぐさま答えが飛び込んできた。

何人もの敵に襲われ、追い詰められている二人の姿が直ぐそこにあったのだから。

「まずいなあ、オイ！」

悪態をついて、突撃する。この状況、敵の数は掴めないが、此方

のたった3人のパーティと比較して、相手は無数。数で攻められればどうしようもない。

退却だ。そうするしかない。

最悪このキャンプ地を捨ててでもこの場から離脱する。

エミリアとフィリスの元へと走る。

だが、二人は徐々に距離を離され、分断させられていた。各個撃破に戦い方を移したらしい。非常に戦略的だ。本当にこいつら騎士達じゃないだろうな!?

退却。その選択肢しか今は無い。だが、二人は離され、囲われている。その二人をいっぺんに救い出せるほど、俺の実力は超人じみていない。

選択だ。どちらを救うか。どちらを見捨てるか。

「つつーか、選択の余地は無い!」

エミリアとフィリス。己の中で優先順位はとっくに定まっている。エミリアを救う。フィリスを見捨てる。現実的な戦力としてみたとしても、それ以外の選択肢は無い。迷いや罪悪感を抱いている暇も無い。

エミリアの元へと走る。敵を背後から切って捨てる。エミリアの場所まで届いたら、そのまますぐさま離脱する。余裕があれば、その後、フィリスの元へ向かえば良い。

そう考えて、背後から敵達に一撃を食らわせてやるごと、そうしようとしたその時だった。

「キース！」

エミリアが、唐突に叫んだ。鋭いその声に体の動きが止まった。エミリアは此方を強く睨みつける。その意味は、その意図は、長らく彼女と付き合ってきたその経験から、直ぐに分かった。

分かった、分かったが、それは、

抗議の言葉を上げようとした、したが、エミリアの表情には一切揺らぎが無い。迷いが無い。こちら以上の意思を瞳に宿して、見つめ続けてくる。

ふざけるな、と言いたい。

言いたい、この女が一度言い出せば言う事を全く聞かないのは知っている。

「あーあ、クソツタレがあ！」

身体の向きを変える。先にはフィリス。”謎の敵”たちが今すぐにも圧殺されかねないほどに囲われていた。武器は無い。怪我をしたのか、足を引きずっている。

「ちい！」

腕に仕込んでいたナイフを取り出す。万一の際に取っておいた、入念な術式を仕込んだナイフだ。それを引き抜いて魔力を強く込め、構える。

「フィリス！伏せろ！」

「!!」

反射的にフィリスは頭を伏せた。逆に騎士達は、仕留めたと思っていた俺の突撃に、此方に視線を向け、注意が引き寄せられている。

「【焔刃・伸!】」

紅色が刃に乗り、奔る。瞬間で数メートル超になったその炎の剣を騎士達全員をなぎ倒すようにして横に薙ぐ。触れた瞬間一切合財を焼き焦がす剣を神速で振り抜く。

捕らえた。少なくとも避けられるような一撃ではなかった。

だが、しかし、

「っ?!」

相手を、群がる敵たちを捕らえた”手ごたえが無い”理由は不明。しかし考える暇は無い。

「行くぞ!」

「キース!」

片膝を付くフィリスを抱きかかえ、その場から飛び出す。

エミリアを放置したまま、

.....

.....

「い……ぞ！」

「……ス！？」

そんな声が闇の奥へと消えていきます。キースが此方の意図を理解して、フィリスを連れて逃げてくれたのでしょうか。やはり彼はありがたいですし、有能ですね。

とはいえ、

「……むっ」

キースの光の魔術も術者が離れていくうちに徐々に消え、闇が深くなっていきました。

それでもよくよく目を凝らして周囲を見渡せば、無数の影が見えてきます。鎧を着込み、剣を構え、まるで騎士のような格好をして、なおかつ騎士のように戦う、ガイディア国の紋章を背負った謎の集団。

”ある程度見当”はついているのですが……

いや、なんとというか、不気味ですね……ってか、怖い。キース逃がさなきゃ良かったと後悔したくなってきました。

じりじりと、闇の中から迫る影、此方の戦力は剣とナイフが一本ずつ、他、一応様々な武器もありますが、しかしこの数相手では、まあ、難しいでしょう。

「というわけで」

既に詰んだ状況。後やるべきことは一つ。ナイフを放り捨て、剣を地面に付きたて、両手を元気よく天に向けて、

「降参します」

一瞬、戸惑うような気配を周囲から感じます。あら意外、問答無用で殺しにかかって来ると思っていたのですが、これはラッキーですね。

と、敵の集団の中から一人、前へと進み出てきました。森の繁みの影の間から零れる月光に照らされるその顔は、ごつい顔、片方の瞳に傷のある、険しい表情のおっさんでした。

その彼は、両手を上げる私に近づくと、じっと見て、

『武器をまだ隠し持っているな』

どこか頭に響くような声で、男は私のナイフを仕込んでいる腕を睨みつけてきました。いやだって、問答無用で襲い掛かられたら私死んじゃうんですもん。

そう、抗議の声をあげようとすると、男は軽く腕を引いて、

「つぐあ」

腹に、一撃、拳を叩き込んでくれやがりました。鳩尾から臓腑を的確に叩き込んだ一撃は、一気に意識を薄れさせていって、

『連れて行くぞ』

薄れ行く意識の中、そんな言葉を聞きながら、

「ぼ、ぼうりょく、はんたい」

そう呻きつつ、私は、気を失いました。

第三十四話 八つ当たりと涙

状況は最悪だった。

数の利が明らかに相手のほうが勝る状況、おまけに向こうのほう
が地の利があるのか、変幻自在に動き、此方の攻撃を避けていく。
逃げなければならぬ。だが、既にエミリアとも分断され、困わ
れて逃げ道も無い。

この山の中で、魔物に対してばかり警戒していた。それは正しい
選択だった。しかし、だからこそ、このイレギュラーに対応しきれ
なくなってしまうている。

危機だ。現実的に考えて、最悪に部類するレベルの。

危機と言うのは、死というものは、こういうものだということ
知っている。酷くあつけなく、そして降りかかる時はあつという間
に命を刈り取っていく。

「つぐ、くう」

分かっている。分かっているが、こんな形で死ぬ事になるなんて
納得できはしない。

剣が、剣が幾本も此方を向いている。悪意が、殺意が、敵意が、
身体を貫いていく。

数瞬の後、刃が来る。命を刈り取る一撃が。
死ぬ。そう思った。

だが、その次の瞬間、

「フィリス！伏せろ！」

「！！！」

キースの声、反射的に身体を伏せる、すると直後に描かれる焰色の剣、

「【焰刃・伸！】」

『おおおお！？』

囲み、殺そうと動いていた騎士達が身体を怯ませ退き、あるいはその剣に身体を焼かれ地面に転がり、一瞬包囲網が解かれる。そしてその隙を見計らうように、

「行くぞ！」

体が一気に浮き上がる。抱えられたのだと気づいた頃には既にキースは走り出し、その場から逃れていた エミリアを放置したまま。

「キース！？」

声をかけるが、キースは返事をよこさない。ひたすら全速力でその場から走り出す。キャンプ地でキースが残した魔術の灯りが遠ざかる。エミリアの気配が遠くなる。

「キース、待て！キース！」

「黙ってる！」

それだけ言い切つて、キースは逃走を続ける。だが、背後からは追いかけてくる気配は無い。此方をただ殺す事が目的ではなかったのか、分からなかった。

後から追ってくる者はいない。それが分かってもキースは延々と走り続ける。既にキャンプ地からどれくらい離れてしまったのかも分からない。どれくらい時間が過ぎたのかは分からない。ひたすらキースは私を抱えて奔り続け、光の全く無い道を疾走し続けた。

どうして道が分かるのかと思つたが、ひよつとしたら魔術を使っているのかもしれない。そんな事を場違いな事も思つていた。

そしてそれから更に時間が過ぎ、地形がやや斜面状になりつつあると感じ始めた頃、

「つきや?!」

途端にキースが走るのを止めた。そしてどさつと身体が地面に下るされる。一瞬目が回つたが、頭を振れば目の前にキースがいた。辺りは星の光が僅かに差し込む大樹の下、確か、キャンプ地を決めるにあたり、候補の一つだった場所だ。

キースはそこで大きく息を吐くと、幾らかの魔道具を地面に置き、此処を安全地帯にするための準備を始めていた。それ確かにに必要なら、だが、それより、

「キース！何故！」

「足を出せ。治療する」

「つえ？」

その言葉に反応が遅れると、キースは黙つて、私が斬られた足に

触れた。集団で囲まれて避け切れなかったのだ。服が破け、肉が裂けて血が出ている

「【その身を癒せ】」
「っ」

ギリと、傷が焦れるように癒されていく。しびれるような感覚に息を飲んだ。光は傷を飲み込むようにしていく。数分も絶てば傷跡には赤い線が残るだけになった。

「動くなよ。また開くぞ」

「何故私を助けたんだ。エミリアは」

「あいつがそう望んだんだ。」

キースはそう言うて捨てるのと治癒術を止め、包帯を取り出した。何処に持っているのだろうというくらい色々ときーは色々としている。そしてその包帯を慣れた手付きでぐるぐると巻きつけ、結ぶ。

「……望んだって？」

「あいつはお前のほうが危ういと思った。だからお前を助けるって視線を向けてきた。」

彼女は事戦場に置いて現実的な効率主義者だ。そしてこの探索では、このパーティのたった一人でも欠けるだけで、探索は難しくなる。それを彼女が分かっていたから、エミリアは私を助けるよう指示したのだ。

結果としてキースは彼女ではなく私を助け、エミリアは一人置き去りになった。

それを聞くと、こうして命が助かった事を喜ぶ事が全く出来なかった。むしろ自分の無力さへの空しさに包まれ、氣力を失わせていくのを感じた。

「……すまない」

それが誰に対しての謝罪なのかは分からなかった。だが、キースは此方に視線を向けてはくれず、

「何を謝ってんだよ」

「私が弱かったから、私を助ける羽目になったのだろう」

私が強ければ、キースは素直にエミリアを助けて引いただろう。

自分が弱かったから、彼は彼女を見捨てなければならなかった。彼が、エミリアを慕っているのは知っている。だからこそ、謝った。だがキースは無表情のままに、

「お前に非があるわけじゃない。そしてお前が謝った所で事態は解決に向かわない」

キースは淡々と説明をし終わる。言葉には感情の色がなく、言わずとも分かる冷たさがあった。当然だ。彼は自分を助けたかわげじゃない。助けたかったのはエミリアだ。今こうしてエミリアを放置し、自分を助けたと言う状況そのものが、不服なのだ。

魔道具を周囲に設置し、結界を発生させる。簡易の寢床を作り出し始める。彼にかけるべき言葉を失って、私は沈黙し、項垂れた。

.....

.....

誰に何をやつあたりしているんだ、と、キースは自分の有様に溜息を吐いた。

エミリアを助けられなかった。あの現状ではやむを得ない。ソレは分かる。そしてフィリスには何の罪も無く、失敗もしてはいない。何よりこの現状はエミリアが望んだ事だ。

ましてや、最初、自分はフィリスを見捨てようとした。彼女が謝るところか、まず俺がフィリスに詫びるべきだ。それは分かっている。分かっている。だが、それでも自分の感情を制御するのは難しい。アイツの事ともなれば尚更だ。

気を紛らわすように、現状の問題についてただ考える。

キャンプ地を捨てた。ならせめて、この夜をやり過ぎすだけの寝床の準備をしなければならぬ。この山で、視界の効かない闇夜は危険すぎる。だが、灯りを灯すわけにも行かない。先のように、あの『敵』が現れる恐れがある。その面での軽微も必須だ。

最初からあの『敵』がでると分かっていたら、しっかりと対応できたのに。

そう思うと、余計に苛立ちが増す。倒せない敵ではなかった。だが、容易い敵ではなく、その上此方には何の準備もなかった。それが敗因だ。

「.....クソ」

募る後悔を吐き出すように頭を掻いた。どうしたって、なにをしていたってくだらない考えがぐるぐるすると頭をめくり続けていく。考えた所で何の意味も無いというのに。

するとフィリスが、この沈黙をやぶるように此方に近づいてきた。彼女の顔を見ると、また何かいらぬ事が口か飛び出そうだったので目を逸らし、尋ねた。

「何だ」

「準備を手伝う」

「けが人は寝てる」

間髪無くそう言ってフィリスの言葉を捨てて、自分で後悔した。だから、何故彼女にあたっていているんだこの馬鹿。完全に八つ当たりだ。自分がやっている事は普通に最悪以外の何物でもないぞ？

「……あー、くそ、」

深く考えるのは止めよう。何時もどおりだ。何も無かったように接するのだ。

と、気づけば魔具が一つ足りない。マナを沈静化させ、此方の気配を外部に漏らさないための術式がこめられた代物だ。あるのは、フィリスの隣に置いた医療具の横。

「おい、その魔具、こっちに投げてくれ」

可能な限り感情を抑制させるようにして、フィリスに声を書ける。だが、反応は無い。首をかしげ、後ろを振り返ると、

「……おい？」

フィリスは声も無く泣いていた。ボロボロと涙を零して。

「う、お」

思わず声が出た。あまりにも唐突であったからか、それともあまりにも彼女のキャラに合わなかったからだろうか。

「な、何泣いてんだ!？」

「す、まん」

泣き止もうとしているのか、何度も瞳を拭い続けるが、それでも次から次に涙を零していく。よくもそこまで泣き続けることができると場違いな事を思った。

「どうしたんだいきなり」

「い、いや、違うっ。泣くつもりは、」

どうやら泣き始めた本人が一番驚いているらしい。半ば混乱しながら何度も顔を拭いながらフィリスは泣き顔を戻そうと試みていた。しかしどうにもこうにも元には戻らない。ボロボロボロボロと涙を流し続ける。

キースは、言葉が出ぬまま、彼女の泣き顔を見つめ続ける。

女を泣かせた経験、というのには実は豊富だったりするのだが、あまりに意外性が大きすぎて反応が出遅れた。普通に考えれば、彼女を泣かしたのは自分のやつあたりが原因であり、どう考えても非があるのは自分なのだが、

しかし、それでもいきなり泣き出すなんて。

否、そもそも彼女の何を知っているんだ？俺は

彼女の事を自分は全く知らない。知らないのだ。それなのに何が意外だ？何が突然だ？こっちが勝手に彼女を決め付けて、一方的に突き放し、拳句やつあたりをして傷つけたのだ。

嗚呼、なんて最悪。キースは自分をそう自嘲し、静かに彼女の頭に置いた。

「……悪かった」

そのまま頭を撫でると、若干硬くなっていたフィリスの体が緩むのを感じた。まるで幼い子供のようだ。いや、ひよっとしたらそんなのかもしれない。

知らないのなら知っていけばいい。後悔するのはその後だ。

そう考える。エミリアを助けられなかった後悔とは別に、彼女を助けられてよかったと、そう素直に思えるように、自分を務める。そうする事で心を落ち着けていった。

.....

瞳から零れ続ける涙を拭いつづけて、ようやく息をついた。

ほんの少し冷たくされたからって、自分が泣き出すだなんて思い

もしなかった。情けなくて顔が赤くなる。この時ばかりは闇夜でよかったですと思う。

昔はこうだった。辛い事があればすぐ泣いた。だけど奴隷として生きていく中で、何かを望む事を諦めていつて、最後には悲しむ事も放棄したのだ。でも今は、辛いけど、楽しい事が一杯あって、色々な事を思い出してしまった。

気づかないうちに、心が真つ当な機能を取り戻し始めていたのだ。辛い事は耐えられる。だけど、嬉しい事、悲しい事に耐性がなさ過ぎる。

早く慣れなければならぬ。そう心に決めた。

「落ち着いたか」

「あ、あ、すまない」

キースの呼びかけに前を向く。僅かに瞳は熱を持って腫れてるが、気にしても仕方が無い。キースはこちらを見て少しきこちないが笑みを浮かべ、

「当たり前だが、戦力として期待しているからな」

「分かっている」

エミリアが私を助けたのは、ただただ慈悲深く自己犠牲の精神を發揮した、そんな訳が無い。キースとてそうだ。救われた命である以上、戦力として力を發揮しなければならぬ。

「それで、どうするんだ。これから」

結界の準備は既に終わったようだ、仄かな魔術の明かりを利用し、一息つくくと、キースと私は再び話し始めた。これからどうするべきなのか。いや、どうすべきかは決まっている。

エミリアを助ける。それは二人の間で既に同意している。

問題は、どうやって助けに行くか。だが、

「そもそも彼女が今生きているのかも」

「いや、それは分かっている」

キースはそう言うの一つ、何か複雑な構成をした細工を、魔道具を取り出した。それを地面に転がすと、彼は呪文を紡ぎ始める。

「【我が縁の居場所を示せ】」

途端、魔道具が仄かに橙色の光を放ち、脈動を始めた。そして僅かに浮き上がると、ゆっくりとこの大樹から右の方向。山の頂上へと続く道を指した。

「これは？」

「俺が知るマナを辿る魔術だ。範囲も狭いし、大体の方向しか分からないがな」

だが、これが発動に成功したと言う事は、生きていたと言う事だ。と、キースは語る。もしエミリアが死んでいるのなら、マナの反応はかなり揺らぐそつだ。

「キャンプ地とは既に場所は違う。連れ去られてると考えるべきだな」

「では何処に？」

「……上だ。この山を登っていつている」

頂上へ向かっているという事、それはこの危険なロステム山を登山している事に他ならない。それだけとっても信じられない気分だ。此処に身を置いていて、深く実感している。この山の危険さは。

「……そもそもあいつ等は何者なんだ？」

騎士の鎧に身を包んだ、手練の謎の集団。こんな危険地域としか言いようの無いこの山の中で、何故あんなに集まっていたのか。

「……一つ、可能性は考えているがな」

「何だ？他国のスパイとか？」

「そうじゃない。根本から考え直せ。おかしいとは思わないのか？」

「何が」

キースは至極あっさりとした

「この山に、普通、人間がいるか？」

第三十四話 八つ当たりと涙（後書き）

分かった。この小説のヒロインはフィリスだ。

いかん、主人公をちゃんと活躍させねば……がんばります。

第三十五話 亡霊の作り方

「……ぬ、」

腹部の軽い痛みと、身体を揺らす振動に、私は目を覚ました。一瞬漏れかけた声を抑え、薄っすらと瞳を開いていきます。見えたのは、何者かの背、どうやら私の身体は担がれ、運ばれているようです。

殺されなかった。まずはこの点を喜ぶべきでしょう。

しかし私を運ぶと言う事は、何らかの目的が私に対してあるという事。难道でしょうか？まさか体目当てとか？それなら真っ先にフイリスを狙いそうなものですが。向こうは殺しかねない勢いでしたし。

まあ、彼らの目的は今はどうでも良いでしょう。いずれ分かる事。

それより問題視するべき事は、今彼らがこのロステム山を登っていると言う事。

しかも足取りから見ると、かなり行き来慣れしている様子で。

正体不明のこの敵の皆さんは、どうやらこの山の何処かにアジトを構えているようですが……しかし、

……ふむ

一つの予感。私を背負う騎士達の正体、勿論ありとあらゆる可能性はありますが、その中でも、この特殊な山の上で最もありえうるものを選ぶとしたら。

「……」
「……」

騎士たちは、移動の間は全くの無言でした。私達が山を散策していた時のような、指示を矢次に飛ばし、魔術を発動するような慌しさとは無言の動き。数の利を利用しているのか、とも思いましたがそうではなく、ただ、ひたすら登るだけ、と言うような動き。

魔術も魔具も使わず、ただただ登るだけ。

まるでなんでもない山道へハイキングにでも出かけたかのように。

それに、何時魔物が現れてきても対処できるように身体を僅かに身構えていたのですが一向に魔物が襲い掛かってくる気配がありません。確かに魔物の気配は感じると言うのに、まるでこちらに向かってくる様子も無い。

鎧、身じろぎせずに、動かぬまま、体の揺れにあわせるようにして、そつとその鎧に触れる。掌に伝わる感触は確かに、金属製の鎧そのもの。だけど、その鎧から伝わる筈の”人の気配”が、無い。

なるほど。

推測は完了しました。後は、

「……」

担がれたまま、揺らぎに任せて、腕の裾からそつと魔具を一つ転がします。小型で、発動は時限式に設定する事も出来る便利アイテム。それを足音に合わせて、ぼとりと落とす。上手く地面に落下し

たそれは、この【敵】さんがたの行進によって土を被り、あつとい
う間に見えなくなり

まあ、今はこれくらいでしょうか。出来る事は

後は、キースたちに期待しましょう。

.....

ロステム山、簡易休憩ポイント。

「人間じゃない？」

「ああ、」

キースの言葉に、私はどう答えたら良いか分からず言葉を詰まら
せた。人間じゃない？確かにバケモノじみた感じはしたが、あれは
どう見たって人間だった。

「魔物が人間に化けていたと言う事か？」

「違う。あれはたぶん人間だ。」元は”」

その物言いに、やはり意味が分からず首をかしげた。キースは更
に言葉を重ね、

「あいつ等は死人だ」
「……………」

死人、という表現に、私は言葉を失った。なんとというか急激に薄ら寒くなって来たような気がする。背中につぞつぞとした気味の悪さと、鳥肌が走った。

「……………、しにん？」

「いや、怖がらせるつもりは無かったんだがな。そんな顔するな」

キースは呆れたように手を振った。いやでも普通、今まで命がけで戦った相手が死人だなんて言われて、平気な表情をしていられるほうがおかしいと思うが。

そうだ。あの謎の騎士たちと、私達は普通に戦っていたのだ。普通に剣を交え、そして命を駆けて戦った。それなのに、いきなり死人といわれても理解できない。

キースはどう説明したものか、と呟きながら、

「【マナ】についてどれだけ知っている？」

「……………確か、魔術の元でしょう？」

そう、確かエミリアが言っていた、気がする。あまり覚えていないが

「正確には万物の元素だ」

キースは私の言葉を修正し、更に口を開いた。

「【マナ】はあらゆる物質と現象を構成する最も根本的な物質だ。そしてそれは人体も同じ。俺達の血も、肉も、全てはマナから生まれている」

キースの言葉に、私は自分の掌を見てみる。マナ、普段は視界にすら移らないこの世を満たす万物の創造主。それは私を構成するものでもあると彼は言う。だが、いくら自分の掌を見てもそんな自覚は湧いては来なかった。

「で、だ。人間が死ぬと、肉体からマナが離れ、残る。それはそいつが生きている間、常に共にあったマナであり、ソイツの影響を常に受け続けてきたマナの塊だ」

マナは常に何かの影響を受け、与える。人体に在り続けたマナは、当然、その人体の特性、その死者の特性をある程度まで反映したマナになる。

「大抵、そうしたマナはあつという間に霧散する。大地や生物に還元され、それが新たな生命の形に変わるってわけだ」

これがこの世界の仕組み、マナの循環だ。マナが物質になり、生まれ、死に、再びマナになる。それがまた別の物質を作り出す。この循環。しかし、

「ところが、その場で既に、極端に高い濃度のマナが存在している場合、影響を受けてマナの塊の霧散がキャンセルされてしまう場合がある。そしてその場合、そのまま再び肉体にマナが宿ったり、あるいは別の物体に変化を遂げたりしてしまう」

そうした物質は、本来のマナの循環で生まれる物質とは大きく変

わる。なにしろ以前存在した物質の影響をそのままぶち込まれるのだ。結果として世界の理から外れた物質が生まれる。

「例えば霊であったり、リビングデッドであったり変わる」

世の中で怪奇と呼ばれる現象は大抵、こうした歪みから生まれる現象によるものだ。子供の頃きかされるような幽霊話なんてのも、その元となる話にはこうした裏があることが多い。

と、其処まで聞かされて、私は目を丸くした。実際、今まで幽霊なるものが得体の知れない存在だと恐れていたが、しかし聞かされてみると、実は単なる現象だ。拍子抜けと言うほど割り切れはしないが、今まで抱いていた理解できないが故の恐怖というものがなくなってしまうた。

「じゃあ、オバケって全て元は人間なのか？」

「別に人に限った話じゃないさ。魔物だったり、他の生物だったり色々だ。そういった生物の残したマナが、形になる」

なるほど、と、なんとか理解し、しかしそれなら、

「じゃあ、彼らは？」

「まあ、元は人間だろう。この山で多分死んで、だけど此処の高純度のマナに引きずられて、未だこの山に留まらされているんだ」

「……そんな奴等からどうやってエミリアを取り戻すんだ？」

死人と言つ言葉に衝撃を受けたが、何よりもこれからそんな奴等からエミリアを救わなければならぬと言つ事実が私の心を竦ませていた。全く持って、お化けと戦うなんてイメージが湧かない。どうすれば良いのだ？十字架と聖水でも持てば良いのか？

「ま、そこら辺の対策は俺が考えるから心配はするな。ただ、問題は」

と、キースは区切って、頭を搔いた。

「どつやって、あいつ等に追いつくかってとこだ」

彼らは人間ではない。それ故にこの異常な山に対して順応している。この過酷な地形にも、凶悪な魔物にも対応できる。しかし、私達にはそんな能力は無い。

「多分、エミリアは途中で気が付けば道に標でも残してはくれるだろうが……」

エミリア、キース、私の三人が必死になってようやく半ばまで道を切り開いたのだ。残る半分、より苦しくなる事は目に見えているのに、エミリアが無事である間にその道のりを乗り越えるなんて、現実的じゃない。

「近道とか、無いのか？」

「そんなもんがあったら最初っから使ってる」

「なら他の方法は」

「んな裏技あるものか……と、言いたい所なんだがな」

キースはそう言い、どこか苦々しい笑みを浮かべ、

「一つ、方法が無い事も無い」

「それは？」

「まず言うておく」

キースはそう言つて、私の方へと向き直して、

「これはエミリアも最初からロステム山攻略手段から外したくらい、不安定で成功確率の低い方法だ。下手すれば俺もお前も死ぬ。そんなやり方だ」

キースはどこか歯を食いしばるような物言いでそう告げた。彼がそれほどまでの表情をする以上、今からとろうとしているその裏技とやらはかなりの危険を伴うものなのだろう。

だが、

「それでもやるか？」

「やる」

「そうかい」

既に互いに決意は固めているのだ。ならば、最早迷いはしない

キースはその答えを待っていたのか、しかと頷き、そして口を開けた。

「じゃ、探しに行くぞ。出来る限り早いほうがいい」

「探すつて、何を？」

問いに、キースは苦々しく口を開き、

「魔獣だ。マナを統べる方法を身につけたこの山の上位者を探す」

そう答え、更に、

「出来る限り強者が好ましいが……何よりの条件として」

「条件？」

「メスだ」

キースの言葉に、は？と口が開いた。

「強力な魔獣の、メスが好ましい」

第三十五話 亡霊の作り方（後書き）

まずは謝罪を、ごめんなさい！

ええ、とんでもなく更新が遅れました事を此処に謝罪します。

現在魔術学院の方に振り回されて中々書き進める事が出来ない状態で、じゃあ同時連載なんてするんじゃないかねって言うね、ハハッ。

ともあれもう少しすれば更新も安定すると思うのでどうかお待ちを。

第三十六話 魔獣

魔獣

魔物の中でも、マナを取り込み、己が力に変換出来るようになった生物の事を指す。通常生命は誰しもマナを無意識的に取り込んでいるが、魔獣と呼ばれる生物はそれを意識的に行い、更には人間の魔術師と同じように魔力として変換すら出来るものもいる。

その身体能力は種としての従来ものソレとは比較にならない程に向上し、更にはその生態の根底から様々な形で進化していく。時には人間と同等以上の知性を身につける魔獣も現れる。

しかしそうした力や知性を得た魔物が、人間に好意的であるとは限らない。むしろ人間を嫌い、見かけたら好んで襲いかかると言う場合も珍しくは無い。

野生の力と高い知性を得た魔獣に対抗する事は容易ではなく、

無残に殺されるケースも少なくは無い。

故に、魔獣との遭遇は、未開拓地域の探索などにおいては断固として避けなければならぬのが常識だ。もし万が一、遭遇した場合、全力で逃げなければ、確実に死が待っている。

「それなのに、それをわざわざ探しているんだから笑える」

日が昇りはじめたばかりの、空もまだ白くかかっている明朝

キースは、鬱蒼と茂る木々の合い間をくぐりながら、引きつった笑みを浮かべた。

魔獣探し、エミリアの迅速な救出には必須な存在、とはいえ、か

なりの綱渡りだ。魔獣の生態を少しでも知っていればそれは直ぐに分かる。人間が叶う存在ではないのだ。

だが、そんな魔獣を探す方法は非常に簡単だ。

つまり所、今までどんな事があるかと断固として通ろうとしなかった”危険地帯”を探せば良い。マナの濃いの中の中でもより濃厚でも、更に強い、最早どれだけ魔力の素養の無いものですらくつきりと視界に映るようなレベルの濃度の空間に。

元々このロステム山は強力なマナスポットだ。それ故にマナの影響で生まれる突然変異の魔獣は生まれやすい。だから、探そうと思えば探せる。

問題は、条件が合うかどうか、

そしてその後だ。

と、そう思っていると、背後から付いて来ているフィリスがすそを軽く引いてきた、振り返ると、彼女は僅かに胸を押さえ、

「……何だか、圧迫感が」

「マナの影響だな。流石に此処まで濃いと感じるわな」

視界に薄っすらと移る透き通る青緑のカーテン。視覚出来るマナなんて俺でもあまり見たことが無い。マナは別段人体に悪影響を与えるようなものではないが、しかし普段から常に接しているものだ。当然、その量が多くなれば感覚として分かるだろう。それが圧迫感と彼女は感じているらしい

「気をつける。周囲のマナに下手に刺激を与えると”何か”になる

ぞ」

「何か？」

「例えば、魔術が無差別に連続発動する。火薬が周囲に敷き詰められていると思え」

少し極端な例えだったが、瞬間、フィリスは身体を小さくさせた。勿論そんな事をした所で意味があるわけではないが、しかしそれくらい緊張を持ってくれたほうが良い。本当に、今やっている事は、第一級のタブーなのだ。緊張しすぎるに越した事は無い。

二人で僅かに身体を小さくさせながら、更に奥深くに進んでいく。それにつれてよりマナの濃度が深くなり、しかしそれとは逆に魔物の存在がまるでなくなってくる。身体を小さくさせていたリーンもそれに気が付いたのか、周囲を見渡し、

「魔物が……どうして？」

答えは単純だ。

「俺達が今までの探索であつた魔物が、絶対に避けて通る場所なんだ、此処は」

「あんなバケモノ達が……避けて通る？」

今まで途中で出会ってきた魔物たちも、直接戦う事を避けてきたようなバケモノのような姿だった。だが、それらの基準はあくまでも俺達人間のものだ。

「あいつらは、我が物顔で山で大暴れしていたじゃないか」

「我が物顔、なんてもんじゃねーよ。そもそもあいつ等、しょっち

ゆう別の魔物と争ったりしていたらどう？」

フィリスはこくりと頷く。そう、そうして魔物たちが他の魔物となんども争っているからこそ、それ故にその隙を突くことが出来た。だが、

「あれはな、自分達よりも強大な魔物や魔獣たちに追いやられた敗北者さ。安定した食料を補給できる場所を失って、彷徨っていたのさ」

そう、真の強者なら、わざわざあいつた、マナの影響の薄い、俺達でも通れるような場所にいる必要は無い。荒れ狂う環境の中を悠々と暮らしていけるはずだ。

「じゃあ、あいつ等が争っていたのは」

「負け犬同士が、残された安全な場所を求めて争ってたって事だ」

ほんの僅かな隙間、このマナスポットの環境でも比較的穏やかな環境。それ故にあそこには魔物が終結し、しかし、この山ではそれでも最も安全な場所だった。

フィリスは、僅かに眉間に皺を寄せ、

「……つまりここから先にいるのは」

「あの魔物たちを追い払って良いナワバリを独占している、上位者だ」

フィリスはその答えに、泣いた。気持ちは分かるが泣くな。

.....
.....
キースと共に、更に静かな森の先へと進んでいく。魔物の気配は本当にめつきり無くなり、小さな鳥の囀りや、小さな小動物ぐらいしか見なかった。視覚に映るマナの光の美しさも合わさって、とても此処がこの山の中でも最も危険な地域であるようには思えなかった。

だが、マナの圧迫感とはまた別に、言葉にもならない緊張感が確かにあった。

そして其処から更に進んでいくと、キースが、

「.....いたぞ、運が良い。条件にも合ってる」

言われて、彼の肩越しに覗いてみると、確かにいた。

茂みの奥、人の手が入っているかのように綺麗に整えられた草原の奥で、自然に生まれた木々のベットに寝そべる影が一つ。その影は、これまで会って来た魔物達よりも遥かに小さな、

「.....少女？」

それは、私と同じくらいの少女

しかし、衣服のように全身を覆った紅と紺の入り混じる体毛、獣の耳と細く長い尻尾、何より先ほどよりも遥かに強く感じさせる威圧感が、彼女の人外を証明していた。

「あれが魔獣だ」

「人のような姿だな……」

「知性を得た魔獣は、獣の体の不便さに耐えられない。それが出来るものは大抵、より便利な身体に形を変える。そしてその変身の参考にするのは大抵ヒトだ」

二本の足で歩き、細かな作業に向く器用な指先を持つ生物。形だけ真似るならシンプルで便利なのだ。勿論、そうした真似が出来るのは強力な力を持っている証でもあるが。

「行くぞ」

「不用意じゃ？」

「向こうはとづくにこっちに気づいている。大体魔獣相手に礼儀も何も無い。」

「つまり、当たって砕けると？」

「そう言うこと」

キースは本当に、特に何の用意も無くそのまま身体を起こし、茂みから身体を晒した。一瞬息を呑むが、私もそれに続く。それなりに音は立てたが、魔獣はこちらに視線も向けなかった。

近づくに連れて、魔獣の姿がはつきりと見えてきた。太く伸びた幹に寝転ぶ子供のような体格の魔獣は、背筋が震えるような美しさがあった。

隠されることも無く晒される、野生を生きる者の無駄の無い細く洗礼された四肢。それとはまた逆に泥臭さを感じさせない淡い紅の毛並み。脇から臍に至る紺の線。すらりと伸びた尾と耳。

人に近い姿でありながら、それとはまるで違う、上位者。知識の無い私でもそれが直ぐに分かった。

そんな彼女に対して、キースは無遠慮に、という風に近づいてい

く。向こうは気づいている、と彼は言うが、こんなにも躊躇無く近づいて良いのか、怖くなっていた。キースはそのまま進みでて、そして一つ、頭を下げると、

「この山の支配者、高位の魔獣と見込み、一つ、頼みがある」

返答は無い。魔獣はひたすらその場で寝そべったままだ。キースもまた、そんな彼女の反応に対して、特にこれと言って表情を動かさず、言葉を繰り返し、

「頼みがある」

『失せろ』

次の瞬間、暴風が吹き荒れた。

「っ！ー！！」

「っきやあああ！？」

まるで巨大な鳥が眼前で羽ばたいているかのように、しかしそれよりも遙かに明確で、攻撃的な風だった。身動きもとれず、この場から吹き飛ばされないように耐えられるのが精一杯だった。

風が止む。あまりに強大な風の勢いに

「……頼みが、ある」

『ゴミが口を利くな』

そう言って、少女は気だるげに立ち上がる。やはり息を呑むほどに美しい彼女は、明確な苛立ちを顔に露わにしていた。

『今すぐ殺しても良いんだぞ。消える』

魔獣は怒っていた。そしてそんなのは当たり前だと思った。普通の人間でも、いきなり玄関に押し入ってきた他人の頼みごとなんて聞く訳が無い。ましてや相手は魔獣だ。殺す理由はあっても助ける理由はまるで無い。

「頼みを聞いてくれない限り、此处を動く気は無い」
『ならば、死ね』

瞬間、更におぞましい動きを見せた。ふっと、影が差したとそう思うと、彼女の姿が見る見るうちに変わっていく。ほんの一瞬で数倍、数十倍へと、

「ま、こうなるわな」

キースは落ち着きの払った言葉を口にしたが、私は口が開きっぱなしになった。目の前の少女が巨大なバケモノに変わっていく様を、冷静に眺めていられる訳が無かった。

そして、その変身が終わり

「……デ、カ、」

「……王虎。いや、女王虎か？」

巨大な、それはもう巨大な、紅色の虎が現れた。つい先ほどまで合った、少女としての愛らしさは完全に消え去り、ただただ種を超越した気高く美しい存在が其処にはいた。

『己が身の程も弁えぬ愚者が。惨たらしく食い殺してくれる』

凶悪に牙を剥き、おぞましい声で唸る。その声だけで空間そのものが怯えるように震えが走った。存在しないとすら思っていた獣達が更に逃げていく。この魔境の王者の目の届かぬ所へと行くために、
だが、私達には逃げ場は無い。

「ど、ど、ど、どうするんだ?! た、倒すのか!?!」
「噛みまくってるぞ。そんなもって、倒せる訳が無いだろうこんな
の」

キースは恐怖を押し殺すような笑みを浮かべて、ナイフを引き抜いた。目の前のバケモノに対してそれは、あまりに頼りなかった。

「ならどうするっ」

「拠点まで引き寄せる。あそこにはエミリアと用意した罠もある」
そう言って、私に顔を向け、

「兎に角、一瞬で良い。動きを止める。それさえ出来れば後は俺が何とかする」

次の瞬間、獣の咆哮が鳴り響く。私もショートソードを抜き、キースと立ち並んだ。

そして始まった。絶望的な戦いが。

第三十六話 魔獣（後書き）

10 / 9

時間書くの忘れてた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5166j/>

びんぼー錬金術師の借金返済術

2011年10月9日13時16分発行